

---

# ツインシンフォニー 中世に飛翔するもうひとりの使い魔

先駆ミヤマ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ツインシンフォニー 中世に飛翔するもうひとりの使い魔

### 【Nコード】

N8321P

### 【作者名】

先駆ミヤマ

### 【あらすじ】

ここに世界をめぐる男がいた。 神々と悪魔の世界を起点にガンダム、エヴァ、スパロボ、DQ、FF、KH、コードギアス、ゲーム王、モンハンなどの世界を回り続けてきた男。 彼らの中のさらに優秀な戦士たちのチームが存在し、そのリーダーとして動く悪魔の戦士、ガルーム・ザ・レジエンド。

仮面ライダー、スーパー戦隊の世界の旅を終え新たな世界へ。 降りたったのは化学の進行がない中世。

今、主と使い魔たちの物語が幕を開く。

## 見つけたもの（前書き）

この物語はギルム編と途中からクロスしていきます。ガルームの視点とギルムの視点の二種から書くのでそこら辺は…まあ、ご了承ください。

ガルーム・ザ・レジェンド

黒髪の青年。黒曜石の様な真つ黒な瞳、切れ目で常に相手を睨みつけているように見える。身長は176cm 日本人にしては大きい。が外人から見れば少々小柄。性格は氷のように冷たく闇のごとく冷酷。

## 見つけたもの

俺はガルーム。世界の中をさまよう罪人だ。俺はある世界に降り立った。名はリアルマジック地方。広すぎてその範囲はわからないが、魔法の世界らしい。だが…文句の一つぐらいは言いたい。ここはリアルなんかじゃない。ここは中世だ……。

俺は闇夜に降り立ち最も強い魔力の持ち主を探していた。この世界を、守るためには最も強きもの、あるいはもっとも異質なものを探す必要性があった。

ようやくこの場所も分かってきた。ここはハルケギニア大陸、トリスティンという国の学校らしい。

図書館らしき場所は蝋燭だらけ。本以外何にもない。検索のためのパソコンはもちろん、監視の兵士一人もいない。しかも棚は人間の身長では足りないほど高い。大体7mはあるな。

本は見たこともない字で書かれてあったが…リンゴの絵が描いてある絵と解説があったのでそこで文字を理解した。

俺の能力に見たことも聞いたこともない文字を理解する能力がある。ただし、条件がある。その文字、たった一つでいい。正確に理解すること。『あ』という文字を『い』と理解したら他の文字は読めない。だが理解できれば他の文字や言葉を自然と理解できるようになる。

その時俺の剣が声をかけてきた。

『ガールーム、強き魔力の持ち主を感知した。』

「そうか。礼を言うソウル。」

俺の剣、ソウルブレード。魂は決して揺れ動かない。その力を操る妖しの剣…。言語を口にし俺のサポートをしてくれる愛刀だ。俺は本を閉じ再び闇に身を溶かした。その場所へ、剣が感じた場所へ。それが俺ができることだと信じて。

「ガキじゃないか。」

今は夜。 闇の中から俺はその主を見た。

『まだ、 未覚醒だが他の者と異なる魔力の流れを持っている。』

ソウルが言った子の前に立つが…あまりに予想外で啞然としていた。  
ピンクの髪。 起きてからじゃないと分らないがおそらく美少女の部類に入る子であろう。 小型の体…ロリコンとかなら喜んで飛びつくな。

『どう思っ？』

ソウルは問う。 この子がこの世界の未来を握る子なのか、そうじゃないのか。

「このガキに何ができるかは知らん。 それが世界にプラスになるか邪魔になるかと考えてもこいつのことを調べなければ話にならない。」

事実だけを俺は言う。 風が窓をたたく。 今始まりの戦鐘を鳴らした。

これが…俺と…俺が巻き込んだ最初の人物…ルイズ・フランソワズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールとの最初の出会いだった。

## 見つけたもの（後書き）

いまだに小説は上手じゃないですが楽しんでいただければ幸いです、さてこのガルーム編ですがアニメ版ゼロの使い魔の三つの作品のストーリーを中心に紹介していきます。また、楽しんでいただければ幸いです。そのうち私のオリジナルキャラクター一覧を作りますので…。よろしく願いします。



## 召喚されし者（前書き）

召喚の儀辺りです。ちょっと、原作っぽく書けないかも……。間違っていたり変だと思った時にはすぐに連絡してください。

## 召喚されし者

風は走る。目を閉じながらも外の風景が予測できた。煙の中に混じるその香ばしいパンのにおい。木の上は自分の体重に比例して反動による痛みを感じるものだが…体がマヒしているのだろう。痛みはない。

もう少し眠っても、良いかな…？ 全ての感覚がまた遠ざかっていく。

(…起きろ。)

ソウルは木の上で眠る俺を起こした。あれから…結構時間が経ったのか。地平線近くにあったはずの太陽は空高く昇っていた。

（あのガキ達は召喚をしているようだ。潜り込むなら利用しない他はないぞ。）

ソウルは周りの状況からそう教えてくれた。

「俺に使い魔になれと言うことか？」

彼らが行っているのは使い魔召喚の儀式。使い魔つてのが小説と出てくる召使しか思い浮かばないのだが…。俺が目につけた少女は唱えだした。唱えている様子だけしか分からなかったが。

『契約など必要無いはずだ。』

そう、俺が行かなくても彼女が呼んだ相手は来る。それが何であろうと…そいつと契約した後に自分で適当なルーンを体に刻めばいい。ソウルへの短かった。彼女を見るとタクトを振っている。前に出した瞬間爆発した。

「確かにな。」

俺は転移魔法ダークチェンジで彼女が起こした爆発の中に降り立った。そして俺の後ろには現代人の少……青……いやまだ16、7だな。幼さが何処かに垣間見える。そんな奴が一人いた。こいつが彼女が呼んだ使い魔…か。

「見ろよ！平民を召喚したぞ！」

平民……？何の話だ？まあいい。今、俺ができるのはこの学園に潜入し、あの少女を監視すること。まんまると太った貴族に何言われようが興味はない。

「我を召喚したのは、汝か？」

いかにも私は有名な召喚されし者……そんなフレーズを言う。

「そつ、そうよ！」

「我が名はガルム。またの名をガルム。」

『（おい！ちよつと待て！）』

俺の中にいるガルム、本名アンチガルムニストが文句を言う。  
だが俺は彼の名を使いたかった訳ではない。

「ガルム……？まさか……。」

「人は我……俺を悪魔と呼ぶ。」

辺りの人間（あの少女も）が二三歩下がった。

「安心したまえ。神により救済され今はいかしめのために色々と拘束を身につけている。誰かを殺す……なんて事はしないから。」

安堵した様子で顔を見合わせる者様々だった。

『（逸話のガルムの事だったのか……。）』

（そういう事だ。）

後ろの奴も目を覚ましたようだ。青いパーカーにジーンズ。髪は黒…日本人かな…そうか、だから現代<sup>リアル</sup>魔法<sup>マジック</sup>地方か。

「あんたは？」

少女は聞く。

「何だつて？何処だ、ここ？」

少年は答えずに辺りを見回す。

「言葉が通じないの？何処の平民？」

俺には双方の言葉がはつきりと聞こえたので言ってしまった。

「嘘だろ？」

「！あんた、日本語喋れるじゃんか！」

俺の言葉は分かる…。ああ、まだ言語が頭の中で翻訳されてないのか…。後ろからはあの少女を罵倒する声が聞こえた。

「さすがゼロのルイズ！期待を裏切らない結果だな〜！」

他の生徒の笑い声が…。うざい…なんか腹立つ…。！

「こいつら着てるもんといいかなりやばいぜ。」

彼は歩伏前進で逃げ出す。　　まったく！逃げるなって。

「ちょっと待て……。」

首根っこを捕まえた。その時咳ばらいと共に先生らしき人物が言った。

「ともかく早くしなさい！でないと君は本当に退学になってしまいますぞ！」

……悪いな少年。　　女の方に突き出すと彼女は上から目線で一言言っただけをした。　　……契約完了だな。　　俺も右腕に小さな熱さを感じる。　　……って事はこいつがこの世界の守護者？　　いや……それにしても気配が弱すぎる。

「なっ、何すんだ！」

「契約だよ。詳しい事は後だ。」

彼から湯気が昇り左手首を押さえた後文字が刻まれ彼は気絶した。  
俺も昨日見たルーンの中から一つ選び……右手に刻み込んだ。  
そして彼を足を掴んで一気に左肩へ担ぎ上げた。

「おい、俺の主。」

「何よ……。」

言い方に腹を立てたらしい。　　言い方に棘があった。

「部屋はどこだ？こいつをおいてくる。」

指差す塔へ歩きだしたが首だけ右から振り返り言った。

「生徒達、俺の主を罵倒しすぎるなよ。殺しはしないが怪我を負わせないとは言っていないからな。」

答えは聞かずそのまま歩き去った。

俺も変に木の上で寝ていたので疲れていたらしい。あの少年を連れてきた後壁に寄り掛かって寝ていた。木のごつごつよりまだマシだ。

『あの少女が帰ってきたぞ。』

カチャリと開く扉の音で目を覚ました。ランプに指を鳴らしてつける。なるほど…この世界の魔法は日常の事まで扱えるんだな。

「何してんのよ。」

「やること無いからただ寝ていた。ところで俺達を平民と呼んでいたが、この世界では平民とはどういう意味だ？」

「はあっ！？あんたそんな事も分らないの！？」

「俺はこの世界の人間では無いのでな。」

呆れている。見下しているのかも知れない。どうやら俺は中世で質の悪い時期に来てしまったのかもしれないな。ダークネスの話をするのは当分先になりそうだ。心の中で小さくため息をついた。



## 召喚されし者（後書き）

認められないのは自分の常識外のこと。人とはこんなにも分かりあえぬ存在なのか？逃げる背を追い俺は思う。

次回ツインシンフォニー 中世に飛翔するもうひとりの使い魔 縛られた使い魔

次回をお楽しみに。

## 縛られた使い魔（前書き）

感想ください：最近皆さんが私の書く小説についてどう思っているのか、気になって気になって仕方ないです。

## 縛られた使い魔

寝ていた少年を叩いた。

「おい、起きろ。」

「ん……………！はっ！夢か…？」

誰もいない方を向いて彼は言い、 ゆっくりと油の切れたロボットのよう  
に俺達の方を向いて一言。

「夢じゃねえ！？」

「胃が痛くなるほど悩んだけどあなたたちを使い魔にする事にしたわ。光栄に思いなさい。」

少女は宣言するようにそう言い俺たちから離れていった。 一々な  
んか…上から見てるような…。

「一体何処に拉致したんだ！？」

彼は錯乱して色々と言う。 だが、 彼女は無視して寝巻に着替  
えだす。 少年に自分の着ていた制服をぐちゃぐちゃに投げ付けた。

「それ、洗濯しといてね。 言葉が分からなくても使い魔ならそれ  
くらい分かるでしょ？」

自分がどれだけの無茶を言っているのか、 まったく気づいてい  
ない。

「（無理だろ…常識的に……）」

当然通じるはずもなく彼女の下着姿を見ないように顔を隠すばかり。……俺はどうしてるかって？ そんなの知らぬ存ぜぬの勢いで無視しているに決まってるじゃないか。別に彼女の下着姿を眺めていても構わないのだが、見ても何も面白くないし見てたら平手が飛んできそうだったので部屋の観察をしていた。質素とは言い難いが、必要最低限のものは充実している部屋。まあ、ほとんどは木材…腐敗してはいないようだ。耳は二人の漫才を一言一句逃さず聞いていた。

「命令すら通じないなんて、犬以下だわ…。」

大袈裟に肩を落としたのだろうか。

「おい！一体何がどおなつてんだよ！？つーかお前誰だよ！？」

「あーあ！うるさい！！ピーピー吠えてばっかだし！…あつ！口封じの魔法、去年教わった奴…。」

確かにうるさいが沈黙の魔法はやり過ぎじゃないか？ と思つたがすぐに後悔する事になる。俺が見た時、左指で呪文を思い出させるためか、こめかみを抑えていた。ゆつくりと少年に杖を向け言った。

「アンスール、レルアン。直ちに沈黙をもちて我が要求に応えよ！」

「（……！？沈黙の呪文なんかじゃねえ！この魔素の流れは爆は……。」

最後まで思うことなく、少年も服を持ったまま、その場に魔力が収束し向けられた先で暴走し爆発した。彼は煤で汚れ服は散り散りになった。

「なんだ…今のは…。」

少女は小さな驚きの声をあげた。

「ちょっとばかり可愛いから遠慮してたけどこうなりや力づくで！」

あまりにくだらなかった。だから俺は苛立つ気持ちを隠さず少年と少女の前に立ち彼らの前に手を出した。

「おい…てめえら、俺をブチ切れさせてえのか？少女<sup>ガキ</sup>、少し主導権を借りるぞ。まあ、拒否権は無いがな。」

睨みつければ何かを言おうとするが踏みとどまる。この時彼女は一步後ずさる。俺は殺気を丸出しにして睨みつけた。だから怖かったのだろう。青年も二歩下がる。ふううとため息一つ。

「まず…状況説明から、だな。」

少年、平賀才人は愕然としていた。だがそれを信じずまだ外国の何処かだと信じているようだった。目はちらちら扉の方に向いていたのが手にとるように分かった。どうにも隙を見て逃げ出したいみたいだな。

「で、内容を整理するぞ。ここはハルケギニア大陸のトリステインという国で貴方はここの魔法学校の生徒で間違いないか？」

ルイズが頷いた後才人は言う。

「で俺達はルイズさんの使い魔なんだろう？魔法使いとかが連れて歩くあれ。そういう事なら映画や漫画で知ってるよ。」

頷く才人は何処か期待しているようだ。ここでルイズがどちらかを復唱したら才人はここを外国の何処かだと思ったのだろうか…。ただ無視してため息をつく彼女を前に静かに扉をみた。

「はぁ……何で私の使い魔が平民なのよ、ドラゴンとかグリフォンとかそういうカッコイイのがよかったのに……！」

頭を掻きむしり目を離れたのを機に才人は走り出した。逃げたな…。やはり非常識な物は誰も受け入れられないのだろうか……。

「あれ？ヒラガサイト？」

発音が間違った言い方でそう呼ぶがすでに扉の向こうだった。

「ガルーム、あんた何処に行ったか分かる？」

俺は黙って半開けになってる扉を指差した。

「逃げた！？使い魔が！？嘘でしょ！？」

俺は知らないがこれもまた非常識な出来事らしい。 まっ、いいや。 ともかく……捕まえるか。

「先に行く。」

と言って外へに出た。 左右を見て音のする階段の方へ走る。 螺旋式の階段を下れば話し声が聞こえた。

「貴族の手を煩わせもう一人は僕らを脅したんだ。 何も言わずに去るのは礼儀知らずじゃ無いのか？」

なんだその言い掛かりは……？ 誰かは知らないが、ふざけたやつもいたものだ。

「ああそついうでしたか。 それはどうも。 それじゃ、そついう事で！」

俺の足音を聞こえた時には才人はさらに走っていった。

「失礼！」

茶色のローブに身を包む少女と黒いローブに身を包む少年。 吐き捨てられた言葉は俺の俗称。

「……悪魔……。」

だったら話しかけるな。 金髪の少年をちらっと睨み見た。

「用は主に聞け。」

それだけを言うと奴を追った。一階まで降りると才人はすでに出口に走っていた。

「ちっ。魔法無しじゃ追いつけねえ。」

外に出た俺は右脇腹に手を置いた。手に当たる柄。それを握り引き抜けばプラチナの剣、ソウルブレードがあった。

俺は念じる。鞭の姿を。剣は鋭いレイピア、ランス…からしなやかにしなる鞭に変わる。

体制を低くしながら放った一撃は大回りしながら才人の足を捕らえ彼を転ばせる。なにしろ魔力で30mは伸びてくれる業物だ。

芝生の上に転ぶ才人。

「おい、何転んでいるんだ？」

「知るかよ！何かに躓いたみたいなんだけど。」

もちろん鞭はすでに隠してある。

「それはともかく才人、上を見てみな。」

白々しく話を変えた。上空に浮かぶ大きさの異なる二つの月。

「……マジかよ。」

その直後俺達は宙に浮いた。いや浮かべられ無造作に動かされてしまった。



「うわぁあつ！助けて！！」

「…くそ！離せ！！」

才人は悲鳴をあげ、俺はじたばた足掻く。…魔力無しじゃ脱出できねえ！

「全く、こんな事するのは当分嫌だね。」

さっきの金髪の少年が薔薇を動かしながら言う。…あれがあいつの杖か…！ちくしょう、さっきの仕返しか…？

「ご主人様から逃げ出す使い魔だなんてほんと信じられない！」

見物と思われる褐色の女がそう言った。  
立場と現実を知った才人はただ叫んだ。

「うそだろおおおおお！！！！！！」

## 縛られた使い魔（後書き）

俺たちの世界とは常識もなにも通用しない中世の時代。俺は悪魔ゆえに、才人はその常識はずれなゆえに世界の刃にさらされることになる…。

次回ツインシンフォニー 中世に飛翔するもうひとりの使い魔 貴族の力

次回をお楽しみに。

## 貴族の力（前書き）

感想ください。

レベルが下がってきたような…戦闘シーンが余計むちゃくちゃになったかも。

## 貴族の力

部屋に戻るとルイズは才人の首に首輪を取り付けた。俺はなくて助かったとは口が裂けても言えないな…。

「だから！さつきも説明したたる！！」

サイトは声を荒げルイズをひたすら睨みつける。

「……信じられない！そんな異世界があるなんて…。」

ルイズもまたこの異常を認められなかった。

「だが事実だ。」

俺の一言にすごい形相で睨みつける。それ程俺が気に入らないか？ルイズは着替えだす。

「寝るからそれ洗濯しといてね。」

下着まで脱ぎ……その……ペタンコの胸を見てしまった。……あいつを思い出す。同じペタンコの胸のコンプレックスを持つ心優しい人魚<sup>マーメイド</sup>を。

「テティ…。」

漫才とも思える二人の会話を聞きながら俺は一人大切な仲間を思っていた。

その夜……

「よかったな、才人。女の子の下着を洗濯できて。」

すでに寝ているルイズだが才人はまだ眠れずにいたのでそう話し掛けた。

「嫌ですけど、地球じゃあそんなこと出来ないし。ガールームさんはしたかったんですか？」

「女の下着の洗濯は慣れてないからパスするよ。それと俺に敬語はいらねえ。」

ふと、彼が震えていたのでゆっくりと窓を閉めた。 ゆっくり閉めたのはすでに寝ているルイズへの配慮だ。

「サンキュー。」

「才人の日本ってどんな感じだ？」

ふと、才人の日本が気になったので尋ねた。 日本は色々回ったが、色々ありすぎた。 例えば一年中夏だったり、 タイムスリップしていたり、 政府じゃないがものすごい権力を握った科学施設が大量にあったり……。

「何って普通だよ。」

「普通……か。」

現実に近いってことか。　まあ、ある意味一番ましな日本…少し羨ましいな。

「何言ってるんだ、アニメはアニメの世界だろ。」

才人は何俺を少し馬鹿にしたように言う。　全く言ってくれる。

「そうだな。もう寝よう。ここの生活に慣れるまで大変だ。」

「ああ。お休み。ガールーム。」

「お休み。」

しばらくしていびきをかいて眠りだしたがそれでも震えていたので俺はマントをかけた。　そして俺も壁に寄りかかりながらゆっくりと目を閉じた。

「…！」

朝日を感じ目を開けた。　二人はまだ眠っている。　俺は窓に近づき下を確認すると窓をゆっくりと開け窓縁に手をかけて下に飛び降りた。　かなりの高さがあったがこれくらいなら造作もない。

校庭へゆっくりと歩いていく。　そして自らに幻術をかけた。

周りに現れる敵の群れ。　魔物、人間、機械…さまざまな種類の生命体が俺を見る。。　右手にすでに来ていたソウルブレードを握りしめる。

「はあああああああ！！」

近くにいるものから順に切りつける。後ろに迫ったトカゲ人間には剣を逆手にして貫き引き抜く。

ビームを放とうとする機械を左手でつかみ他の物に向ける。機械は自動的にビームを乱射した。玉切れと同時に俺はそれを地面にたたきつけた。

周りの人間が一斉に発砲する。飛び上がりそれを避けた。降りたつ敵を踏みつぶす。降

『後方に敵！』

後ろにいたのは岩のゴーレム。目からビームを発射した。警告と同時に左に飛ぶ。

『左に敵の群れ！』

つま先でステップを踏み右回転しながら敵を引き裂いた。今までもよりも強く剣を握りしめた。

『ラスト！』

さっきのゴーレムに飛び切りを加え俺にしか見えないが爆発が起き

た。

「はあ…はあ…タイムは？」

『約10分。警告なしでは後3分はかかっていた。だが、気を落とすことはない。お前は魔法と剣技、二つがそろって初めて最強の道が開ける。』

俺は2種の拘束を身にまとっている。ひとつは超魔素拘束鎧<sup>ちやまそうけうそくがいく</sup>。そしてもう一つは超重身体拘束鎧<sup>ちやうじゆうしんたいこうそくがいく</sup>。これに加え俺のありとあらゆる力を封じる鎖を百重に巻きつけたのが俺の通常状態。しかもある人物から俺の魔法を自重しろと言われていた。まあ、戦闘になったら従う気はさらさらでないが…。

「ともかく汗を流す。人目のないところはあそこだけか？」

『学園の外だな。警備もない。』

外に移動し誰もいないのを確認する。

「バブル、クリア。」

全身が泡に包まれると水となって足元に流れていく。これは肌のみ反応し汗や汚れ、匂いすらも洗い流す特殊魔法。鍛錬後のシヤワー代わりによく使っている。目を開けるころには更に日が昇っていた。

降りてきた所に戻ると後ろから誰かが声をかけた。



「何をなされていたのですか？」

黒髪のメイドがそこにいた。胸がかなりでかいことだけは追記しておく。

「鍛錬だよ。いつから、見ていた？」

「最初のほうから…一人で暴れているようでした。そのあと、外に行って戻ってきたんですよね？」

バブルクリアだけは見られてないな。

「ああ。ところで君のn…いや自分からなのるが礼儀だな。俺はガルーム。」

「私は学院勤めのメイド、シエスタと言います。」

「シエスタ…か。良い名前だな。じゃあ俺はそろそろ主のもとに帰るよ。またな、シエスタ。」

「はい！」

笑顔を垣間見た後俺は昨日の道をたどった。帰ると二人はすでに起きていて、下に行くと言い、ルイズから出て行った。才人が隣に来た時尋ねた。

「…どうだった？初めての朝は？」

「最悪…。着替えを手伝わされた。」

「いいじゃないか。女の子の生着替えを手伝うなんて地球じゃないだろ？」

「状況が状況だから。」

まあ、いつか。こういう男なのだろうからな。下では貴族の食事が並んでいてサイトも手を出そうとしたが俺たちに贈られたのはたったの一つのパン。テーブルの上ではものすごい豪華な食事を……いや、朝にこれほどかと思うほどの量の食事がそこにはあった。

「使い魔は本来外で待機しているのよ。特別に「あれなら、外のほうがマシだ!!」」

サイトの発言にルイズは、歯をかみしめる。オともルイズを睨むばかり。

こんなタッグで大丈夫か？ そう思っていたが……強い殺気を感じ振り返る。

行くしかないな。

「主、才人、これからの予定は？」

「今日は授業は休みよ。」

「俺にあると思うか？」

「……では、少し学園を一人で散歩してきますので、失礼します。」

一礼の後彼らと正反対の方向に歩きだした。しばらく歩いていくとそこには20人近くの生徒がいた。マントは紫、黒、茶、3種あった。

「要件は何だ？」

その中の一人が杖を向けると突風が吹き荒れ俺を殴りつける。

「くっ…。」

吹き飛ぶなんてことはない。ただ受け入れた。

「生意気な…平民が…。」

その姿に余計に腹がったらしい。紫マントの一人が言った。

「いいか！ヴェストリの広場でその生意気な口を閉ざしてやる！おめえら行くぞ！」半不良どもはそのまま歩き去って行った。つまりは決闘ということか。

「…ちっ！面倒だな。」

勝つのは間違いなく俺なのだが…そんなことに割く能力がもつたいない…。

「どれもただの生き物じゃないな。若干動物が混じっているが…。」  
それにしても生き物に目立つあのマーク…あれは一体……。よそ見していたのがいけなかった。急に目の前に現れた目玉のモンスター

を上からぶん殴ってしまったのだ。モンスターは地面に埋まったまま動かなくなる。

「はっ！すまない！おい！大丈夫か！？」

「ビョヨ……（痛いです…。）」

彼（？）は声を出した。俺は頭を撫でながら言った。語るのは声だけで思いを伝えるモンスター語。

「グルル。（すまない。びっくりして殴り付けてしまった。）」

「ビョヨン〜ビョヨヨ（にしても言葉が分かるなんてビックリです…。）」

近くで生徒が震えながら近づいて来る。

「グググ…ギュル（迎えだ…いきな。）」

目玉の生き物は主に向かっていき、生徒がそれを掴むと一目散に逃げ出した。俺の周りから5mは距離をとる者達。俺は黙ってルイズを探しつづけた。

「主。」

「いつまで散歩してたのよ！」

ルイズはお茶などを飲んでいなかった。お茶すらないのだ。だ

が今は、早くあの馬鹿どもをかたずける必要がある。

「遅くなりました。所でヴェストリの広場は何処でしょうか？」

「何で？」

「いや……」

しまった！言い訳を考えてねえ！どうする…。

「そ、そのような場所があるとは聞いたのですが、あいにく場所まで聞けなかったもので。」

ルイズはじつとこつちを見た後言った。

「あつちよ。サイトがギーシュと決闘することになったの。止めてもらえる？」

俺は立ち止まりルイズを見る。

「主…私は貴族と平民の違いを知りません。ですが所詮同じ『人間』と言う生物のはず。才人の怒りもそこに機縁します。だから今聞いておきたい。」

「魔法が使えるか使えないかよ！そりゃ私は…」

俺はその返答の続きを聞く気は無かった。

「主、実は俺も決闘の用がある。」

「なんですって！？誰と！？」

「知りません。三色のマントでしたので。数は約20人。」

彼女は震え出してしまった。

「どうして…平民は貴族に勝てないのよ！」

くだらない…

「俺は悪魔ですよ？では失礼。」

「増えたな。」

見渡す限りの生徒。      その中で俺に喧嘩を売ってきたやつらを見て  
そう言った。

「どういう事だよ、ガルーム。」

先に来ていた才人が俺に訪ねた。

「何、軽い挑発が馬鹿なガキどもを起こらせたただけだ。」

それだけで殺気…怒気が強くなる。      ルイズが走って来てギーシュ  
と思われる胸元をはだけた少年を止めようとしたが無駄だった。

正直あいつにもガツンと…昨日の復讐したいんだが…

彼の手の薔薇の花びらが一体の青銅のゴーレムを呼び出した。

騎士甲冑に鉄の鎗。      あの鎗、借りるとするか。

「おい！お前をぶつ潰したい連中を増やし続けるけどいいよな！もう50人越えるぞ！！」

止めてほしいのか、俺に泣き叫んでほしいのか、真意は見えない。だが一つ確実に…才人を殴り倒したゴーレムが後ろから迫ってきたので、そいつの心臓部を貫き大空に放り投げた。

「ほらよ。」

バランスを失った騎士が立て直す前に跳躍し腕を砕き、鎗を奪った後ギーシュに人形を蹴り返した。

「魔法無しで50人の魔法使いと戦うんだ。武器の一つや二つ…あってもいいだ、ろ！？」

既に70近くいたガキ達に本物の殺気をぶつける。同時に鎧に自信の魔力をまとわせ、傷をつけても…上辺だけになるよう…力を調整した。

もし誰かを、こんな人前で殺したら…ルイズが殺人鬼の主になっちまうからな。

「行くぞ。殺さないつもりで行くがショック死は対象外だからな。」

「この…平民が！」

すでにギーシュと才人の戦いはギーシュのいじめに変わっていた。

なにも抵抗できずにただ殴られ続ける才人。

俺は鎗を握りしめた。吹き荒れる風を、燃え盛る火炎弾を、土の手を、水の玉を鎗を回転させ弾いていく。



「なっ…！」

「この程度か？俺はまだ本気じゃないぞ。もっと、楽しませろ。」

「…すげえ」

観客から聞こえる声。

「あれだけのメイジ相手にあそこまで立ち回ってやがる。」

そろそろ仕掛けるか。走り出し鎗の刃なき端を一人の肩にぶつけ、ゴキと嫌な音、俺にとっては幸せのベルが静かに響いた。情け容赦なく破壊する。隣のターゲットの腹を貫いた。血が吹き出て緑の草原が赤い大地に変わった。その瞬間空気が変わる。

「痛い！痛い！！」

悲痛な叫びにその場から逃げ出す者の前に跳び中央に蹴り飛ばす。互いに頭をぶつけ気絶する者。俺は鎗に貫かれたままの生徒を鎗から外し他の者に突っ込む。

「ひっ！？」

「来るな！！」

さっきの怒気は何処にも無い。あるのは、恐怖。

「死ね。」

それだけ言い貫くのではなく、棒の部分で殴り倒す。頭を、鳩尾を。

無茶苦茶に放つ魔法を回避し二人ほど鎗で肩を貫いた。

「これが決闘：戦いだ！！」

愚か者に宣言する。 鎗を構えなおした。

「お前、人を殺さないんじゃないのか！？」

端で震えながらこつちを睨む、 茶色のマントの少年が叫んだ。

「身勝手だな。決闘をこんな大多数で売ってきて今更命ごいか？それに臓器は貫かない程度で済ましているんだ。むしろ感謝して欲しいね。」

だがその後に飛んで来たのは才人。

「才人！？」

「隙あり！！」

残った者が一斉に炎と風を放った。俺は才人や関係の無い者が後ろにいる事に気づいた。

「ちっ！」

もはやガードをする余裕は無かった。

「マグネ！プロテクト！！」

攻撃を俺の前で一点集中させ、念のため周りにバリアを張って鎗で

守りの体制に入っていたが……鎗にはひびが入っていた。バリアは最後に跳んできた岩に砕かれ、鎗はそれを撃ち返すと同時に砕けた。無手になり、体制も崩した俺は風によって吹き飛ばされた。

「ぐあっ!!」

壁にたたき付けられた。同様に才人も巻き込まれて飛ぶ。

「もう十分でしょ？あなたたちはよくやったわ。だから、もう止めて！」

ルイズが慌てて駆け寄りそういった。先に指がピクリと動き、才人が起き上った。

「いいからどいてろ……」

ガキに負けるわけにはいかないよな……。

「主、邪魔だ。この程度……」

だが俺はその場にひざまずいてしまった。どうやら……捻ったらしい。

「まだ続ける気は……あるかい？その気が無いなら僕にこう言っただ。」  
『ごめんなさい』とね。」

「お前もだぜ！」

「ついでに二度と調子乗りませんってな！」

最初にギーシュ。続けて紫マントの太った奴と痩せた奴が俺に言

う。ふざけるな…。

「誰が…」

痛みを堪え立ち上がり才人は剣の方へ、俺は戦場へと歩いて行く。

「主、才人を頼む。」

「でも…」

「足を捻った程度でハンデにはならない。早く、才人を。」

ルイズは才人の側に走っていく。

「武器が無くなったな。」

「どうかな？」

ここから逆転するには、新たな武器を呼び出すしかない。こいつらに致命傷を与えずに大ダメージを与えるのは…。目を閉じ心で呟く。

「（風の竜王よ。我に翼を与えよ。偉大なる風の剣を。）」

後ろで才人は剣を引き抜く。熱さを前方から感じる。

「下げたくねえ頭は下げられねえ！！！！」

「何も知らないガキどもに負けるほど……。」

目を開けばさつきと同じ光景があった。火も、水も、風も、土も、俺の敵。しかし唯一の違いは俺の右手を風が包んでいたこと。

「弱くねえ!!!お前達に教えてやる!俺のフルネームはガルーム・ザ・レジェンド!人は俺を『悪魔』!『最凶の守護者』と呼ぶ!」  
ようやく形となった翼の剣を一振りすればなにもかもが消し飛ぶ。

「終わらせよう。最凶の守護者として。」

槍を持っていた時には実は違和感があった。だが剣を握った時にはそれはない。

「お前、メイジか?」

黒ローブの男がたずねる。メイジだろうが、名人だろうが関係ない。

「いや…言っただろ?守護者だ。」  
ガーディアン

まだ立つ敵を切り裂く。杖から魔法が放たれる前に斜めから斬る。真横から腹を斬る。

「巻き起こせ、いかしめの嵐!!!」

切り裂かれた傷から風が吹き荒れ俺と敵対した全てを竜巻の中に閉じ込めた。

「風は命を運び、閉じ込める力。」

竜巻はさらに早く回り出す。 剣を地面にさし、 俺は右手を前に出した。

「水は命を産み、命を移す力。」

目の前に顔がないただの人間の形をした水が現れる。

「土は命を支え、封じる力。」

右手を握りしめるとそこには鋼鉄のガンドレッドが出現した。

「火は命を育て、殺す力。」

そのガンドレッドに炎がともる。

「全てを砕く！くらえ、ハンドレッド・ナックル！！！」

竜巻は彼らを拘束し、 その水人形はターゲットにダメージを移し、  
鋼鉄のガンドレッドは敵の命を封じ、 火は彼らを焼き払う。

俺は右手で急所を外した全てを殴り、 殴り、 殴り…悲鳴が聞こえようがなんだろうがただ殴り続けた。

豪速の連打で彼らを傷つけ最後はアッパーカットを叩き込んだ。  
最初に鎗で貫いたやつら以外が地上に堕ちていった。 それをただ黙って見つめた後俺は倒れた才人とルイズを連れ部屋に戻っていた。

裏から聞こえる怨嗟のぐもった声を無視して。

## 貴族の力（後書き）

傷つけたもの。恐れるもの。だが俺は自らの道を突き進む。どんなふうにも思われてもかまわない。俺の目的はただ一つ…。

次回ツインシンフォニー 中世に飛翔するもうひとりの使い魔 魂の在りか

次回をお楽しみに。

## 魂の在りか（前書き）

今作よりオリキャラ登場。そして…感想ください…。

レン・ラ・フローレンス

ゼロの使い魔でのオリジナルキャラクター。ゼロ魔では保険の先生（当然女性）がいなかった。（原作を読んでおらずアニメ知識だけです…。）だから作った。後悔はしていない。反省は…ちよつとだけ。イメージはクリミアの天使『ナイチンゲール』です。水のトライアングルですが、実戦経験は無し。病氣の人たちをいやしてきたことからオールドオスマンに腕を買われ、保険の先生として魔法学校に赴任した。



## 魂の在りか

戦闘後、俺は痛みを堪えルイズの部屋に帰った。ルイズを誰かが呼びに来て彼女は出て行ってしまう。

才人をベッドに乗せた後才人がいつも寝ている藁の所で、俺は壁を背に崩れ落ちた。強大な回復魔法『リバイバル・ライフ（無詠唱なので効果は激減）』で捻挫を治し、何もすること…才人にもほんの少し魔法で治療した。才人には悪いが現代人相手に魔法は使えない。

理由はただ一つ、彼が魔法世界の住人でもなくいつ彼が現実に戻れるのか？ともかく魔法の無い世界に魔法を持ち込ませる訳にはいかない。後はただ、ぼおつとしていた。

「…本当にあんたバカでしょ!？」

最初に飛んだのは激怒した彼女の声。

「あー」いいから手伝いなさい!!」

…才人は全身痣だらけ。骨も逝ってしまったているかもしれない。まあさっき回復魔法はかけていたので死ぬことはないだろうが…。

「仕方ないな。全く…。」

彼を介抱していると彼女から言ってきた。

「…あの後呼び出されたのは知ってるでしょ？」

「ああ。」

「そこでね、男子からも女子からも凄い勢いで謝られたの。」

「そういえばこいつは…。 昨日から出会ってから馬鹿にされてたんだっけ……。」

「で、なんて言っただ？」

俺達に差し込むはずの太陽は、当初差し込まなかった。

「もう言わないでって。あたしからも釘刺しとくからって言ったわ。…今日みたいな事は二度とごめんよ。」

ようやく太陽が彼女の顔をさした。

「主、俺は貴方を少し誤解していました。」

彼女の肩を優しく掴み顔を彼女の顔の前まで下げた。

「魔法が使えず周りから蔑まれていた貴女…どれほど苦しかったかはかりかねます。」

「……」

「だが貴女はの中で必死になった。優しい心を持った。だから教えます。貴女は魔法使いだ。」

「だって…魔法は……。」

彼女の小さな声を俺が遮る。

「異世界の物ですが、爆発の魔法は存在します。」

「嘘よ！」

「いいえ、本当です。私も爆発の呪文は使用できます。何か不要、或は邪魔な物があれば……。」

黙ったまま首を振る。俺は窓を開き空に向けて指を向けた。

「爆散しろ、フレイム、バースト！エクスプロージョン！！」

沈みゆく太陽の上に小さな太陽が出来て空に昇り。

ドーン！！

花のように舞い散った。

「……」

「爆発はある意味、美です。爆発は対象をただ破壊する力ですが、使い方によってはそれをよい方向に変えられます。例えばあの花火のように、道を塞ぐ巨大な硬い岩も内部から爆発させれば壊れるでしょう。」

実際ダイナマイトなんて物もあるし。

「結局、それくらいじゃない。」

可愛げのない屁理屈だ…。　しょうがないか。

「でも、他の者は使えない。主だけの力です。それと今後主をルイズと呼んでも構いませんか？」

視線をいつもの位置に戻し手を差し出す。ルイズはその手を握った。

「今後も世話になります、ルイズ。……ルイズ？」

何の反応を示さないルイズを、　もう一度下から見上げるとその目は潤んでいた。

「……ありがとう。」

小さな言葉は沈んだ太陽の世界で響いた…。

明くる日、俺は中央塔の最上階に来ていた。

「失礼します。」

「んっ？誰じゃ？」

外に誰がいるかなんて見ている癖に白々しい……。

「ルイズ・ド・ラ・ヴァリエールが使い魔、ガルームです。学院長に少々用があつて参りました。」

「うん、入れ。」

おそらく……こいつは昨日の出来事を知っているだろう。学院長なのだから。他の者はいない。

「一つの質問と一つのお願いがあつて来ました。まず質問から、現在の我が主ルイズ。彼女は爆発しか使えないと聞いていますがこの世界の魔法と言うのは四大元素を使った魔法だけですか？」

彼は顔をしかめる。

「どういう意味かな？」

「私は異世界の魔法の中に爆発をさせる魔法があるのを知っています。しかしそれは四大元素魔法ではない。貴方は彼女の魔法を本当は理解しているのでは無いのですか？つまり…別種の魔法。私は予想として、『無属性魔法』じゃないかと。」

彼は杖を扉に向け扉を閉めた。

「…当たりですね。」

彼は手を組み言った。

「おぬし、何者じゃ？」

確かに感じる……歴戦の戦士たちの気配に似たこれは……。

「生徒との戦闘…喧嘩を聞いていれば知っているでしょ？」

「…まあよい。で、ヴァリエールの三女の魔法は爆発のみ。他の魔法を使おうとすれば爆発する。無属性魔法…失われた系統の虚無の魔法はその使い手が長年おらずその魔法の正体があまり掴めておらん。唯一分かっておるのは、虚無の使い手は特殊なルーンを持つ使い魔を連れ、一般の魔法より永い詠唱を必要とすることだけじゃ。」

口元に握り拳を寄せ少し考えた。条件はほとんど満たしている。才人和其他の使い魔のルーン…マークが完全に異なっていた。

「それともう一つ。」

オールドオスマンは一冊の本を差し出した。

「『始祖の祈祷書』じゃ。これには虚無の魔法がかかっているはずなのじゃが……。」

パラパラとページをめくるが何も書かれていない。だが……僅かに見えた文字があった。

「エクス、プロージョン……？」

不意に目の前で爆発が起きて互いに黒焦げになってしまった。

「すいません。」

「うむ。じゃがこれで可能性は見たの。」

ルイズの所持する力……それは虚無。立ち去ろうとする俺に彼は言う。

「よいか、決して他言はせぬようにな。」

他の連中では少々悪い話なのかも……。まさか人体実験なんて事は……無いよな？ 階段を下る途中で足を止めた。

「あれ？何か忘れているような……。」

ふと、昨日ボコボコにした連中を思い出す。そういえば、保健室の場所を聞きに行くつもりでもあったんだ！慌てて階段を駆け上がり扉を握りしめ開こうとしたが開かない。結局冷たい風の中待ち続けるしかなかった。彼の秘書が来るまで。螺旋階段の上は寒かった。今度からは気をつけよう。

「あら、貴方は？」

保健室につくとまだ昏睡状態の生徒でいっぱいだった。内装はベツドと隔離のためのカーテンだけがある。窓は開かれていた。

「貴方がレン先生ですね？」

まだ新任の水のトライアングルと聞いていたが…。年若いベージュ色のカールした女性。それが彼女だ。

「……貴方、まさか……。」

彼女は杖を掲げるが、その前には彼女から杖を奪っていた。そして強奪物を彼女に向ける。

「こいつら全員やバイのか？」

杖で軽くベツドを叩くと黙り込んだ。

「いいだろう。」

杖は彼女の頭上を通り越え向こうで渴いた音とともに落下した。彼



女がそれを目で追う間に俺の手は右脇腹の位置にあった。手の腹が何かにぶつかるのを感じるとそれを握り引き抜いた。白銀の刃が光る。

「武器!？」

俺はレンに刃を向けた後剣の腹を向け目を閉じた。

「（意識を研ぎ澄ませろ。周りの魔素から対象の距離を知れ!自らの魔力を絞り圧縮し癒しの魔素の流れを掴め!）」

ギンと目を開き言う。

「禁術、55の5!リバイバル、ライフ!！」

剣から光があふれ傷つけた者達を包んでいく。昨日自分にかけて詠唱無しの中途半端な物とは異なる本物の…何万人もの致命傷を癒す禁術。

「じゃあこれでこの前の喧嘩はチャラだ。」

ふと、気づけば彼女が子供のような、キラキラした目でこっちを見ている。服の袖が捕まれていた。

「どうしました?」

「……師匠と呼ばせてください!！」

「はいいい!？」

訳がわからず悲鳴をあげた。

レン・ラ・ハプリエド。それが彼女の名前。それだけが俺の頭の中で燻っていた。あの後。

「夜に外のカフェで待ち合わせをしましょう。」

と約束してルイズの部屋に戻ってきた。

「ルイズ、授業は？」

「サボった。」

「…大丈夫なのか？」

「平気。コルベール先生の授業だから。」

コルベールってのがどんな奴か知らないが、相当下手くそな授業なのか？

「後、仕事。」

「仕事？」

出されたのは洗濯カゴ。……ああ分かった。

「ではルイズ、行ってきます。」

返事は無かった。

「…サイトとは違う。他の人とも違う。ちい姉様に似てる…？」

私は何故か動揺していた。ガルームは優しい。最初の悪魔（自称）…のような冷たい接しかたじゃない。昨日からそうだった。私を認めてくれた。

「そういえば、サイトもガルームもどんな生活をしてたんだろう。」

サイトはよく分からない。非常識な行動ばかりするし、平民なのに貴族に勝っちゃうし。勝っちゃうのはガルームもか。ガルームは自分で魔法が使えた。武器を自在に扱い何十人ものメイジを倒していた。もし……戦場だったらもっと楽だったのかも知れない。ガルーム、『臓器を貫いていない』って言っていた。事実ガルームが最初に貫いたはずの生徒はお腹の傷がほとんど無かった。ううん、ひよっとしたら今日か、明日には皆元気になってるのかも…。優しいけど……怖い。あの人は何をやろうとしているのか分からない。私は眠るもう一人の使い魔の隣で悶々と考えつづけた。

「…」

無言で洗濯をしていると人の気配が近づくのを知り振り返った。

「ガルームさん、洗濯ですか？」

「いや今、終わった。シエスタは？」

「もうすぐ昼食なのでテーブルクロスの手入れをしていました。忙しいので、では。」

あっさりとした別れに俺は一言。

「手伝おうか？洗濯物を干したらしばらく暇になる。」

「でも、ミスヴァリエールが「ルイズ」主は才人につききつりでな、暇なんだ。残念ながら才人を治療する手だては俺には無いんでね。」

シエスタは少し躊躇していたが笑顔と共に了承した。

「じゃあ、お言葉に甘えて。」

……何でなんだろう。妙にあいつらを思い出してしまう。会いたいと思うのに、ここにもしいたら怒鳴られている自分がありありと想像出来てしまった。

「ガルームさん？」

「すまない、少し考え事をしていた。」

雑念は洗濯物の水つ気と一緒に振り払った。

結果から言えばやり過ぎた。テーブルクロスを整備、学院内の掃除、果てには他の洗濯すらも手伝っていた。

「ガルームさん、以前こう言う仕事をなさっていたんですか？お上手です。」

「そうか？」

そう言われるが仕事は彼女の方が早く片付けていく。

「よっと、そうだガルームさん、時間があるなら厨房に来ていただけますか？」

「いいだろう。」

そこは小屋だった。入口に立てばおいしそうな料理の匂いがした。

「ガルームさんをお連れしました！」

中の人達が一斉に俺を見る。……何？この羨望の……いや何かに熱中しているファンのような瞳をしているこいつらは？

「ようこそ、我等が厨房へ！我等の翼！！」

「我等の翼？」

シエスタが耳打ちしてくれた。

「サイトさんとガルームさんが貴族の方を倒してしまうから皆、二人のファンになったんですよ。」

なんとも体格のいい大男がいきなり首に手を回してきた。

「ちょっ!」

無意識に体制を低くしていた俺は一步下がる。

「親愛の表れだろうけど、止めてくれ!」

「こりゃ、参ったね。俺はコック長のマルトーだ。」

逃げの体制をとっていたが姿勢を正した。

「俺のフルネームはガルーム・ザ・レジェンド。ガルームと呼んでくれ。で、何で俺が我等の翼なんて呼ばれているんだ?」

もつともな疑問を口にする。

「私が命名したんです。ガルームさんが戦っている時、鳥のように見えたんです。時に飛び上がり、時に大地を走り召喚した翼の剣で、敵を切り捨てて……」

「あれ?じゃあガル「言つとくが魔法使いじゃないぞ。」

誰かが言いかけたが直ぐに訂正する。

「少なくともこの世界の魔法は知らない。じゃあそろそろ何か手伝

おうか？」

だがその言葉は周りのコック達に止められた。粘り強く交渉を続け野菜を切る作業だけを手伝った。

夕方になり昼に乾燥させていた洗濯をしまいルイズの部屋に戻ってきた。

「遅かったわね。」

「すまないな。周りの連中と仲良くしてきた。」

「見てたわ。」

最初の直ぐに怒る様子がない。何があった？

「ルイズ、なにかあったか？」

「……何でもないわ。」

「しかし……」

「何でもないのー!!」

元には戻ったが俺には彼女が泣いているようにしか見えなかった。

ずいぶん冷え込み夜空には二つの月しか見えない風だけを感じる世界。中央塔と寮の近くに白い椅子とテーブル…。そこに一人腰掛けていた。

「いたいた。」

レンが歩いてくる。

「貴族が使っている所を借りてすまないな。」

「私は気にしませんが…気をつけてくださいね。では本題に入りましょうか。」

ニコニコしていた子供の笑みから一変、目を細め真面目に顔になった。

「…貴方の魔法…属性こそこちらに近いものがありますが、決定的に違う。だから教えてほしいんです。生徒達の安全のためにも。」

「なるほど、興味と教師と言う義務か。」

「…ごめんなさいね。」

「気にするな。俺がお前だったら言い回しはともかく同じ事をするはずだ。」

再び子供の笑みに戻った彼女。つられて俺も苦笑した。

「じゃあ俺の秘密を一つ教えてやる。俺は人間じゃない。」

「それ、秘密なんですか？『悪魔』と豪語なされてたじゃないです



か。」

だけど、『<sup>ガールム</sup>架空の悪魔』の名を借りたとは言え、『本物の悪魔』に喧嘩売る阿呆が实际いた。

「ガールムさんって優しいですから、自分を恐ろしく見せようとしてる。」

どうやら杞憂だったらしいが変な方向に取られた。

「いや、本当だから。」

「じゃあ証拠見せてください。」

ニヤニヤしていた彼女を前に俺は悪魔の翼を広げた。笑顔が固まる。再び沈黙が辺りを支配した。

「…これで分かっただろ？俺は忌み嫌われるべき存在だ。魔法の件もこれで「凄い！」はい？」

今まで見た事が無い笑顔を見せたレン。（出会ったのは今日）

「本物だ〜！ねえ、飛べるの！？飛べるの！？」

……………どうなってるんだ？普通怖がるよな？

「あの〜レンさん？」

「はっ…私は何を？」

深くため息をつくしか無い…

「で、魔法の件はどうするんだ？」

「水魔法を見せてください。私…治療はしたことあるのですが実践をしたこと無いんです。」

その後色々と話してくれた。彼女は貴族の生まれながら直ぐに両親が亡くなったという。孤児院に預けられそこで魔法の力を持っている事に気づいたらしい。孤児院で出来たのは治療だけだったようだが。それから平民としての苦しみ、医師としての技術を死ぬ気で学んだ少女生活を経て偶然にも祖父母に再開し、貴族の名を知りハルケギニア中を歩き平民を中心に医師として活動が続いていたが…オールドオスマンに腕を買われ赴任した…。

「そうだったのか。」

「ええ。」

「なあ、どうして俺に話し掛けた？普通怖がるだろ？」

草が揺れる音がする。風は一段と冷たくなる。レンはランプを見ながら言う。

「確かに師匠に直接会うまでは恐怖を感じました。でも喧嘩した相手を自分から癒すなんて普通しません。」

「ルイズに後ろ指指され無いようにするためだ。」

「違う…純粹に治したいって貴方は訴えてました。」

俺は…………根負けした。

「やれやれ…とんだお嬢様がいたもんだ。」

空を見上げるとさっきまで真上にあった月は随分西へ行ってしまった。  
ている。

「そろそろお開きにしようか。」

「そう…ですね。」

俺は彼女にそのまま座るようにジェスチャーした後昨日の決闘で使  
用した移し身「コピ」を用いて椅子を作る。触れて確認したが普通の椅子と  
同じ強度だ。大丈夫だろう。多分。

「これがあの決闘で用いた移し身。」

「ほお。水の生成から強化による固定…一般的な物でもいいんで  
すね。」

「魔法は戦いだけの物じゃない。人を助ける力だと考えるから。」

「…でお開きじゃないの?！」

「ではもう一つ。魔力の水は魔素とともに消える。だから使える…  
…リバースブラッシュ!」

水椅子の前に彼女の自室までの川ができる。

「原理は自分で考えろよ。じゃあ、お休み。」

水椅子に彼女が座るのを確認すると元の椅子を押した。同様に水椅子も同じ方向：川の上に乗るとゆったりと流れて行った。俺も部屋に戻っていった。

## 魂の在りか（後書き）

傷ついたものがすべて目覚めるとき、あまりにも確率の低い…奇跡の出会いを果たす。

次回ツインシンフォニー 中世に飛翔するもうひとりの使い魔 真実の剣

次回をお楽しみに。

## 真実の剣（前書き）

才人が美化されていくのはもう少し先になります。にしても……下書きからここまで時間かかりすぎ……。感想がほしいです……。先生方の性格がおかしくなったかも……。ほんとすんません。

## 真実の剣

その翌日、才人がようやく目を覚ました。

「Zzzzz…」

テーブルに伏せる彼女に上着をかける。

「はあ…俺がいるからいいものの……」

才人の事を考慮しあんましベッド下などが掃除していないことが祟ったのか、部屋が少し汚れている。もちろん清潔の方がいいに決まっているがデカイベッドに振動を与えずにどう、掃除しろってんだよ…

こんこんとノック音がした扉を開くとシエスタがそこにいた。

「おはよう、シエスタ。」

「おはようございます。ガルームさん。」

手にしているのはパンと水。

「それは？」

返答をきくまえに才人は目覚めた。

「んん、ああつ…。」

「お目覚めですか？よかった！三日三晩眠り続けていたんですよ！」

「君が…どうして？」

「…食事をお持ちするようミス・ヴァリエールから言いつかったんです。」

「疲れたんだろうな。ほぼずっと看病していたから。」

そっと近づいて髪を撫でる。

「ガルームさん！？」

「この小さな魔法使いへ魔界騎士からの祝福を。」

シエスタは驚きと非難の声をあげるが気にしない。才人もルイズをじっくり眺めていた。

「こうしてりや可愛いのに……もったいないな…。」

「？」

聞こえてない彼女は首を傾げた。

「くくく…」

対して聞こえてた俺は笑い声を隠すのに必死だった。彼はごまかしの笑みを浮かべた。



「くそ。無駄にヒラヒラしやがって！」

「諦める。それでも量は減らしたんだから我慢しろ。」

しかし才人の怒りは収まらない。いつか仕返ししてやると呟く彼にため息をついた。

「こんちくしょう!!」

ルイズは俺達に大量…二日分の洗濯をまとめて俺達に押し付けた。しかも才人は今まで手で洗濯などしたことがない。洗濯物を干した所で才人は薄く白い双月を見て呟いた。

「いつになったら帰れるんだろう…。」

「帰りたいか？」

「当然だろ？」

相当嫌なのか…怒り、悲しみ？憎…みまでいくか？ともかく双月を睨みつけていた。その時ルイズが来た。

「ルイズ。」

「教室へのお供もしないで何してんの!？」

「怒らないでくれルイズ。遅れてすまないが。」

「……」

俺が謝っている間才人は終始無言でただルイズを睨んでいた。さらに視線を感じ周りを見回せば褐色、赤髪の女が才人を見ていた。男好みのする…そんな気配を感じた。

「火、水、風、土の魔法は複数組み合わせる事で、より強力になり別の効果を発揮します。そして私達メイジはいくつ組み合わせる事が出来るかでランクが決まりますがそのレベルは？」

ミセス・シュブルズ。彼女は土属性のトライアングルメイジらしい。

見かけは既に中年を過ぎ高齢の年に入りそうだが…（失礼なのでこれ以上の考察はしない。）

彼女の問いにルイズの後ろの少女が答えた。

「二つの組み合わせができればライン。三つでトライアングル。四つでスクウェアと呼ばれますわ。」

「よろしい。さて皆さんはまだ一系統しか使えない人がほとんどかと思いますが…」

話を遮るように手を挙げた。視線が集中する。

「どうぞ。」

気に障ることもなく発言を促した。

「スクウェアクラス。則ち四系統融合魔法…その中でもっとも強い魔法を教えていただきたい。」

隣で何か音がするのを聞いて、見てみると才人が女子のスカートをのぞこうとして天誅を受けていた。

まあ、当然だな。

「ひとえにスクウェアクラスの魔法といっても多々あります。今ここで説明するには膨大な時間がかかってしまうので後で私の部屋にいらっしゃいな。私の知っている魔法をお教えしますわ。」

「失礼しました。」

「それに、ミセス・シユブルズ。お言葉ですがまだ一系統も、使えない魔法成功率ゼロの生徒もおりますので。」

ゼロという部分を強く言うのはあの赤髪の女。生徒全員の視線が集まる。

「ああ、なるほどね。」

才人は何かに感づきいやらしい笑みを浮かべる。

「……………」

彼女の手が震えている。

「おほん！ともかく皆高いクラスを目指すように！では今日も確認として『鍊金』の呪文を勉強をしていきましょう！」

この後俺が特に質問することはなかった。  
ただ、鍊金…これだけはいつか会得したいと思った。

授業も終わり、別の塔に向かう途中才人はルイズに言った。

「なんで他の連中がゼロのルイズっていうのかようやく納得したんです。なるほど、言いて名ですね。属性ゼロ！魔法の成功率ゼロ！！それでも、貴族。ああ〜スンバラしい〜」

まずい、このままではルイズがぶちぎれる。せつかく励ましてやっ  
てるのに！

「才人、その辺にしておけ。ルイズだって臨んで失敗しているわけじゃない。お前だってどんなにやってもできないことをネタにゆすられたら悔しいだろ。」

「……はっ！ご主人様！この使い魔、歌を作ったです！」

「才人！！ふざけたものは歌うなよ。」

「分かってるって！」

ケラケラ笑う彼が本当に分かっているかどうかは不安だった。…それは的中することになる。

「歌って…ごらんなさい。」

「はい！かしこまりました！ルイ、ルイ、ルイズはダメルイズ！魔法ができない魔法使い。でも、平気！ゼロのルイズは女の子だもん！」

腹を抱えて大笑いする才人。

「（馬鹿やる~~~~~う!!!!!!!!!!!!!!）」

反省などしていなかった。当然怒りに震える彼女。

「ルイズ、落ち着いてくれ！あなたはダメでも、ゼロでもない！だから、ルイズ！落ち着いてくれ！！」

髪が、怒りで揺れている…。

「ゴゴゴゴ…」

「うへ。」

「この使い魔つたら、ご、ご、ご主人様になんてことを言うのかしら……。」

「あの、ひょっとして怒ってます？それも、猛烈に？」

「当たり前だ！！」

そしてJUTIMTNOは下される。

「ゼロって言った回数分、ご飯抜き！！」

もう、見てられねえ。

「当然の報いだ、受けとけ馬鹿。」

その場から早々と立ち去った。

「はあ…」

使い魔たちが集まるその場所で横になる。最初はだれも近寄らなかったがああの目玉が近づいてきた。

「ぎよりよゝ（こんにちは）」

「ああ。」

「ぎよ（？）」

モンスター語使わないと。

生き物は鳴き声の中に感情を入れる。だから共通語などない。鳴き声の中に感じる心から言葉を受け取る。それがモンスター語。

「グルル（こんにちは）」

「ぎよろろゝぎよぎよ（今日もいいゝ天気ですね）」

「グル（そうだな）」

近くにいた大蛇が近づいてくる。

「シユルルル、シユルル？（あんた俺達の言葉が、分かるのかい？）

」

「グル（ああ）」

それを皮切りに周りの使い魔たちが集まってくる。しかも一斉に話したのだから俺にはついていけない。

「がるぐるるる、グルル（一斉に話すな、俺もだれに話したらいいかわからん。）」

「モグモグ（あの…）」

一匹の大きなモグラが近づいてきたのでそっちに顔を向ける。

「モグモグモグググ（ひとつお願いがあるのだが、聞いてもらえるか？）」

「ガル（ああ良いぞ。）」

「モグモグ（ご飯ください）」

「はっ？」

周りを見ると同じようなことをいう使い魔たち。      あの風竜ですらこっちを見ていた。

「分かった。マルトーのおやじさんに頼んでくる。」

立ち上がった時に視線を感じてそちらを見るとシエスタがいた。

「ガルームさん、なにされてらっしゃったのですか？」

「ああ、こいつらの飯を頼もうと思ってね。」

「使い魔のご飯…ですか？」

「腹ペコなんだと。全く主は何やっているんだか。」

そこに通りすぎる男性。 長い杖を持つ聖職者（坊主頭だから）の  
ような人だ。

「こんにちは、ミスターコルベール。」

「こんにちは、シエスタ君。それと……。」

彼は急に眼を細める。

わずかながらに感じる殺気。 子供たちとは違う…こいつ…なにか  
が違う。 うっすらとだが、魔力を解き放つ。

隣のシエスタは何が起きてるのか分らず俺たちの顔を見比べるば  
かり。

「貴方がミスターコルベール。主が言っていましたよ。あまり面白味  
がないと。できれば貴方の授業を見てみたい。」

彼は殺気を抑える。 いや、わざとじゃない。 多分この人は俺を  
見て無意識に殺気を放っていたんだ。

「ふむ…君、名前は？」

「ガルーム、ザ・レジェンド。人は俺を悪魔と呼ぶ。」



「やはり、ガルムではないのだね。」

しまった。ここじゃ、ガルムで過ごすつもりだったんだっけ？

「ガルム、ガルドームでも所詮は同じ悪魔……。ところで貴方の授業をルイズが受ける日はいつですか？」

「それなら今日の正午ごろの最初の授業でまた会おう。では、失礼。」

彼が去る姿を見ておれも厨房のほうへ。彼らの飯は貴族連中が残していったものをさらに調理しなおしたまかない物だが、彼らは喜んで食べていた。

「ふつ、お前さんほんと、良い奴だな。」

「別に…悪魔は気まぐれなだけですよ。おやっさん。」

「おやっさん？」

「ああ、あまり使わない言葉ですが敬うべき男性の親しい呼び名です。ですから、お世話になりますよ。おやっさん。」

「なんか、いいなそれ。」

「コック長！料理の準備整いました！」

「よし、じゃあ配ってきてくれ！」

「「「はい！」「」」

コックたちは作ったものを必死で運んでいく。その誠実さにほおを緩めた。

「どうしました？我らの翼。」

「いや、何でもない。」

「…というわけで、良いですか？ 物質はその姿かたちを温度で変化するのです。たとえば先ほど水を冷やして氷にしましたね？ですが温まればまた水に戻る。そしてさらに温めると水は消えてしまふ。ですがこれは水が水蒸気という別に物質に変わったのです。すなわち…」

水の三態か。 つまらない授業ではない。 この時代でここまでやるとは実に面白い。

「氷、水、水蒸気、このように固体、液体、気体のように変化します。これはすべてのものに共通で…」

周りは興味なさそうだな。 仕方ない。 俺は黙って手を挙げた。

「どうしましたかな？ガルーム。」

「いえ、あまりにも周りが退屈そうにしてるので一つ面白い話をと。」

「これに関係ある話かな？」

「ええ。鉄は熱くなると溶けます。液体状に、ではその鉄を再び冷やすと何になります？」

これは周りの物も興味を持ったようだ。

「すなわち、本当に液体状に鉄を変化させることができたとき、爆撃にもありとあらゆる攻撃から身を守る住処ができるでしょう。魔法じゃ決して真似できない。興味は…ありませんか？ミスターコルベール。」

鋼鉄の可能性を今、示したのだ。

「ふむ……」

「雑談はこの程度にしましょう。それに…基本がわからなければ応用なんてできるはずありませんからね。」

ザワ…

空気が変わった。これならいける。

「ククク…悪魔から呟きは以上ですよ。」

隣のルイズを見ると呆れ半分、だけど興味ありげにこっちを見ていた。

「今晚は、ミセスシユブルーズ。」

「いらつしゃいガルームさん。」

もはや小さな図書室のような部屋で本だけと言う感じだ。

「凄い数ですね。」

「ええ。でもこの世にある物は本では全て納まらない。そうでしょう？」

「確かに。で、俺が探していたような物が載っている本は？」

彼女は杖を天上に向けると、10冊程の本を出した。

「この中に？」

「分かりませんが、間違いなくこれには無かったわ。もしあるとすれば、これを。」

一冊の古い本を彼女に手渡す。

「では。」

その本を開けて探すも、二種融合魔法などがほとんどだった。中には同じ属性魔法の物もある。そんな中彼女は言っ…いや独り言だった。目はその本に向けられたままだった。

「この世の伝説に残虐なある王は四つの属性魔法を四本の杖で操ったそうです。ですがその杖が一本、また一本と破壊される度に王は全てを失っていったとか…。」

興味深い話だがそいつはきつとマジックアイテムで魔法を使い分けていたんだろう。…使い魔がそうしたのかも知れないが。

最終ページまで読み進め、閉じた。

「……無いな。」

ふと外を見ると入った時に目に突き刺さった夕日は沈み双月が外から中を覗いていた。

「いつの間にかこんな時間までお邪魔してしまいました。」

「…ええ。そうね。私も気づかなかったわ。……クスッ。」

急に彼女は微笑みを浮かべた。

「レン先生の言うとおりね。」

「？レンさんが？」

「貴方の事を面白く優しい人だと。私も初めはとても心が冷たい人かと思えば…違ったのよね。」

「いや…最初からありのままに接しようとしただけです。帰る予定でしたが予定変更です。もう少しここにいてよろしいですか？」

「ええ。異世界の事や貴方の話が聞きたいわ。」

「なら、私もこの世界の歴史や国の事を教えてください。」

互いに笑い、酒とほんの少しのつまみを共に時を忘れて談笑した。  
それでも終わりは訪れた。

「またいらっしやい。」

「貴方のような美しいかたが若い男を自室に招くといらぬ誤解を受けますよ。」

「あら、そう?」

「残念ながら私はその気はありませんがね。」

軽いジョークでも微笑んでくれた。

「ふふふ…そうだ。ギトー先生には気をつけなさい。」

「何故?」

「彼も貴族主義なの。私のように貴族と平民の差を考えないのは、レン先生とコルベール先生と学院長ぐらいよ。変なトラブルを起こさないでね。」

「はい。ではお休みなさい。」

「また明日。」

手を振る彼女を見た後扉を閉じた。

このハルケギニアにある大国は五つ。ここ、トリスティン。隣の軍治大国ゲルマニア。魔法大国のガリア。この大地から300m上空の浮遊大陸アルビオン。そして…遙か南にロマリア連合皇国。年若い教皇が治める国らしい。

魔法についても興味深い事実が分かった。この五つの国は始祖ブリミルと言う者が名称も知らぬ魔法によりこのハルケギニアを作り上げた…この世界の伝説を…だが話を聞けば聞くほど疑問が湧いた。一つ。大陸…いや世界を作る魔法は神々すら自ら禁じる『創造魔法』しかない。だがそれは天上界から一度たりとりともその情報が流出した事などない。じゃあ誰がブリミルに『創造魔法』を教えた？

二つ。いくら魔法の力が満ちる世界とは言え無属性魔法を使っていた彼が四属性を使っていたのが解せない…いや知っていただけか…？きりがないな。止まって外を見て考え事をし続けた時間を切り上げ、ルイズの部屋に向かった。

腹減りの虫が部屋中に響く。

「あの…」

「無理。」

「まだ何も言って無いんですけど。」

扉の向こうまで聞こえる声に顔をしかめ戻ることを止め廊下で睡眠を取る事にした。

「何やってんだろ…俺……」

呟きは小さな風となる。才人は結局放り出され、偶然通り掛かったシエスタに厨房で案内して貰った後… 今度はあの女… キウルケが才人を半ば拉致され、ルイズに見つかった。 昼の時よりも怒り狂う。 まるで龍のようだ。

ルイズが彼女との因縁を語った。 相当深い因縁を……そして俺はベチン、ベチンと言う鞭の音を無視し廊下で眠りについた。

「はぁあっ!!」

土、風の魔力で構成された竜が牙を剥く。 体から各々の属性の魔道弾が迫る。

「マグネ・プロテクト!!」

集中させ防御のバリアが現れる。 ギリギリと音を立てれ弾。

「カウンター… マグネ!!」

今度は跳ね返り敵に直撃する。 今度は水と炎の竜がプレスを吐く。

「馬鹿が。」

同じ事が繰り返され四匹が怯んでいる間に突進し四体が重なる部分を断ち切った。 硫黄より強い腐った臭いがした。



今日は昨日の話を参考に四体の龍の尾を無くした八叉のオロチのようにした魔物を幻術で呼び出した。まあ、皮膚は柔らかめにした。といたし当然か。それからさらに硬い鱗を持たせた竜を呼び出す。俺はだらんと手を下ろす。竜は鎌首をもたげ咆哮をあげる。俺はただ攻撃が首が迫るまで待続けた。こうなると我慢比べだ。先に仕掛けた方が負ける。それでも竜は口からブレスを吐こうと口元から煙をあげ、俺も殺気を放つ。背後から死神がはい上がる恐怖を与えた。

「ギヤア？グルルル（どうした？長蜥蜴）」

自分で自分にかかる幻術だから挑発など意味の無いはずだった。だが四体の内二匹は更なる咆哮をあげ首を伸ばす。単純な噛み付き。だが当たれば人は即死する。連続なその一撃を一步踏み込みかわしまとめて首を飛ばす。硬いが越えられない壁じゃない！

「喰らえ！！！」

そのまま走り一匹の胴に剣をぶつける。

「はぁあつつつつ！！！」

断ち切る！！！

そして後ろには鋭いオリハルコンの牙を兼ね備えた土竜が口を開き閉じた。そして二度と開かず光となって消えた。そこには下に向かつて地面も貫く白銀の刃があった。明日は更に強力な物を考えないとな……………

「お疲れ様です。」

「シエスタか。」

「やっぱ凄いです。今日は何を？」

「ドラゴン竜退治だ。…?」

今、才人とルイズが出かけて行った？ にしても才人、馬にも乗ったこと無いのか……。まあ当然か。

「ガルームさん、これ。」

差し出されたのはタオル。

「ありがとう。ところでシエスタ、町はどう行けばいい？」

タオルで軽く汗を…拭いてよかったのか？仕事を増やしてしまったな…

「この道を真っ直ぐ進めば城下街がありますよ。」

「そうか、ありがとう。にしても今日もサボりか？」

大丈夫かと思っただが。

「今日は虚無の日と言って授業はお休みですよ。」

日曜日か…なるほど。

「じゃあ俺も出かける。出来れば向こうに行っててもらえるか？今

からすることを勘違いされたくない。」

頼むと頭を下げシエスタには戻ってもらった。周りに人がいない事を確認し言う。

「来い、雷速の一角獣。遠く離れたこの地に、今こそ降り立て！！ 禁術！ 100の5！！ デイメンジョンゲート！！ いだよ、イクシオン！！！！」

真っ直ぐではなく『う』を描くような曲がった角。ふさふさとした白い体毛。筋肉がしっかりとした体。かつてスピラにいた召喚獣『イクシオン』召喚されし獣は今たった一人の主のためだけに走る名馬。

「久しぶりだなイクシオン。」

「うん。ガルームも元気で何より。」

ちなみに喋ります。

「さあ頼むぜ。この道を真っ直ぐ道なりに。」

背中に飛び乗り雷速の一角獣に光の手綱を付ける。あくまで自分が落ちないようにするためだ。胸当ての所に結んだ手綱を持ち音を立てる。

「頼むぜ！」

「了解！！」

いななきをあげそれは走り出す。

イクシオンは雷の音と同じ速度、則ち音の速さ（約秒速340 m/s）で走る駿馬。

直ぐに見えなくなるがその名馬を呼び出す光景を見る者がいたとは気づかなかった。

「見えた、あれだ。」

大きな城が遙か彼方に見えた。町の入口では二人乗りした馬が一匹。

「ルイズ！才人！」

声をかければ振り返りイクシオンは走るのを止め歩きだす。

「一角獣！？」

後に聞いた話だが一角獣は王家の物らしく何処から奪取してきたのかと思っただけ。

「なあ、もう少しゆっくり歩けよ！こっちは腰ががたがたなんだ！」

才人は悲痛な声で訴えるが知らん。

「所で主何を買いに？」

「才人の剣。……ここだ。」

路地に入った小さな武器屋。先に才人に入らせた後、体内からソウルブレードを引き抜き中に入った。この店：余り質は良くないな。

「いらっしやい。」

「こいつに合う剣が欲しいんだけど。」

才人を一目見ると少々小さめの突撃剣レイピアを渡した。

「あの時もつと大きな剣を振ってたわよね。」

ルイズが剣を見ている間俺は店主に一つ頼んでいた。

「この剣が入りそうな鞘は無いかな？」

店主は軽くソウルブレードの刃を弾く。きーんと金属音がした。

「こりゃ、本物だ。」

「で、あるかな？」

「へい、失敗物ですみませんが。」

彼は慌て中に入り一つの鞘を持ってきた。

「…間違つて鉄製の鞘にしたんだな。」

鞘が重すぎて使えないものになっていたが、俺にはちょうどいい。溶かすのももったいなかったのだろうな。半分ぐらいは使い物にな

らなくなる。

「へえ。あつしももつと若い頃は自分で打ってたんですが。」

「いくらだ？」

その時後ろからルイズが服を引っ張った。

「ちょっと！買うのはあたしなんだからね！」

店主は少し迷っていたが…

「新金貨で5枚で。」

「保留。」

「彼には大剣を。これでいいだろ、ルイズ。」

再び店主は中へ。彼は鋼の大剣を持ってきたが、ルイズが今用意していた金では足りなかった。

「一番安くていい。大剣にしてやってくれ。」

ようやく彼が持ってきたのは錆び付いた剣。まあ研ぎ直せば使えるか。

「いくらだ？」

「新金貨100………まけて90でえ。」

話の主導権をルイズから奪ってしまっていたがようやくルイズは言った。

「それ頂くわ。」

「えゝ!?」

文句を言いつつ鞘も貰い才人は外に出る。俺は最後に店主に言った。

「あんた売るより作る方が向いてるぜ。」

彼が何を思ったかは知らない。学院に戻った後俺はミセスシユブルーズに鉄の鞘の強度を上げてもらったうえで漆黒の鉄の鞘に純白の刃を収めた。

「何の騒ぎだ？」

部屋に戻った。中では才人は今日買った剣を持っていて、近くにはルイズ、キュルケ。そして黙々と本を読む少女がいた。あれ?あの水色の髪をさっき聞いたような…まっ、いつか。

「帰るわよ、タバサ。」

キュルケとタバサ…彼女らはでていく。

いや、あの青髪の少女が止まり俺の顔を見た。深い瞳が俺をのぞきこむ。その中にあるものは警戒と未知の物を見る心…。長いと思った一瞬だったが、すぐさま歩いていく。

「おやすみなさい。」

その後ろ姿に頭を下げた。

『相棒：気をつけな。』

「へっ？」

その剣は俺を警戒するようにと、才人に言った。…………ふざけんな。  
冷たくはつきりとその剣に告げる。

「喋る剣か。」

後にデルフリンガーを加えた三人は語った。あの時のガルームの目は召喚直後の見るものを凍り付かせる『悪魔の瞳』であつた事を……。そしてこの出会いこそ運命の最初の歯車だったこと……



## 真実の剣（後書き）

存在を知る者は恐怖する。存在を知らぬものもその名を聞けば恐怖する。ならば…その存在の意味はどこにある？叩きつけた感情は全てのイメージを破壊していく…そして滅びが始まる。

次回ツインシンフォニー リアルマジック地方の旅／ガールーム編  
歌声、響く

次回をお楽しみに。

## 歌声、響く（前書き）

今度のは相当に自分の文才の無さのオンパレードでした。二曲ほど  
実際にある曲を引用しています。

レイの説明は…またいづれ。

歌声、響く

「品評会？」

俺がそう尋ねると彼女は答えた。

「そう言うお披露目があるの。」

「くだらねえ。」

同感だ才人。だが状況が状況だ。

「……で、ルイズは俺達に何をしてほしい？明日なんだろう？だったから早く準備する必要がある。」

彼女は俯いて唸ったままだ。才人に話を振ってみた。

「才人は何かあるか？」

「……そうだ！最新の得意技があるぞ！！」

これはラッキー！……そう思えたのは彼の答えを聞くまでだった。

「パンツ洗いー！！」

…はい？

「…はあ？」

「だからルイズのパンツ洗いの実演ってのは？」

才人はその妄想で実際にやる事を見せた。あまりの気持ち悪さに吐き気を覚えた。てかやるなよくそやろう…。

パチン！！

ルイズが鞭を持った。……俺は知らん！才人慌てふためいて壁の方に逃げデルフリンガーを倒した。

「嘘！嘘だつて！」

「……！そうだわ、才人あんた剣を使えるのよね？剣技を披露するってのは？」

「どうだろ…？」

「止めとけ。才人、一昨日の『剣なんてあの時初めて持った…』これは事実か？」

「ああ。」

「なら剣の型を知らないお前じゃ変な動きになるだろう。舞踏も無理だ。」

落胆したルイズは立ち上がり言い残した。

「悪いけど二人で考えといてね。」と。

「…何か優しいなルイズ。」

「元々優しいよ。ただあいつは周囲の態度と意地っ張りな性格のせいでツンツンしてるのさ、きつと。さて……………どうしようか。」

「何も持っていないしな。何かしろって言われてもさ。…………なあガルドム、特技とか何か無いか？」

「…………分からん。初めての事も普通に…………」

「どうした？」

ピアノ……………感情を叩きつけるために使ってきたあのピアノで誰かを笑顔に出来るか？空っぽの心に光を点せるか？

「才人、今日中に一人芝居かお笑いネタを用意してきてくれるか？」

「何か思い付いたのか？」

「ああ。どっかからピアノを探してくる。頼むぜ。」

じゃあ。っと誰もいない所に…………この時間は授業のはず。周りに気を払い深呼吸…………。

「禁術100の4！コントロールドア……！」

目の前が歪む。黒い歪みは扉に変わった。5日ぶりだな…牙城に帰るのは。

「…静かだな。」

「当たり前だ。何時だと思ってるんだ？」

レイ・トオル。彼がそこにいた。

「久しぶり。レイ。で、何してんだ？」

「ギルムから頼まれてな。」

パソコンの画面に映ったのは二人の女性。片や切れ目のピンク色の髪。もう一人はおっとりした雰囲気を出す金髪の女性。

「…こいつらは？」

「さあな…後1分で解析が終わる。」

それだけ聞くと部屋の端にあるピアノの方へ向かった。それを一時的に圧縮し左手で握る。同時に彼は叫ぶ。

「解析完了!……って何コレ？」

「どうした？」

「こいつら…魔力生命体だわ。いや、ビックリビックリ。けどちと

まずいな。」

こうなるとレイは自分の世界に入ってしまった。戻って来ない。諦めて立ち去ろうと黒い扉に右手をかけた。

「…ガルーム。ひょっとしたらお前を呼び出すかもしれない。『闇の書』って言うイカれたアイテムがあつてな。ギルムはその事件の収拾に当たるはずなんだ。」

ふざけた時に発するやけに高い声じゃ無い。低く…レイが出せる限界まで低くしていた。

「ギルム フォロー 餓鬼の尻拭いか？」

「フィニッシャー いや最後の刃だ。」

それだけ言葉を交わすと再び闇の扉を歩き去っていった。

「（水と風の魔素を感じろ……空気を振動を封じろ……流れを止め音を滅ぼせ……解き放て……）」

封じた視界を再起動させ、ピアノの前で言う。

「禁術84の1、14の1！サイレントエア！！」

沈黙の空気が広がり透明な壁が出来た。椅子を引いてそこに座り、カバーを開いてピアノを叩いた。耳障りな音が響く。誰もが『へたくそ』と言うような、そんな稚拙すぎる伴奏。歌もない。

形もない。何にもない。ただ新しい曲が思いつけばと、ただひたすら叩きまくった。

「聞かせてやるよ……」

誰に言う気も無かった。気がつけば声が出ていた。音を合わせ、俺は叩いた。弾くのではない。叩くのだ。音はまだ雑音でしかない……

「……いよおっ!!」

歌舞伎のまね事と一人芝居。ルイズのを顔を見る限り好評ではなさそうだが……

「ちょっと！その何処が自慢の剣技なの？」

「これ、俺の世界の『歌舞伎』って言う演劇なんだけどさ面白くない？」

「……真面目にやってるから多めに見るわ!!」

顔をふいっと横にする可憐な少女。だがルイズでこう、なのだ。これでウケるとは思えない。どうする？俺はこの手の類は得意どころか余り知らない分野だから……その時気配を感じた。この学院にいない者の気配。

「才人、三步下がれ。ルイズ、そこを動くな。」



鞘つきの剣を持ち待つ。

カッソ

まだ早い。まだ階段だ。

カッソ

まだ……こいつは誰だ？

カッソ

…この階で…こっちに来る。

カッソ

今、キュルケの部屋の前辺り…

カッソ

隣の部屋……

カッソ

止まった！！背の高さは才人より低い……だがルイズより数センチ高いな。

コンコン…

落ち着け、ターゲットに敵意はなさそうだ。魔力を解放も溜めてもいない。ならルイズの知り合い？俺は勢いよく扉を開き鞘を首元に近づけた。

「誰だ？」

「ここは…ルイズ・フランサワーズの部屋ですよね？」

女……？

「いかにも。我が主ルイズに何のようだ？」

彼女はフードを取り去ると後ろからルイズが言った。

「ガールーム！早く中に入れて扉を閉めなさい！！」

無言で従った。世界が固まる。動き出したのは侵入者の方。ルイズ

も彼女に近寄る。侵入者はルイズを抱きしめた。

「久しぶりね、ルイズ・フランサワーズ。」

「お久しぶりですね。姫様。」

姫……………？

「才人、彼女は？」

「あれ、ガルドム知らないのか？今日、学院に来たトリステインの王女、アンリエッタ姫様なんだって。」

彼女は自分がしていた事に気づき離れた。やはり彼女は貴族。王には絶対服従。たとえ、親友でもこうなるのか…。

「申し訳ありません！姫様！！」笑顔から一転少し眉毛を下げ悲しげに彼女を見た。

「そのような行儀は止めて。ルイズ。私達はお友達じゃないの。」

ルイズはその言葉に笑顔で言った。

「もったいないお言葉でございます。姫様。」

俺達はルイズの後ろに行き、才人が聞いた。

「あの…どんな知り合いなの？」

「姫様が御幼少の砌御遊び相手を務めさせていただいたのよ。」

懐かしそうにそう言う彼女。

「幼なじみと言ってちょうだい。……ルイズ……ずっと会いたかった……。」

感涙し、そっと優雅に涙を拭く。彼女らの邪魔をしてはいけないな。

「……主、少し席を外す。」

「そう?。」

「ええ。ではゆっくり楽しんでください。人払いか防音の魔法はいますか?。」

彼女は横に首を振る。才人は自分から窓の鍵を閉めに行ったが。

「ではアンリエッタ姫、また明日。」

踵<sup>きびす</sup>を返しその場を立ち去った。

中央塔の頂上。瓦の上に腰を下ろした。吹き抜ける風は冷たく頬を撫でてた。

「……。」

「誰かいるのかのう?。」

「オールドオスマン。」

「おお、ガルームじゃったか。して何をしておる？」

彼は窓を開けこつちを見ていた。

「いえただ月を。入ってよろしいですか？」

「晩酌の相手を探してたんじゃ。調度良いわい。」

俺は瓦に手をかけ部屋に飛び込む。 学院長はワインをだして座っていた。

「平民がいただいてよろしいんですか？」

「わしは気にせん。それにレン先生やシュプルス先生やコルベール先生と仲良くしてるそうじゃないか。」

知ってたんかい。この爺さん底が見えない…。

そつと注がれた赤ワイン。彼は風味と香りを楽しみながら飲み干していく。 無言で足してくれる。

「…さて、そろそろ話してもらえるかの？お主の正体と目的を。」

いずれ話すつもりだった。 ゆっくりと俺は言葉を紡いだ。

「…私はこの世界の星々を超えたさらに向こう側、 我々が『星の海』と呼んでいる世界と世界を区切る大海の中にある、 一つの世界から来た。」

右手で指をパチンと鳴らし幻術を展開する。

今天を越え宇宙を映した。時間と共に後ろに様々な星が集まった。そして大きな膜に覆われたこの世界…リアルマジック地方がその全貌を見せた。

「ふむ…」

「名は『魔界』。かつて神に罪を着せられ落とされていった天使達の世界。」

様々な世界を潜り赤い空に覆われた世界が映った。

「俺の目的は人々の負の闇が産む魔物、ダークネス。」

星の海は消え、机の上にその場で歩く蟻のような黒い影…騎士甲冑を纏った闇人形。

「こやつらが…」

左手を弾いて幻を消した。

「そして…俺は化け物。かつて人の手によって創造され…殺されるはずが世界の意思が俺と関係なく俺に生きる事を強いた事から歪みは始まる。」

彼はワインを自由に飲みながら話を聞いている。

「俺は人間として作られたはずだった。

だが戯れに作られた命の元は全ての生命。ありとあらゆる生命

の長所のみを追求し全てを模倣し超越し、完成させられたのは融

キマイラ

合超生命体。

だがまだ終わらない。 闇の中に逃げ出した俺は今度は…いや、俺が完成する前から世界は俺をずっと狙っていたんだろう。ともかく世界の意思と復讐者イレギュラーは俺を利用しようと画策した。」

彼は急に俺に質問をさせるように手を前にだした。 頷き質問内容を問う。

「お主の言う、世界の意思、イレギュラーについて聞きたいのじやが。」

「世界の意思とは多く存在する世界に宿る意思そのもの。」

人間と同じで様々な性格があるが、本質的には皆傲慢でずる賢く全て自分の思い通りにならなければ気が済まない。 最悪、自らの持つ『修正力』によって世界を（思い通りに）修正する。

そして復讐者イレギュラーとは世界の意思によって消され（かけ）たある世界の意思なんだ。 守っていたのは人間がまだ存在しなかった時代。

世界は混沌の中にあつた。 唯一創成の神々はいたが他の世界は……そこで生まれたばかりの世界の意思は存在しない世界を確立させた。 それは異次元イレギュラー。 奴はその守護者だつたんだ。 永い時が過ぎ、異次元が不要になった時、意思は奴を異次元イレギュラーに閉じ込め異次元の範囲をごく僅かに減らした。 皮肉な事に半径5mの球の中何も無い異次元に永い時混沌カオスから世界を守りつづけた異次元コスモスは調和故に滅んだ。」

「……………」

「…故に奴は世界を憎んだ。 同時に世界の意思は修正力によって思い通りに歪めた世界がつまらないと感じはじめた。」

「何故？」

「もし…ある一日が永遠にループし自分だけがその事実を知っていたらどうします？」

修正力で無理矢理流れを変えた事でそれ以上の進歩が無くなったんです。修正のしすぎでね。意思達は協議し答えを探した。そして…」

深く息をつく。

「見つけた。」

知らぬ間に俺は血が出るほど手をにぎりしめ目を閉じた。　ダークネス戦の合間、一つのカケラに尋問して知った真実。

パリーン！！！！

「…世界をもう一度最初に戻し…世界全体で始まるDEATH・GAME。」

世界の勇者達と最悪の悪魔達を戦わせる物語に修正させた。

悪は人の負の感情そのもの。たった一つ、世界を憎み壊したいと望む。放つとけば大量の血と命を対価に世界が減ぶ。

だが正義は多すぎて、正義同士が潰しあう…そこに光を入れた。」

ふと手を見るとワインは手にかかり血のようだった。

「それが俺だ。修正力の影響を受けない五人の騎士、彼らをこの戦いに放り込んだんだ。ありとあらゆる…力を持って。」



その場で反り返り天井を見る。真っ白な天井。右手を伸ばす。血が垂れた。

「悪い、湿っぽくなっちまったな。」

「……………」

「オールドオスマン？」

いつの間にかワインは空になっている。朝日が差し込んできた……  
って事はずっと喋っていたのか、俺？

「あの…オールドオスマン？」

「Z Z Z Z Z ……」

いつしか眠っていたらしい……今日は訓練は無しだ。立ち去ろう  
とすると彼は目を覚ました。  
立ち上がった音で目を覚ましたらしい。じゃあ何でグラスを割って  
しまった音に気が付か無かったんだ？

「ふわあっ…スマン寝てしもうた。で…なんじゃったかの？」

爺さん……。震える腕を隠し言った。

「今、明日の出し物の相談内容を言おうと。」

「おお、そうじゃった！で…なんじゃったかの？」

……いいわ。ピアノ弾く予定だったけど変更。

「少々危険な特技と演技を……ね。」

完全に目を覚ました彼は目を細める。ルイズの虚無の魔法について話し合っていた時と同じ目だ。

俺は掌を割れたガラスに向けた。割れたガラスはひとりでに歩き重なり……黒く光るとそこには亡者を焼き、食らう巨大なナニカが青い目をこちらに向けた。

「……この時間なら皆起きているだろう。」

昨日から放っておいたピアノ。蓋をゆっくり開け二曲奏ではじめた。

まず弾くのは何ともギネス級の不幸を抱えた青年。奴と最初の相棒とのデュエット曲。

「響かせよう良太郎、モモタロス。お前達の歌を。」

ふう……と深呼吸し荒々しくピアノの高音を響かさせる。

それは赤い鬼（と言うと怒るが……）の短気を。

直ぐに流れる水の如く優しくピアノに触れる。優しさ……それは良太郎が持っていた強い心。

「こぼれ落ちる砂のように 誰も時間止められない  
その定め 侵す者 僕が 俺が 消してみせる 必ず」

テンポが早いこの曲は正直ピアノじゃきつい。もっとゆったりと

した曲にしようと思えば多分出来るが…それじゃ歌詞の間隔がおかしくなる！もうBパートだ。

「自分の中誰かが 騒ぎだそうとしている  
俺の時間を待つてる 制御出来ない衝動」

元々デュエット…ソロじゃ声の高さに限界があるな。

「Right now！ 目を背けたら… 歴史が崩れてく  
風さえも叫んでいる 目覚めよ熱く

誰も知らない時空 駆け抜けてゆく光

Get Ready （お前が）Time to change）  
決める）

この世界の行方を」

さあ、気合い、いれていかないと。さあ、サビだ！

「2つの声重なる時 誰よりも強くなれる  
動き出そうぜDouble-action！ 今と 未来 1つに  
なる瞬間……」

後はキーの操作に集中して……。終わった……。訓練並に疲れるなこれ。

『当たり前だ。異なる動作を同時に行う能力はな……』

「分かってら。」

再び深呼吸。…視線？何処から？

辺りをみると使い魔だ。使い魔の群れだ。それと…降りて来るド

ラゴン。背にはタバサがいた。

「おはようございます。タバサさん。」

「…今の…」

「…はい？」

「…何か聞かせて。」

そつと吹く風。更に加わる乱入者<sup>シエスタ</sup>あり。

「おはようございます!!」

「シエスタか。これからコンサートを開く。良ければ聞いていくといい。」

「楽器の演奏ですか？」

他の使い魔達は犬のようにおすわりをしている。

「楽器だけじゃないが…今から歌うのは我が友の一人が作った歌。

かの者は最愛の人を失いかけた。その時に歌った歌。ここに  
伝われ、今こそ届け。貴方に送る『1000の言葉』。」

朝に響く物悲しいメロディー。窓から外を見たり下に行く自分達の  
使い魔達が黒い楽器を演奏しながら歌っている男の近くにいた。

「嘘も全部……覆い隠してく……ずるいよね……」

その男はこの前の戦いで徹底的な恐怖を生徒達に植え付けていた。だから最初は近づかなかった。だが楽器の音色は澄んでいて、彼の歌声も澄んでいた。ただ歌っていた。そこに悪魔はいなかったのだ。

「帰ってくるから、追いついていく、君の声……」

意地はつて 強いフリ 時を戻して 叫べばよかった？  
行かないでと涙、零したら？」

伴奏と歌を組み合わせ、その思いを感じ、通り過ぎた願いを再現する。

少し離れた所ではマルトーを含む給仕達が、ある一室からは姫君が、レンを中心とする先生達ですら彼の音楽を聴いていた。

「今は出来る……どんな事も……」

そこで奇跡が起こる。

彼を中心に芝生に草花が生えていく。更に見たことの無いピンク色の花びらが空から散る。

タバサがそれを見て一言。

「雪みたい。」

と呟いた。

「聞こえてる？1000の言葉を

見えない 君の背中に送るよ 翼に変えて……」

聞こえてる？1000の言葉は 疲れた君の背中に寄り添い 抱き

しめる…」

その花びらを見て涙する男一人。

花びらと同じ髪色の少女はその涙に何も言わない。 シュールだけ  
ど幻想的すぎたそこはまさしく魔法の世界だった。

「言え無かった1000の言葉を ラララ 君の背中に送るよ 翼  
に変えて」

聞こえてる？1000の言葉は ラララ 君の背中に寄り添い……  
ラララ」

静かにその曲は終わった。

歓声が上がる。二つ程魔法を使ってしまったが…まあ禁術35の1  
フラワーシャワーと禁術63の2リビングガーデンなら実害は無い  
し問題無いだろう。さあ今日は品評会だ。

## 歌声、響く（後書き）

試すものは傲慢さ。人の欲の深さが別れと決意を呼ぶ。

次回 ツインシンフォニー リアルマジック地方の旅／ガールーム編  
悪の土人形<sup>ゴレム</sup>

次回をお楽しみに

## 悪の土人形（ゴーレム）（前書き）

ggd ggdだぜ！今回間を開けすぎたかもしれないな…。亀更新でこめんなさい。



## 悪の土人形（ゴーレム）

「ただ今より今年度の使い魔お披露目を執り行いますー！」

貴族達の歓声が誰もいない廊下に響く。反響は壁を伝い小さくなりながら塔へ。

そこにダレカがいた。フードで顔を隠し地獄に下るようにゆっくり、ゆっくりと降りていった。

使い魔…それは主の目、耳、鼻となり主に従うただの奴隷。

ならば俺の隣にいるこの青年は何だ？ 既に主から犬扱いされ鞭で打たれても主に人間として接するこいつは何だ？ …俺？ 俺は力で主の信頼を勝ち取っただけ。

化け物…悪魔…魔物…人外…畜生…破滅の守護者…デストロイヤー世界殺し……俺に与えられたのは力……最初は弱かった。こんな称号は無かった。いつの間にかついた多くの称号（殺しの証）。

才人は強い。 まだ幼い。 だけど強い。 使い魔としてではない。

「いいこと、決して恥をかくような事はしないでね。」

ルイズはそう言っていた。 サイトは思いつきり反論する。

「なんだよ！あんなに考えさせといて！」

売り言葉に、　買い言葉…。　嘆息するよ…。

「いいのよ！あなたたちの事姫様にばれちゃったんだから！！」

今は一つの思いを持っているが彼は彼女<sup>ルイズ</sup>だけを見ている。　唯一  
彼だけが……

「続きまして、　ミス、　ルイズ、　ドラ、　ヴァリエール。」

思考回路にルイズと才人の喧嘩はシャットアウトしていたが、  
コルベールの言葉だけはしっかり入ってきた。　全く空気読めよ…。  
そう言いたい気分だ。

まあ…見てやるよ…　　の、絶対に　　敵…そんなの  
に大切な者を奪われた時の顔と、どうするかを…

「行くわよ。」

「OK、Master。」

「へーい。」

壇上に立つ俺達。　今はいい。　はやし声が聞こえる度にそいつ  
を睨みつけていたが。

彼女は目を必死に閉じ恥辱に震えた。見渡す限りの馬鹿笑い。

[illegible]

[illegible]

「ムカつく……！」

「うっせえ！黙ってみてろ！」

劍の封が解かれた。俺と同じように前を睨む。何だ……こいつだつて主のために怒るんじゃないん。  
ルイス主を馬鹿にされる……自分を馬鹿にされたと同じ……か。そつと彼の前に手を出し制止した。

「待ちな。俺達の主を馬鹿にした事はこの場で謝罪してもらうからよ。剣を振る対象も無いのに…抜くなよ。」

よくよく見れば最初から笑ってない奴がぼつぽつといた。一番最前列にいる四人はただじっとこっちを見ていた。

さあ…悪魔<sup>オレ</sup>流の感謝と行こうか…！！俺は目を閉じた。

「（…煉獄にいる惨殺者よ。もつとも弱い竜を…。）」

瞼の向こう。火の海から顔を上げ、溺れる罪人を食している。悲鳴が聞こえた。一匹…こっちをみた。こいつでいいな。

「（少し遠いが…禁術、11の3、オールマグネット…逃がしはしない。禁術…100の2、ゲート、オープン…。）」

異次元の扉は開かれ見た竜はこっちを見る。黒い闇に徐々に近づく。けど嫌がるその竜は体を震わし岩に爪を立てマグマの中にある岩石に尾を這おわせ、必死になって拒絶する。

だがその努力もむなしく竜は頭からその闇<sup>ゲート</sup>に突っ込んでいった。

「（禁術、100の3！！クローズゲート！！！！）」

そして何事もなかったかのように煉獄から黒い闇は消えた。竜はこの世界へ…俺の人形として…。目を開き大げさに原っぱを指差した。

「使い魔は主の力を測るのにも用いられるらしい…ならば俺の隠匿していた力をお見せしよう。すでに一人に見られてしまったが…。

「ちらつと生徒を……青髪の少女を一瞥し、指した所からは闇があふれだし草原を焦がす。」

闇の門は開きそこから火柱が昇った。その中に質量をもつナニカが現れる。そしてそれは炎を払うと同時に空を舞った。黒い仮面のようなものをつけ山羊のような角を生やした体の太さは人間3人分、今は蛇のようで手とか足とかはない。それが甲高く吠えた。

「キャアアアアッ！！！！！！！！」

「あれは灼熱穴居竜ヴァ バジア！！」

ゲームの知識をここで展開するんじゃない！ それに違う！

「違う。煉獄火炎竜メガラウス。煉獄の炎の中で生き続ける邪竜だ。」

「奴はここに来る時に既に死んでいる。だが今は俺の人形。メガラウスは大気を泳ぎ生徒達をじろじろと睨む。その瞳は濁りただ虚ろな眼は王女に向き首を伸ばした。」

「姫様をお守りしろ！」

「化け物め！来るなら来い！！」

護衛の騎士達がいるのにも関わらず竜は首を伸ばす。

「違う！尻尾だ！！」

誰かが叫ぶ。檻のような形になった尾がアンリエッタを包む。  
大地ごと彼女をえぐり取る。

「「姫様……！！」」

竜は再び召喚された所へ移動し騎士達は俺を取り囲む。

「貴様！姫様を解放しろ！！」

「それはできない。奴は俺の支配下にはもういない。取り返したかったから自力で取り返しな。」

壇上に上がるオールド・オスマン。

「今朝言っていたのはこのことか？」

「その通り…始めようか。貴族の戦いとやらをね…。」

跳躍し降り立つのはメガラウスの頭。高らかに宣言する。

「この竜は罪人を食らい尽くす煉獄の邪竜！囚われ人は一国の姫  
ならば貴様らの出番だろ？未来を作る子供たちよ。この竜は  
俺からのプレゼントだ。破滅の竜…討てるものなら討ってみろ！  
！その胸に志あるものだけ…前に出な！！まあ、才人は強制な。」

「いつ！？」

「そうよ！姫様を助けてきなさい！というより、アンタはアンタでなににやってるのよ！！！」

ノリツツコミがいいね、ルイズ。だが、今はお前だけにかまっている暇はない。

「なに、貴族の驕りが力に匹敵せぬことを証明したいだけさ、俺はな。まあ安心しろこいつが死ねば、アンリエッタ姫は確実に開放する。それまで傷一つドレスの汚れ一つ付けないから安心しろ。」

頭から飛び降り左手で地面を指し真横に滑らせる。ピンク色のラインが現れた。

「そこからが決闘場の範囲だ。そこで震えながら観戦するもよし。自分の持てる最大の勇氣をもって挑むもよし。……ほう。お前だけは傍観していると思ったのだがね。」

どよめきが走る。なぜならあれだけの醜態をさらしたはずの男が目の前にいたからだ。

「昨日の今日で済まないがね。」

「おもしろい……。いいだろうギーシュ。ほら、才人も降りてこい。」

「……なあ後ろのやつお前を食おうとしてるんだけど……。」

才人の進言に俺は振り返った。確かにぎらぎらした歯があった。



「まあ、ここは範囲内だから仕方ないか。」

できることは攻撃を避けること。 たった一歩だけバックステップで距離をとり右足を軸に回転して出す回し蹴り。 直撃した竜は大きく体制を崩しその顔は大地に触れた。 大地は揺れ原っぱはわずかに焦げる。

「さてと…入ってきた奴は好きにするといい。」

それだけ言っただけ俺は彼らに背を向けた。









「どうぞ、アンリエッタ姫。」

さしだしたのは創造した水の羽衣。これで熱さは今もほとんど感じてないはずだが、これで完璧だ。

なにしろ我が仲間の一人がこれをまとい溶岩の中を突進み得るべきものを得て帰ってきた…といういわくつきの逸品だ。死んだ炎竜の炎など、空気のごとく熱さを無に帰すだろう。

「何故こんなことを？」

睨んでいるようだが、可愛いもんだな。怖くもなんともない。

「理由はさっき言った通り…そしてきつかけは……」

思っ  
たか  
ら

そ  
う……  
き  
っ  
か  
け  
は……  
俺  
が  
こ  
の  
地  
を  
去  
ろ  
う  
と

「!？」

「本来、俺には目的があった。

それはある敵の存在をこの世界から追放し世界の住民であるお前たちに危機を伝えることが俺の使命だった。だがこの世界に俺が追うべき敵はいなかった。ならば他の世界に行き警告を伝える責務が俺にはある。

だがな…アンリエッタ、俺はこの世界でルイズを守ると、使い魔の契約をしたんだ。だったら最後に俺がやつらにしてやることは…最初の実戦をさせてやること。戦いの愚かさを知ってほしかったんだ。」



才人が竜に突貫し、急に現れた手によってあしらわれる。ギ  
ーシュが青銅の人形ゴレムワルキューレを召喚し突撃させるも才人と同じ  
くあしらわれた。

「何かありましたら…これを。」

手渡したのは小さな鳥。

「んんゝ急に起こして何〜？」

「これは？」

「我が体内に潜む魔物の一部…名をクラッシュバード。破壊を導く  
死の鳥だが、いわゆる体は大人、頭は子供っていうあほの鳥です  
から安心してください。」

「ちょっと！！それヒドイ！！」

ピョコピョコ跳ねるが何も問題ない。

「知ったことか。」

彼らにも背を向け再び壇上へと帰還する。　ずいぶんとお粗末な戦い方だ。　才人の剣はすべて空振り。　ギーシュのアースハンドもワールキューレの突貫も炎の中に消えゆくばかり。

メガラウスはただ忌々しげに、めんどくさそうに手を振るう。それがずっと続いていた。

だが彼らの強さだけは証明されていた。　しびれを切らし突進していったやつらはすべて全滅。　俺と戦った連中なんかがあちこちで倒れていた。

「デル・ウインデ。」

青髪の少女が呪文を唱える。　杖に魔力が集い、　風が渦を巻く。

「ウール・カーノ…ファイヤーボール!!」

刃は白い形をとって飛び出し、　キュルケが放った炎の玉は何発

も飛びかう。 が、 体に当たってかき消える。 竜は手を伸ばし  
全員をはたこうとする。

「コンデンセーション!!」

水流をたたきつけるも、再び蒸発した。 水はさすがに嫌だったらしい手をひっこめた。 これを機にモンモランシーは水鉄砲を乱射する。 得意げになっているが顔色は悪くなっていく。 この世界での魔法使用は、 精神力をかなり消費するらしい…。 それで  
も竜が死に至ることはなさそうだ。

「ダメね、 全然効かないじゃない!」

攻撃をやめれば、 反撃の応酬が彼らを襲う。

「弱点を撃つしかないわ。」

そんな中で飛び交う声は不安と恐怖に沈みかけていた。 キュルケもモンモランシーの発言に対し強気な言葉を発するが… 実質は彼女も怖くて怖くてしょうがない。 ほぼうつむいている。

「そんなのどこにあるんだよ!!」

才人がそう叫ぶ。 確かに今のこいつらじゃ、 難解攻略の不落の城。 そう感じるかもな。

「目。」

ほづ… あの子戦闘慣れしているな。 そうでなければ貴族が目をねらうなどあり得ない。

「…ギーシュ、手を貸してくれ。」

「嫌だね。　ワルキューレ！行け！！」

ギーシュはワルキューレを放ち全員が双眼を狙った。騎士人形が槍を構え突進する。メガラウスは口を開き噛みつきに行く。あつさりとすべて食われた。そして大きく口を開け息を吸うと巨大な熱戦を吐き出した。全員ただ逃げるしかなかった。その結果焼き尽くされた大地は黒く焦げる。あの一撃、直撃したら死ぬな。

「あああああ！？」

「勝てるわけじゃないこんな化け物！」

「戦略的撤退。」

ついにギーシュが尻もちをついてキュルケははまだダメージを受け付けない邪竜に弱音を吐いた。タバサはそつと逃げ出そうとし結界にぶつかってそれを破壊しようとする。そんな中桃色の神が竜の端で揺れた。

「何やってんだ！？」

ルイズの目の前にはアンリエッタがいた。

「姫様！今お助けします！！」

「ルイズ！？」

なにも唱えずにただ杖を振った。いつの間にか届いた手だったが彼女が檻の尾を破壊しようとして起こした爆発は竜に悲鳴を上げさせた。

キ  
ヤ  
ア  
ア  
ア  
ア  
ア  
ツ  
!  
!  
!  
!  
!  
!  
!

結界外まで届いた声に残っていた生徒たちは耳をふさぐ。見ればレン達が負傷した生徒を介抱していた。他の先生や護衛の騎士たちもそつちに回っていて戦闘をよく見ていなかった。だから一人の死が近づいていることに俺と数名以外気付いていなかった。竜の青い目がギロリと光り先ほどよりも長く息を吸っていた。

「あああ……」

竜の放つ殺気に誰も動けなかった。

「ルイズ!!!!!!!!!!!!!!」

一人を除いて。

走った。

竜の口が閉じる。

走る。

彼女を抱きしめ跳ぶ。

開く。煉獄の竜の今の本気の炎が辺りを包んだ。

「ダーリン!？」

「無事!？ルイズ!!」

まだ共闘しようという考えに至らないのか…あいつらは。いやまずルイズの魔法を生かすべきか。それとも…やつらを鼓舞するのが先か。逃げ出せない以上戦うしかない。俺は圧縮したピアノをその場に置き、ある音楽を奏でる。メガラウスがこつちを向いた。よし…この音楽に歌はない。ただ味方を鼓舞し敵に送る死のメロディだった。そう、『不死身の敵に挑む』無謀ながらにそれをやって抜けた者たちの応援歌。

「これって…。」

「才人は聞きおぼえがあるかもしれないな。これはある王が息子に送った勇気の歌。不死の化け物すらも倒す勇気を与える歌だ。だが、たった一人の勇者が魔王一人と戦って勝ったためしはないがな。」

これだけヒントだしたんだ。ちゃんとその死竜を殺してくれよ。じゃねえと俺の首をあぶねえしな。首が危ないといえど…この後の発言で、オールド・オスマンにどれほどの雷を落とされるかな…。

「ルイズ！ 貴方の魔法はすでに私が見せたあの魔法だ！！ 思い出せ！ その呪文を！ それは破壊をもたらし誰かを救う！！」

かを救う!!

思い出せ！その呪文を！それは破壊をもたらし誰

彼との付き合いは短い。　だけど…彼がサイトの次に私を見てくれた。　彼がいろいろと支えてくれた。　私の中で思い出すのは二つの太陽。　爆発とともにほんのわずかな時間に現れた太陽。　それが答え…でもなんて言っていたんだっけ？

「ルイズ！前！！」



魔法が使えず周りから蔑まれていた貴女…どれほど苦しかったかはかりかねます

「才人皆のところに連れて行って！ 姫様！！ 必ず助けます！ もう少しお待ちください！！」

サイトはもうなりふりかまわずただ私を連れて走った。その後ろを爪をとがらせ地面にクレータを作る悪魔が迫る。

「デル公！どうにかなんねえのかよ！！！」

「こりゃ韻竜に相当するがこいつはもう死んでいる。体内のエネルギーで動かしているだけならもう一回倒せば本当に倒れるはずだ。」

「力が集まっている場所を破壊すればいいの？」

カチカチと鳴らしてあの剣は笑った。

「ああ！そうだと、嬢ちゃん。」

だが貴女は其中で必死になった 優しい心を持った だから  
教えます 貴女は魔法使いだ

「（そうよ…この先に確か…!!）」

彼がピアノをたたいたたびに気分が高揚する…そんな感じの歌が当たりに響く。 無理とか言ってたゼルプスト…キュルケも。 戦いに勝つには逃げるしかないと考えどうやってこの結界から出るか考えていたタバサも。 へっぴり腰になってたギーシュも。 その隣でただがむしやりに水をぶつけていたモンモランシーも。

私を抱えて…抱えて!?!どうしてこんなことに気付かなかったのかしら!?!何で私の使い魔が私を…お、お、お姫様だっこしてるのよ!?!?!?????

「離しなさい!!サイト!!」

「おっ、おう!」

皆のところに着いたからか、 私を下ろしサイトは迫っていた巨大な手に立ち向かい、 切り下ろした。 サイトのルーンはあの時と同じように輝いていた。

エ…プ…ン…

「サイト！僕のアースハンドに乗れ！！」

「じゃあ、私とモンモランシーはあの竜をひきつけましょ！」

「共闘、じゃないと倒せない。」

「それしか手はないもんね。」

皆が共闘のために互いを見合わせる。　けど、私は…。　今はあいつの言葉を思い出すしか…。

…クスブロージョ…！

私だって、　姫様を助きたい！　皆の力になりたい！！　私は…ゼ口のルイズじゃないんだから！！！！！！！！！！

エクスプロージョン！！

ほう…ルイズの目が変わった。　どうやら、たどりついたようだな…。　不完全な自分の魔法に。　メガラウスも6人に目を向け、再び吠える。　そして全エネルギーをその口内にため込む。

「キュルケ！」

モンモランシーの掛け声とともに正確に首元を狙った火と水の放射が始まる。

「タバサー!!」

彼女ができるだけの氷の嵐を腕の付け根に叩き込む。　同時に凍っていく腕。　あれは火が通ってないからな。　よくタバサも気がついたな。　メガラウスは二人の魔法に押され、腕を封じられ動きをなくしていた。

「…エクス、プロージョン!!!」

そしてルイズの爆発。空中で突如発生した爆発は、炎竜の頭で発生した。バキリと低い音を立てて、ルイズの隣に黒い角が落ちた。化け物はただ痛みから叫び声を上げる。

ア  
ア  
ア  
ア  
ア  
ア  
ア  
ツ  
ツ  
ツ

そして二人の戦士が空を舞う。

一人はギーシュのアー・ス・ハンドにより空を飛んだ才人。

もう一人はワルキューレだ。

デルフリンガーを下向きにして右目を突き刺し、ワルキューレもその槍を巧み操り左目を抉った。

ギ  
ユ  
ウ  
ウ  
ウ  
ウ  
ツ  
ツ  
!!  
!!  
!!  
!!  
!!

天に向かつて炎を吐き出し…全ての炎を吐き出すと体の炎が消え、枯れ木のように萎んで…萎んで…破裂した。

「よくやった。上出来だ。」

俺は結界を解き、姫君を包んでいたバリアを滅した。

「これで分かったはずだ。戦いに重要なのは力だ。それは魔力だけではない。絆…すらも力となりえると。特にギーシュ。お前にも可能性がある。これから…自分で自分の魔法を強くすることも考える。今回の成功でうぬばれるな。いいな？」

ギーシュはただ頷いた。

「モンモランシー、ギーシュを頼む。そいつ、どう考えても誰かが支えてやらなきゃダメだ。最初はそうだな…浮気癖をなくす方法を考えるのが一手だろう。」

そういうと彼女は真面目な顔で頷いた。この前の決闘だってこいつの浮気によるのが直接の原因なのだからな。それだけは俺でも言えるやつの欠点だ。

「キュルケ…皆を任せる。おまえみたいな姉さんキャラが引つ張つてくのがちょうどいい気がするんだ。家柄のことも「気にしないわ。」…なら頼んでも構わないだろ？」

「良いけど…急にどうしたのよ。まるでどっかにいくような…遺言じゃない。」

……………当てるなよ…。今度はタバサのほうを向く。

「…なに？」

「今夜お前とはゆっくり話したいな、タバサ。」

耳元に近づき言う。

「悩みがあるなら…どんな願いでも…叶えてやるよ。」

明らかに彼女は動揺した。

「お前にわざわざ知っていることを再度教えてしまったからな。時間の無駄をお詫びしたいだけさ。レン・ハプリエドに詳細は伝えておくから、安心して悩みを解消するといい。」

バキッ！！！！

額に埋まっていた宝石を素手で触れると、残っていた竜の体が消滅した。

「アンリエッタ姫！」

それを彼女に放った。俺がしたのはそれだけ。何も言わずクラッシュバードが帰ってきた。

「主、才人。」

そして彼らの前でひざまづく。

「今夜…話をしたい。俺が帰るまで寝ないで待っていてほしい。」

「あとでちゃんと説明してもらってから。」



主に鞭でかな…。

「ああ。」

先生方が近づいてくる…同時に響く地響き。 違う！これは何かが崩れる音…そう壁か何かが…。 気づいたら走っていた。 気づいたら飛び出していた。

「外が静かになった。」

覚えているだろうか。ただ一人、学園の奥に消えていった人物がいたことを。彼、いや彼女はその巨大な扉を前にして解除しようとしていたが…失敗したのだ。

「もう時間がない。」

そこで彼女は飛び降りる。そとに出た彼女は地面に触れ魔力を込めた。大地が振動し30mはあろうか巨大な土人形を呼び出したのだった。

「…！あれは…。」

そこで彼女はあるものを見つけた。

## 悪の土人形（ゴーレム）（後書き）

得たものは何か 奪ったものは何か 去るべきものにそれを知る価値はない。最後に与えるはかの守護者に 今白銀の刃が解き放たれる

次回ツインシンフォニー リアルマジック地方の旅／ガルーム編  
使い魔として…

次回をお楽しみに。

使い魔として…（前書き）

ううん、地の分が書けない！ダメダメだね。感想という名の文句  
くれる方募集します…。ほんと読んでくれる方に感謝です。

使い魔として…

「ヒビ…？」

小さいが確かに壁にはヒビがあった。

「…行け！ゴーレム！！」

巨人は手を引き重心を移動して、前方の塔にその拳を叩き込んだ。女は笑う。

各下の者が格上の物を壊したとき、格上を信じて何もしなかった貴族はどんな顔をするだろう。<sup>バカ</sup>アホ面さらしたその顔を見たらどんなに気分がいいだろう？

世界が揺れた。

「もう一度だ！行け！！」

再び叩き込まれる土の拳。

揺れる世界。そこに乱入者が現れた。

「…盗賊か。」

黒光りする鞘を取り出す。そして走り出した。

「おおおおっ！！！」

狙うは足！ 振り下ろした。土の人形はあまりに脆く鉄の鞘に土が付着する。片方の足を失いバランスを崩し…再生したか……。以外と厄介だな。暗くなるのは敵の拳が下していた証。真後に跳ぶ。着地して目指すのは…こいつを操る術師！！腕を走る。乗ったのは左腕。上下左右が敵のテリトリ。全てを警戒しろ。信じるのは俺だけ。後は何も信じるな！！！！

「見つけた。」

「当然私も気付いてるけど?」

土の矢が俺を狙う。泥の破片が鉄になる。鉄の雨が降り注ぐ。

「マグネ・プロテクト。」

唱えたのは攻撃を一点集中させ、目の前で止める。防げるのは力なきものならコンマ一秒。力あるものなら永遠に。俺はどっちだろう。おそらく後者であり、前者なのだろう。

「カウンター・マグネ。」

止まっていた時が動き出す。全てが術者に帰った。人間ではありえない跳躍をそいつは見せた。全てが土人形<sup>ゴレム</sup>に当たる。主を守った土人形<sup>ゴレム</sup>はその全てを土に返し再生する。それ故に主を守れなかった。着地地点に降り立つと同時に、俺はその目の前に駆け付けた。

「お前の負けだ。盗賊。」

冷たく低く吐き捨てる。土人形<sup>ゴレム</sup>を引き裂いた鞘が彼女の頸動脈すれすれを捉えていた。

「どうかね?」

足場が消えた。彼女が土人形<sup>ゴレム</sup>を体の半分を土に還したのだ!!

「冗談を!!」

残った体に鞘を差し込む。　そこも砂になる。

「マジかよ…。」

冗談じゃねえ…俺は…今まで多くの人間を殺してきた。多くの生き物を、意志を、全てを壊した悪魔だろ？　なら…力を隠すことは過ち。

こんな…人形相手に負けるなんて間違ってる。一度見せたんだ。二度見せたって変わりはない！！　レンに見せたときと同じように、俺は悪魔の翼を広げ空に飛翔した。

「何！？」

「これが俺の本来の姿だ。奪ったものを返却していただく。ここで去られるとさすがに最強の悪魔の名が折れるのでね。盗賊の本質は二つに一つだが、目を見ないと分からないな…。」

主を守るためにゴーレムが拳を振るう。それを手で受け止めた。

「貴様は消えろ…人形。」

俺の手が赤く燃える。

「禁術59の3。スネーク・プロミネンス。」

ついに蛇が出た。蛇は人形に食らいつく。何匹も、何十匹も、何百匹も、何千匹も、何万匹も、何億匹も…。

「貴様の人形、確かに破壊した。」



俺の真後ろでは燃え盛る土人形<sup>ゴーレム</sup>。だが二度と動くことはない。まさに体だけ残して中をすべて破壊したのだ。

「私のゴーレムの内部魔力だけ焼き尽くしたのか!？」

「人殺しは慣れているが、やはり血を見るのはつらいな。」

死刑宣告を出す目の前の盗賊は立ち去ろうとしない。

「悪いが…最終通告<sup>チェック</sup>…。」

鞘が黒く光った。

「ガールーム!!」

聞こえたのは主の声。

「主…?」

緑色の何かが駆け抜けた。

「しまった!!」

彼女は燃える土人形ゴレムに何か土をぶつけた。そこから生まれたのは鳥。

鳥は羽ばたく。

逃がすか…!

「狙うべきは太陽の一手。禁術2の2、メイクマテリアル。」

敵との距離は約30m。左手に無から創造されたのは流白銀ミスリルの弓。沈む太陽のあなたに逃げだす鳥に狙いを定めその弦を引く。金切り音、断末魔を上げた弦。限界まで引かれた弦に矢は無い。子供がやるような無から有を思う矢。

「禁術76の1魔力誇張エネミーチャージ、禁術59の1、バーニングソウル…全て合わせよ…!!」

大気の魔素を感じ、 合わせ、 組み合わせ、 強くして、  
『そうぞう』する。 弦を引いたそこにピッチリと伸びた白い矢が生  
まれる。

「初歩ながら、 この一撃太陽からの天罰と思え！ フレイムアロー  
！！！」

白い矢が燃えたぎった。 放たれた直後右翼に劇中。 それでも飛ぶ。  
すぐに弦を引く、 矢が生まれ、 燃える。 今度は左翼を狙う。  
当たった。 でも墜ちない。

「墜ちろ！！！！！！」

三矢を放った。 尾が燃えた。 ようやく…墜ちた。

「…逃がした…？」

「残っていたのは土くれだけだったそうよ。」

「土くれのフーケか…笑わせてくれる。最強の悪魔に喧嘩売ったこと後悔させてやる。」

あの後俺は学院長に説教とは言えないが、怒られて、笑って、お礼を言われた。生徒の目が変わったという。ただ一人、ギトーと言う男は偏屈な男だった。あれだけの力を見せられても俺に挑み負けた。

〈回想〉

「ふざけないでください！学院長！貴族が使い魔の発言を真に受けると！？」

俺と学院長が説教という談笑をしているとその男は扉を開き入ってきた。

「ギトー先生。彼は客観的に貴族の存在を判断しているだけじゃぞ？」

「貴族としての誇りをお持ちでないのですか！？貴方は！！」

こいつ…わかったふりして何もわかつちゃいねえ！！

「誇りと驕りは違う。それすらも分らないのか？」

ギトーは顔を怒りで歪め、俺をにらみつける。

「よかろう！外に出ろ！！」

決闘か。また。

「始めようか？使い魔？私の二つ名は『疾風』疾風のギトー。」

杖一本で俺に勝つ気がこいつ？ 槍一つで70人をつぶした経歴がある。 後ろを気にしなければ確かにあの時槍だけで勝っていたはず…いや過去をほじくるのはよくない。  
さて今日はどんなふう料理するか…。

「ユビキタス・デル・ウィンデ。」

シュイン、シュインと音を立ててギトーが増える…なるほど、分裂の類か。

「一応言っておこう。これは偏在。スクウェアクラスの魔法だ。」

「ではおまえを倒せば俺は学院内最強か？」

「できれば、な！！」

吹きすさぶ、風の流れが異常になった。大気で渦を巻き、流れる。流れた先にいたら当たる。 ならば避ければいい。 こっちに来た。だから左に。右に。 さて…どうするか。俺の鞘じゃ殺しかない。

「お前、殺しちゃってもいいかな？」

「何？」

「出来ぬ事を言うな！」

ほう…おもしろいな。性格は同じでもそれぞれに独立の意識か…。俺を囲んでいるのは見えるのが4体。見えないで距離をとるのが2人。いいだろう。風がこっちに来る！ かわしてまず一人！

「フアイヤア！ナツコル！！」

炎の拳がひとりを焼き殺す。風が吹いて消える。黒い鞘を持つ。剣の柄を握りしめる。真後ろから迫る風をよける。これで最強？ 馬鹿にしすぎだろ…。

「何だそれは？剣があるのに鞘をつけたままか？」

そう尋ねる彼は馬鹿にしたかのように俺を見る。 本当の馬鹿はお前だよ！

「ええ。あなたぐらいこれで十分。」

再び挑発する。嵐のように荒れ狂う大気。

「二人ほど、もらっていく。」

目を閉じ本体ではなく偏在を確かに捉える。 走る。 吹きすさぶ風は鞘の一振りに散る。偏在を鉄で貫き、 真横の偏在の首を断ち切る。 血は出ることなく消える。

「この程度か？見えない本体君？」

そういうと、何体もの偏在が俺を取り囲む。どうやら偏在をすべて投入したらしい。逃げるのも…飽きたな。

「……………デル・ウィンデ。」……………

まさに嵐。だが、互いに相殺しかける寸前だと気づいてないのか？　なら…少し本物を見せてやろうか。

「禁術74の4…全て、吹き飛ばせ。アルティメット…トルネード……………！」

大気が俺を包む。全てが俺の風にのまれる。竜巻と化した全ては手を広げると同時に、反転した。

俺が最初からいなかったと思えばいい。右のギトーが放った魔法は真正面前にいたギトーに劇中に消滅。そのギトーも自分が消した偏在の攻撃を受け消滅。

「さあ、こっからが本番だ。禁術、55の5、リバイバル・ライフ。」

俺はギトーを癒したのだ。目的は一つ。力の差は歴然だがあれほどの偏在を呼び出したギトー…相当疲れているはず。なら回復させた後に絶望を見せつけるそれだけだ。

「どついつつもりだ？デル・ウィ「遅い。」

気づけばやつは宙に浮いていた。いや、流石に飽きてきたのでね。ストレス発散のためのサンドバッグになってもらおう。



「貴方の精神力は満ちている。」

ガッ！！！！

「だが、おごりのあるお前に決して俺に勝てない。」

ガッ！！！！ バキ！！

「最強は間違いなくお前なんかじゃない。 ギトー…消滅する覚悟はできたか？」

バキ！バキ！！

「てめえの驕りは死んだ奴らに食わせてやる。 禁術、 72の5、  
リビングデット…ヘブン。」

足元から何百もの骨の騎士が現れる。 デュラハーンが、 血ま

みれのゾンビが、三叉の槍を持つ太った雲に乗る男が……ギトーを包む。

「そいつを八つ裂きにしろ。殺さない程度に。続け!! 亡者ども!!!!」

俺の指差すほうにはギトーがいた。最後の命とともに亡者たちは武器を振り上げた。先ほどの5回の攻撃で神経と四肢は穿いておいた。もう、逃げられない。

ギヤアアアアアッ!!!!!!!!!!!!!!!!!!

一滴の血が俺の頬をかすめる。メガラウス顔負けの悲鳴を上げたギトーとの決闘を見ていたほとんどは気絶。あるいは相当気持ち悪そうな顔をしてトイレに駆け込み、満席になったという。そしてまた称号が付いてしまった。

地獄の使い魔と。

～回想終わり～

そして月は昇り、長い杖を持つタバサの目の前に悪魔の姿のまま降りたつた。

「こんばんわ。」

「……。」

「黙っていても悩みは解決しないし願いも届かないぞ。」

「どうして…」

「悩みを知っていた、か？」

俺は鞘を取り出す。出したかったのはそこに納められた白銀の剣。

「こいつはな、人の魂を感じる力がある。魂とは決して揺れ動かない。」

故に深い悲しみ、遠い遠い大事な思い出…そんな心の奥、魂にまで残る大切な思いをこの剣は親身になって答え俺に伝える。だからお前の大切なものが傷ついた、治す術が分からない、だからどうしようもないとあきらめた…そんな思いがお前から伝わった。

お節介かもしれないが…話してくれれば対処はしよう。」

彼女はうつむきしばらく黙ってしまった。長かった。本当にこの少女は何もしゃべらない。この朝までしゃべらないのかと思つた…。淡々としながらも彼女は告白してくれた。

「母さんを助けて。」

「けがか？病気か？」

「……。」

うつむいてまた黙り込んだ。

「話してくれなければこれつきりだ。」

「毒で心を失った……。」

心神喪失……やっかいだがうちの医師に頼めばなんとかなるか？

「分かった。俺が去る前にレンに話をつけておく。」

お前は……己の憎しみにとらわれず、己の闇にとらわれずに生きることを勧める。まあ、お節介だから気にしなくて結構だ。俺は少し手助けをしてやるだけだからな。」

この学園は夜になると本当に静かになる。気づけばあの少女はどこかに消えていた。吹きゆく風と草の揺れる音ばかり。蝙蝠の翼は主のもとへ……。

「遅くなった。ルイズ。」

何も言わないほど恐ろしいものはないな……。うん。彼女は間違いないく怒っていた。桃色の髪の毛の奥瞳が見えない。沈黙だけが長く、長く続いた……。

「なあ、話って何だ？」

「それよりも！！どうしてあんなことしたのよ…。」

才人が話を切り出すと同時にルイズが呟いた。才人はただ、この沈黙が嫌だっただけかもしれない。それにしてもすごいな。毎回のごとく家具が一瞬揺れたぞ…。どんだけ負のオーラが出てんだよ…。

「理由はあの時言っただろ？ おごりでは何もできないと証明するために呼び出したのさ。それと…話したかったのは…この事件の終焉と同時に俺はこの学園を去る。」

幽鬼のように立ち上がり俺に近づく。そして思いっきり響く甲高い音。連続して響く。

ただのビンタ。

避けることはできた。でもそれは完全な裏切りだ。元々裏切っていた俺。彼女からのいかなる罵倒も何もかもを受け入れよう。だが避けてはいけない。

最初から分かり切ったことだったのだから裏切り者の末路など…。

「私は…この世界の普遍を乱しわずかな間だけ貴方に仕えた。その時の言葉や思いに嘘偽りはありません。ルイズ。」

「あんたは…私の使い魔なの！！ 私の下僕なの！！ だからここにも行っちゃいけないの！！！！！！」

ルイズは泣いていた。認めた人が消えていく。遠くへ行ってしまう。裏切りだ。

「いやだよ…。」

「ルイズ。私は貴方の使い魔であり世界の使い魔だ。ルイズ、あなたを最後まで支えることを再び誓う。」

涙をぬぐってあげた。

「でも…行っちゃうんでしょ？」

「はい。ですがその時まで私は…この世界にいる限り貴方の使い魔です。貴方を信頼し、あなたに使える。」

それが使い魔として私ができることだから。人間故に雑用も任せられるでしょう。人間故にこの身を投げだしてでも貴方を守らなければいけないでしょう。

それは…才人、お前がたどる道だ。お前は、使い魔としてルイズを守ってくれ。彼女を永遠に認める…そんな存在になってくれ。お前の価値観でルイズを守ってやってくれ。」

俺はそれ以上しゃべることなく気がつけば意識を閉ざしていた。

「勝手な奴。」

それが今のあいっつに対する思いだった。俺と同じように使い魔になった男は最初から消えることが分かっていた。帰る手段があった。だから、いつもルイズの言うことに黙って従ってたんだ。

だ。

もう寝よう。ここの生活に慣れるまで大変



けど…確かに俺を気遣い、ルイズを気遣ってた。そこに俺との違いなどあったか？いやなかった。

女の子の生着替えを手伝うなんて地球じゃできないだろ？

ふざけたことを何度も言った。最初はいらだちも全部お見通しだったのかもしれない。

何かが起こるたびに危険から遠ざけたった一人剣をふるい続けた。その姿をはたから見たととき俺は恐怖しか感じなかった。喧嘩なんて昔も何度もやった。ギーシュとも喧嘩した。

けど…あいつは戦っていた。喧嘩ではなかった。本物の戦いだった。その時初めて喧嘩が怖くなった。その時にはもう決闘も終わっていたし剣から手を離れたら気を失っちまったからあの後何があったかは分からない。

早く済ませて来い、主の機嫌を損ねると面倒だ。

キュルケのところに連れて行かれた時も。部屋の前でずっと待

つてくれた。

メガラウスの時には戦いのヒントを与え、他の魔法使いが倒れていくなか共闘させた。今だって……ずっと俺たちのことを案じてた。

「サイト。」

「何だよ。」

「メイドから、毛布を二枚貰ってきてくれない？」

珍しく命令口調じゃない命令。

「ああ。」

戻ってくると俺の藁のところにガールームがいた。少し呻いている。

「駄目だ……止める……奴らに……近づくな……！！！！」

「どうしたんだ？」

俺がたずねるとデル公が答えくれた。

『ガールームが急にうめいてよ。でずっとこの調子だ。』

カチカチという独特な声。それをかき消すかのような唸り声。

「皆……早く……お……逃げ……」

顔をしかめ続け拳からは血が垂れ藁を濡らした。脂汗が額から垂れ寒いのか体がガクガクふるえている。

ルイズはきれいなハンカチでその額をぬぐった。ちよつとだけ意外だった。

「はあ……また……」

それからまた静かになる。ルイズはハンカチを洗濯かごの中に入れる。

「何なんだろうね、こいつ。」

強大な力を持つこの男。優しいけどどこか恐ろしさを感じさせる。寝息を小さく立てて眠りにつく姿は先ほどの様子など微塵にも感じさせない。

その額に残った脂汗が無ければ。俺は彼に毛布をかけ、自分も毛布にくるまり目を閉じた。

「おやすみ。サイト。」

寝る前に今までに聞こえなかった声が聞こえたのは多分幻聴。だから俺も言う。

「おやすみ、ルイズ。」

後日、コルベージ達に呼び出され俺達は学園長室に向かった。  
前に主、キュルケ、タバサ。隣には才人もいた。

「何でキュルケもいるのよ？」

「いいじゃない。面白そうだから。」

そんな言葉に呆気を取られたルイズだったが、学園長が、ふ  
うと息をつき前を見る。

「町で聞き込みを行ったところ、森の奥の廃屋に怪しい人影が出  
入りするという情報を入手しました。」

…？おかしくないか？町で聞き込みをただけでそんな詳しい情報  
が普通転がっているか？

そもそもこいつはあの時いなかった。なのにこんなにも早く（  
正しいとするなら）その情報を入手出来る？

事件があったのは昨日。ここから町まで約3時間。そして状  
況が収集しアンリエッタが帰ったのは夕方。城下街につくのは…  
…間違いなく夜だ。アンリエッタの兵士達が酒を飲んでいて口走  
ったとしても深夜だ。そこで聞いて情報を集めたとしても夜では  
誰かが森の中に入る…なんて情報を持っているだろうか？

「流石仕事が早いな。ミス・ロングビル。」

学園長も女に弱いな…。むしろくしゃしてもしょうがない。

これ以上考えるのはよそう。彼女は軽い会釈をして話を続ける。  
きな臭い…この女<sup>アマ</sup>…。

「その証言を元に一応私が描いてみたのですが。」

馬鹿な！？ その人物がいたとして今は昼前…つまり町を7時頃  
でないと間に合う訳が無い！ 夜中中捜すなんて考えられないし…  
…フーケの特色をしっかりと捉えた絵を…完成させられる物が…？  
そんな事をルイズは考えていないだろう。ただ…。

「これはフーケです！間違いません！」

タバサも頷く。先生達（昨日ボコしたギトーは除く。）は何か  
を恐れるように声を上げていた。しかし。

「直ぐに王室へ連絡しましょう。王室衛士隊に頼んで兵を挙げても  
らわねば。」

コルベールが教科書通りの正論を述べる。こいつだけは何か…  
異質？

「んな、ぐずぐずしておればフーケに逃げられる。我々の手で  
『破壊の杖』を奪還し、盗賊の手で汚された学院の名誉を取り戻  
すのじゃ。我と思うものは杖を掲げよ！」

誰もいない。学園長が行くとは思えないが…誰も手を挙げよう

とはしない。　喝をいれても誰も呻くだけで何もしなかった。  
そう『貴族の努め』…それを感じたのだろう。　一人が手を挙げた。

「私が参りますわ!」

主だ。　何もできないと分かっているけど、　彼女なら手を挙げる  
と俺は確信を持っていた。

「私も参りますわ。」

キュルケも手を挙げた。

「キュルケ、どうして?」

単純な疑問。　キュルケは直接この事件に関わっている訳ではない。  
い。　なのに手を貸すと言ってきた。

「ふん、　ルイズだけに任せてられないじゃない。」

キュルケも少しはルイズと仲良くなっているのかな…?　ヴァリエールと呼ばずに彼女の名を呼んだ。　隣の少女も杖を掲げる。

「タバサ、貴方はいいの」二人が心配。」

キュルケの言葉を遮りただ言う。　心なしか小さく微笑んでいる  
ようにもみえた。

「ほぼ…では三人に行ってもらおうでしょう。　皆も知ってのとおり  
この二人はフーケの目撃者であり、　あの試練を乗り越えた者達で

もある。異存はないな？」

メガラウスを倒したものたち…何人もの生徒が倒れたあの出来事を抜き打ちテスト扱いか…ほんと面白い爺さんだ。

「魔法学院は諸君らの努力と貴族の義務に期待する。」

三人が同じ向きに杖を向け無言で誓う。

「オールドオスマン、人払いをしていただきたい。少々頼みがある。」

「ガールーム…。」

ルイズが心配そうに俺に言う。大丈夫だ…。

「ご安心を主。後から必ず追います。」

ルイズの前にひざまずき顔を上げる。そう…これが、この世界における最後の任務。

奪われた物…破壊の杖を、俺の誇りを…そして貴族、違う！彼女の誇りを奪い返す！！そのため…。

「用意してほしいものは鎧用の支え木を二つ。」

そう言つて、右肩と左肩を叩く。彼は魔法で注文をききいった。直後電子音のような、彼が聞きなれない音が部屋に聞こえ始めた。

「？」

全身に鈍重な鎧が現れる。そう、これこそ…俺の拘束。

「それは？」

「これこそ俺の拘束。先に外すのはとてつもなく重い鎧。」

一つのカケラだけでも筋肉を引き裂き骨を断つほど重く、飛ばせるならこれほど脅威な石粒手は無いだろう。

それを一つずつ支え木にかけていく。

超重身体拘束鎧。漆黒の鎧は近づく者を圧倒する。原因はゴツすぎる見かけ。

棘の生えた肩、腕、膝、足。これだけの重装備にも関わらず動きだけは阻害しない。

「おお…。」

次は超魔素拘束鎧。これは見かけは軽鎧。腕と足には防具は無く上半身と下半身、それだけを守る鎧。素人目にはそう見えよう。

だがこれが真の力を発揮するのは対魔法戦。胸の朱い宝石は自



らの魔法の威力を下げ必要な魔力を増やす代わりに魔法による一切のダメージを無効化する。

残念ながらあの時の決闘では使用せずに俺も拘束としてしか見てないが。

「体が軽くなった。さて行くとするか。」

あのきな臭い女と主達を一緒にしておく訳にはいかない。俺は学園長室から出て外へ、門に出るまでイクシオンを呼んだ。

「来い！イクシオン！！」

黒いゲートより飛び出す一角獣。助走の間で飛び乗る。

「主達を追え。」

いななきと共に後ろ脚だけで立ち上がって見せた。そして走り出す。雷が落ちた。

「……か。」

イクシオンは馬車の馬の所に置いてきた。調度、皆が廃屋に入ろうとした所だった。

「主！」

「ガルーム。」

「盗賊は？」

首を横に振り答えた。その時真後ろからキュルケと才人の声が聞こえた。

「「えええっ！！！？」」

「どうしたの？」

主が声をかけた…。足元が震えた。…まさか。

「ルイズ！！！」

彼女を抱き抱え飛ぶ。足元からゴーレムが現れ廃屋の屋根を飛ばす。

「主、無事ですか？」

「うん…。」

彼女を下ろし鞘を持つ。廃屋から来た風と炎を同時に浴びるも振り払った。

「キュルケ！ タバサ！ ルイズを頼む！ こいつは俺がやる！  
才人は皆を！！」

体が軽い！ この前の二の舞にはならない！！

横一閃でゴーレムの両足が飛ぶ。胸に刻んだ二回の斬撃。肩から両腕を切り落とす。

本体だけが中央に落ちた。そして首に乗り両手で鞘を持ち地面に、顔に勢いよく差し込んだ。

「…これで、終わりか？」

だが殺気を感じ跳んだ。タバサがシルフィードを呼び順に…ルイズがいない。見回すと一人爆発を起こしていた。

だが彼女は気づかない。もはや人型ではない。竜の尾が彼女に迫っていた。気がついたのは俺だけ。鞘を投げ付けていた。

黒と黄土色の凶器が迫る。大気を裂く二つの力を前に彼女は恐怖で固まっていた。

土煙が上がる。ゴーレムは再び立ち上がる。俺はタバサに言った。

「先に上空へ！」

「ダーリンは!？」

飛び立つキュルケが俺に聞いた。才人を心配する表情は本当に真剣だった。

「才人と俺は左右からルイズを救出後、脱出する。合図したら降りて来てくれ。」

才人を見る。彼が頷く。俺が右回り。彼が左回り。ルイズはゴーレムの真横。俺達ともっとも離れた位置にいた。途中で鞘を拾う。ゴーレムがルイズを向いた。

「逃げる、かないっこねえだろ!!」

「いやよ!!私に貴族よ!!」

ゴーレムが拳を振り上げ始める。

「魔法が使える者を貴族と呼ぶんじゃない！ 敵に後ろを見せない者を貴族というのよ！ ゼロのルイズじゃないんだから！！！」

それは無理ばかり言う少女の心の悲鳴。優しい少女は決して誰かを責める事なく、自分を責めつづけた。故に自分の力を示して認められなかった。誰かに認められたかった。けど…それで死ぬのは間違ってる！！！

「エクスブロージョン！！！」

腕に爆発が起こるが腕を吹き飛ばす程の力など無く一瞬動きを止めただけ。俺が到達するよりも拳を下ろす速さは早かった。

「ああっ……」

跳びこんだのは才人。二人を抱きとめ二人を抱いたまま後ろに跳ぶ。

「邪魔しないで！！！」

俺を振り払い、彼は手の甲で彼女の頬をはいた。はたかれたところを押さえ、何が起ったか分からないかのようにルイズは才人を見た。

「貴族だから何だってんだ！！！！死んだら終わりじゃねえか！馬鹿！！！」

「右に同じだ。」

ルイズは俯き震え叫ぶ。

「だっていつも皆から馬鹿にされて…あんなただけにしか認められなくて…悔しくて…逃げたらまた馬鹿にされるじゃない！！誰にも認められないなんて嫌…！！」

「おい、泣くなよ。」

才人を下がらせタバサを呼ぶ。シルフィードが降りてきた。キュルケが叱咤しながら彼女を乗せた。

「貴方達も。」

それを才人が断る。

「いいから行け！」

俯きつづける彼女に言う。

「ルイズ、見ていてくれ！貴方の使い魔は貴方の強さを今示します！！行くぞ、才人！！」

才人がデルフリンガーを引き抜く。同時に左手のルーンが光り輝く。

今回が俺の最初で最後であろう。黒光りする鞘から柄を掴んでゆつくり引き抜く。白銀の刃が輝き辺りを白く照らす。戦いの中で真にその魂の剣が煌く。

『ほう、こりやおでれゝた。』

デルフリンガーが感心した声を出した。

「行くぞ才人…土人形、抹消される覚悟は出来たか？」

「土つくれが…なめんなよ!!」

剣士は二人、走り出し切り捨てる。

一人は冷徹に、一人は、雄叫びを上げ腕と足を破壊する。四肢を穿つ。

だがこれではさつきと同じ。再び再生する。これを倒すにはこいつの体内の中にある魔力を全て無くすしかない。剣技でそれが出来るのは……。

「どうすりゃいい…？」

いろいろ問題がある過ぎて、俺はそうつぶやいた。

「ガルーム！何か手はねえのか!？」

才人が聞いてくる。

「無い訳ではないが…下手な魔法はこの森の消滅に繋がる!」

悩んでいたその時空から響く声。

「二人から離れなさい!!」

凜とした声。ルイズが破壊の杖を持っていた。

「才人はルイズの元へ!!」

「ああ!!ルイズ!!!!!!」

ゴーレムの胸元へ剣を叩き込む。巨人を五秒停止させたが拳で邪魔物を叩き潰そうとする。

ルイズを見るとあの『破壊の杖』を必死になって振っていた。使い方が間違ってる…。

「えい!えい!なんで、何も起きないの!!」

才人が到着した。胸部を蹴り体勢を立て直し宙に舞う。ゴーレムはひるんだ。俺の見間違いでなければ『破壊の杖』は才人が使えるはずだ!!

「これは魔法の杖なんかじゃなえ!こうやって使うんだ!!」

ルーンが一段と輝き才人が『破壊の杖』を正しく構える。

「才人!撃て!!」

「伏せろ!ルイズ!!」

カチッ



吐き出された弾丸。 黒いナニカはゴーレムに突っ込み黒煙と爆炎を上げた。

風が全てを運んだ時、 土くれにゴーレムは戻っていた。 一旦安心してゴーレムに背を向けルイズの元へ足を向けた。 シルフィードもルイズの側に。 キュルケがその豊満な胸をちゃっかり押し付けつつ才人を抱きしめる。

才人もうれしそうに鼻の下を伸ばしていた。 やれやれだ。

ゾク!!

体を貫く、心臓を握り絞められるような悪寒。この感覚何度も味わってきた。

まさか…いたというのか？周りの気配を探る。イクシオンは…逃げたか。あのきな臭い女は隠れている。他のやつらは…ふるえている。駄目だ。才人でも今は役に立たねえ！！

俺は左手をシルフィードも含めた全員に向ける。あの女？守る必要なし。

大気の魔素を探れ、創造するのは影の盾。太陽が満ちる今なら者に遮られた影は強く、濃くなるはず…。

「禁術！ 72の1！！ シャドーガード！！」

全員を影の結界が包む。具体的に言うと真っ黒な球体に包まれた。

「何よこれ！？」

「全員そこにいろ！しばらくすれば眼が慣れる！！」

足元は液状と化した闇。ゴーレムが倒れたところでぐるぐると回る。

グルグルグルグルグルグルグルグルグルグル…

そして浮かび上がる直径1mほどの球体。

「ケケケッ」

「いねえと思つて安心してたんだがな…ダークネス…。」

グオオオオオオオオオオオッ!!!!!!!!!!!!!!

響き渡る土人形の雄叫び。

黄土色の体はドスの利いた紫に、その両手につけられるのは漆黒のガンドレッド。

先ほどよりも何倍も速くその拳を振り上げ振り下ろす。木々は折れ、地面にはさつきはできなかったクレーターが何個もできる。

「ダークネス相手じゃ、本気になるしかないよな。」

グワアアアア!!!!!!!!!!!!!!

大袈裟に切り裂く一撃。足が崩れ落ちる。魔力で切り裂いた一撃…再生は不可能だ。

だが大地が浮き上がり代わりの土が奴の足となる。何度も降ってくる俊敏なハンマー。距離をとり魔力を込め十字に裂く!!

「グランドクロス!!」

聖なる十字架ではないが魔力の刃が飛び胸に十字の穴をあける。

「フィニッシュ。」

剣を持ったまま一本の木へ向かう。 … 怒りを抑えゆっくり歩いた。

「出てこいよ、ミス・ロングビル。」

「ごめんなさい、見回りに…」「いや…土くれのフーケ。」

言葉をさえぎり言った。

「な、何のことかしら？」

「ごまかしても無駄だ。」

「…ばれてたつてことかい？」

眼鏡を足元に捨て踏みつける。その声は確かにあの時の声と同じだった。その瞳を見て…思った。こいつは真の悪人じゃねえ。何かを訴えている…。

「いや…主たちはまだ気づいてないはずだ。盗族には二種類存在する。お前は…」

その髪に触れさつと横に動かした。その頬に触れる。

「誰かのために…物を盗み続けていたのだな？誰かのために、罪を

背負って生きている。そうしかお前の眼を見て感じられない。」

「……私は、そんなに綺麗な人間じゃないよ……。」

目をそらしても事実が消えるわけではないのだが……。

「まあいい。さっさと足を洗うことを提案するよ。俺が貴様に教えられるのはお前の3つの道だ。

1つ、このまま俺の手によって捕まるか。

2つ、フーケは『破壊の杖』を奪われどこかへ逃亡しお前はこれからもあの爺さんのところに帰るか。

3つ……ここから逃亡し二度と盗みを行わずに過ごすか。」

彼女はこちらをにらみながら聞く。

「3つ目はどういう意味だい？」

「残念だがあの闇の中にいる間、彼らは外の様子を確認できない。声も聞こえない。だからお前の正体は俺しか知らない。お前がここにいた証さえ残せば、彼女らも納得するさ。」

「いいのかい？ 私が盗族から足を洗ったかどうかは確認できないんだよ？」

「俺はあるガキの影響を受けちまってな……拳骨一発で勘弁しているん、だ！」

軽く、こつんと彼女の頭に拳を落とす。

「つつ！」

「それと…黒い影には気をつける。さっきのゴーレムは…」

「ああ、破壊の杖の使い方を見てから魔力を送らずに放っておいた。」

やはり…無関係だったか。

「これ持って早く逃げな。」

渡したのは大量の金貨。確か真金貨だったな。それを異次元から転送してもらい、袋に詰めて渡す。

「いいのかい？」

「文句あるなら返せ。」

「嫌だよ。もらえるものはもらっていく。」

その直後大地に走る激震。

「！！…名前は？」

「ガールーム・ゼ・レジェンドだ。さあ、行け！！」

彼女は木に何かの魔法を与え、外套を脱ぎ棄てると森の奥へと走って行った。結界はまだ発動中、ヒビ一つ入っていない。だが揺らぎ始めている。もうそろそろ、周りが見えるだろう。

「さて…闇の彼方に飛ばしてやるか。」

「まあ、それよりもどうにかするのが先か。」

ゴーレムの目がまがまがしく赤く光る。獣の獲物を見るような視線。一気に片を付ける。振り下ろす斬撃には盾を！

「バリア、展開！！」

重い……だが昔……勇者王から受けた地獄と楽園の狭間の力を呼びそれを拳に合わせ作られた鈍器よりは……はるかに軽い……！！

押しのける！！ゴーレムが弾かれたように3歩下がる。

[illegible]

本来ならあり得ない。 あれほどの質量が大空に跳躍する。 落ちれば大地震では済まされないだろう。 最悪、 この森は消え大地が大きく隆起するだろう。

「だが…。」

右手を天に差し出す。太陽を影に落ちてくる暗黒の狂気。  
…それがいま何トンであろうとも…炎と雷をまとった破壊の王  
の蹴りには決して届かない!!!

「はあああつ!!!」

ずりおち、巨人は地に伏せる。自らの刃で自らを傷つけながら。今、結界がとかれた。貴方<sup>ルイス</sup>のために…今、全てを砕く。  
振り上げた白銀の剣に黒に近い、紫の魔力が集まっていく…。

「主…これが俺の力だ…。」

そして輝く。暗黒の魔力が展開し俺は胸に跳ぶ。ゴーレムも立ち上がるようにするがその巨体を支えるだけの足は自らの剣で貫いていく!!!

「ダークネエエエス…ヘエエエル…クラッシュ!!!!!!」

闇をまとった剣で切り下ろした。切り裂いたゴーレムの体内から闇が漏れ出し、俺が飛び離れるとともに漆黒の光…闇がまっすぐ空へと伸びた。

ガアアアアツ!!!!!!アアアアアア!!!!!!

ゴーレムの遠吠えと誰かの断末魔の叫び。彼らも結界から出てき



た。

「すごい…。」

「フーケは？」

キュルケは俺の技の威力に驚き、タバサが俺にフーケの行方を聞いた。俺は首を横に振り彼女らをさっきまで彼女がいた木陰に連れていく。そこには彼女が残したメモと外套が残されていた。

私、土くれのフーケは破壊の杖を諦めた。代わりに素晴らしい宝物を確かに頂戴した。

「（彼女が書きそうな言葉だ。）」

「これ、フーケの外套よね？」

「捕まえられたかもしれないのに！！！！」

主に心の中で静かに謝罪した。今は一様あれの正体を確認しないと…。

「才人、破壊の杖はロケットランチャーか？」

「ロ、ケットランター？」

誰かが間違えた発言をしたようだが気にしない。

「ああ…俺の世界の武器だ。」

「さて、一旦帰るぞ、あの女は先に戻ったかもしれない。」

誰にも気づかなかったがあいつが叩き割った眼鏡を持って俺は馬車を操り学園へと帰還した。

見つけたのは才人の世界の武器…地球の武器…そしてダークネス…俺の…仇……

「やれやれ一瞬見つかったと思ったんだが……ガルム・ザ・レジエンド…この世界で滅びてくれると嬉しんだがね…まあ……」

ソレは木の上で空を見上げて下品に口を曲げた。

「先に…ギルム・レ・ヘブンか。使えない部下を持つと上司は辛いね〜。」

シュッと音を立てた後には誰もいない。うつすらと残るピンク色の歪みだけがそこに残った。

使い魔として…（後書き）

盗賊事件を終え、ダークネスの進行を確認するためにこの世界にもうしばらく残る。夜に入る緊急連絡はもう一つの物語を終わらせるカギと為す。

次回ツインシンフォニー リアルマジック地方の旅／ガールーム編  
再会

次回をお楽しみに。

## 再会（前書き）

カルピスは正義です！絶対おいしいんです！！異論は認めません！！！！

すみません、はしゃぎました。いつも、読んでくれて、本当に感謝です。ギルムの物語との擦れ違いのような交差点。ギルム編を読んできてくれた方はあの時の再来になりますが、温かい目で見守ってください。

## 再会

「破壊の杖は再び宝物庫に収まり、フーケには逃げられてしまつたが盗族の手から奪われたものを奪還し無事帰還した。このことには王宮も大きく評価しておる。君たち三人にいずれ王室より何らかの褒賞があろう。」

帰還した俺たちはまず、学院長に報告。いつの間にか王宮にも話は伝わっており、主たちは報酬を受けることになった。その中でロングビルの行方を聞く者はいない。

「あの、3人つてことは二人には…。」

ルイズはわざわざ、尋ねてくれた。実力を知る上か残念そうに彼は言った。

「残念じゃが、彼らは貴族で無いのでな…。」

「そうですか。」

悲しそうに言わないでくれ、ルイズ。そんなもの、俺には必要ないんだ。

「私にはそんなもの必要ありません。」

俺はすぐにそう言った。才人も続けて言う。

「俺もです。学院長、それより話したいことが。」

頷く彼を見て彼女たちは退出する。今日はパーティらしいから立ち去る前に一言だけつぶやく。

「楽しめるときに、十二分に楽しんでおけ。後悔する前に。」

聞こえたのかどうか分からない。俺は学院長に彼女の眼鏡を渡した。彼は小さくうなずいた。俺は再び部屋の端にある鎧に近づいた。その鎧に触れて呟く。

「セット、チェーンスタンバイ。」

二つの鎧は分解されあるべき位置に飛び一瞬にして合体する。そして消える。この重さ……しっかりと機能してる……でもやっぱり重い……ラストだと思ってただけだな。

「うつつ……。重。」

「大丈夫かね？」

コルベールが心配そうに声を掛けてきた。手をそつと前に出して返答する。立ち上がり深呼吸。

「問題ない。」

才人も話を中断してこっちを見ていた。軽く微笑み隣に立つ。

「どこまで話した？」

「いや、あの破壊の杖が俺の世界の武器だったことと、俺がこの世界の住人でないこと。聞こえなかったか？」

まったく聞いてない…耳が悪くなったか？　そう不安に思ったが  
今考えることではない。　俺も報告することがある。

「ガルドムも聞いてほしい。」

学院長はそう皮切り話した。　破壊の杖は、　ある男によつ  
てもたらされた。

見たこともない姿、　詳しくは思い出せないが固い緑帽をかぶつて  
いたことから迷彩服姿の軍人と予測。　30年ほど前…現実の流れ  
で存在していた戦争…その軍人…まあ、戦争なんて今でもある事。  
それ以上の推測はできなかったが…。

彼に助けられたらしい。　ワイバーンとこの世界で呼んでいる魔物  
を吹っ飛ばしたらしい。　まあ、当然か。

「くそ！　せつかく帰る手掛かりが見つかったと思つたのに…！！」

歯軋りし机を叩く才人。　この異世界から帰る方法……。　次  
は俺か。

「学院長、　先日話していた魔物がこの世界に現れました。　よつ  
て、　もうしばらくここに滞在します。」

頷くが、　少し唸っている。　俺が危惧する闇から生まれる魔物  
を越えた魔物。　この対応が本来なら当たり前なんだ。　気休めに  
しかないだろうが…鞘から剣を引き抜いた。

「ご安心を。　私がいる限りこの学園にも…生徒にもダークネスに

は指一本触れさせません。」

俺にはそれしかできない。この時皆がどんな顔をしていたのかは、覚えていない。ただ…あのとき感じた憎悪の気配…奴の正体を思い出すことに頭がいっぱいだった。

中央塔ではきらびらかな光が外に漏れていた。俺はああいうところは好きじゃない。昔を思い出してしまうから。ドンチャン騒ぎ。



最後に全員で騒いだ時はお酒と豪華な食事と音楽と笑いに包まれたあの会場…目に浮かぶのはみんなの笑顔…だがそれを俺は裏切った！！

あの後起きた事件…俺はあの時…人であることをやめた。それからは戦いの連鎖。徹底的に闇を破壊し、真実を知った俺は知っていた世界の意思をすべて殺し…ダークネスとの最終決戦。

あれほど世界を巻き込んだ戦いは無かった。多くの世界にいる仲間たちが疑似的に作り出した餌でおびき寄せた…その間に俺は多くの命の犠牲をうえて奴らを…そして背後に潜んでいたイレギュラーを殺して、殺して、殺して、殺して、殺しつくした。

俺の心は最後の使命…俺の命滅びるその時まで、誰かを苦しめるものを倒す……不死である俺が死ぬことはあり得ない。全てを歪めた罰は永遠に償えない…そう思っていた。そんな俺を救ってくれる人に気付くまでは…。

償わなければならない。その強迫観念に俺は全てを失い、一度剣を失ったとき自棄になった。酒を飲むことも、何もすることもなくただ時間の流れを…永遠を感じていた。誰かにできるかな？ この身は全てを不要とする。食事も、空気も、排せつすることも、生殖活動も、睡眠も、何もかもがいらない。

なぜなら俺は全てのDNAを合わせたことで俺自身がキマイラ化した世界の修正力によって完成した。ある意味人類が望んで形となつた不老不死。その代わり、一度眠っている間に幽体離脱しビデオの早送りのような人類の1兆年を見せられ、俺はすべての存在意義を失ったが。

結果から言えばもう一度、人に戻ることができた。じゃなかったら俺はここにいないでどことも知れない洞窟の中で永久保存されていたはずだ。

「ガルームさん？」

「シエスタか。」

そのことを思い出していたから、低い声でそう答えた。

「どうしたんですか？祝賀会はまだ…。」

「俺にはああいうところは似合わないでね。逃げてきた。」

質問に答え星を見る。地球では…山奥でなければこの星を海を見ることはできないだろう。このうん万の星をかけても平和はまだ遠いのか。

「なあ、シエスタは今暇か？」

「まあ。後は寝るだけです。」

「少し付き合ってくれ。才人の時のアプローチにもなるだろう。」

急に顔を真っ赤に、…本気で好きなようだな。彼女はルイズの次に才人と接触を持ったと、聞いている。

俺のように手遅れになる前に…幸せな人が増えたらいいと思う。

「どうしてそう思うんですか？」

「…いろんな奴を見てきた。いろんな人々を知った。そんなにはこの世界にいる人々に似ている人もいた。だからなのかな、なんとなく分かるんだよ。」

笑えたかどうかは知らないが笑って見せた。

「…どうして泣いているんですか？」

えっ？頬に触れてみるが涙は流れていない。

「何言ってるんだよ。涙、流れてないよ。」

「…気のせいでしょうか、泣いているように見えたんです。」

そうか…。笑顔はダメだな。昔言われたままだ。『お前の笑みは全て泣き顔』と。

「これをお前にやるよ。才人に作ってあげるといい。」

渡してやったのはあるメニューのメモ。立ち止まって尋ねる。

「読めるよな？」

「はい。でもこれって？」

「黙って才人に出してやれ。死ぬほど喜ぶはずだ。」

そのままお休みの挨拶だけして立ち去る。話したかったのはもつとそんなことじゃなかったのに…。

「帰ってきたか。」

先に戻っていた俺はずっと、待っていた。

この世界で出会った主

を。　ともに我儘を聞いてきた仲間を。　目を閉じても、　開いても　蠟燭一つないこの部屋はあまりにも暗い。

「アンタ、　行っちゃうんじゃないの？」

ルイズがそう尋ねてきた。　答えはもう決まっている。

「俺の敵がこの世界に現れた。　背後をつぶさぬ限り、　帰れないさ。」

ダークネスは俺の敵だ。　何があろうともすべてを殺す……！　その果てに何があるうとも……。　俺はただ拳を握りしめた。　その時才人が俺に言う。

「その握りこぶしはやめろ。　血がまた出てくるぞ。」

言われてはつとなった。　彼は俺を気にしてくれた。　かつての俺の仲間と同じように……。

「すまない……。　気を遣わせたな。　二人とも……もう少しお前たちを守ることを許してくれるか？」

「使い魔なんだから当然でしょ！」

やれやれ、　ルイズのデレ期はすぎてしまったな。　ドレスを脱ぎすて、　寝まきを慌てて着こんだ彼女は頭から布団をかぶって窓のほうを向いてしまう。　幾許もしないうちに静かな寝息が聞こえてきた。

「才人、　帰りたいか？」

「まあ…その質問2回目だ。」

そうか…ルイズも…。俺は彼に近づきその髪の毛を一本引つ張った。

「痛っ！」

顔をしかめて俺をにらむ。まあ、奴らに比べりや可愛い程度だ。

「これはいただく。お前の故郷を探す手掛かりになる…かも知れないからな。」

「分かるのか!？」

口元到人差し指を持っていった。

「静かにし」

~~~~~

「おい。」

生温かい目で見るのはやめろ…。どこから流れたメロディー。俺の左腕からだ。腕にはめ込まれた通信システム。

「ロックオフ。」

解除コードを言えばパカッと開いた。

『ガールーム、今すぐ牙城に帰還してくれ。頼みがある。』

そう日本語で書かれたメッセージが出現した。才人はただ、隣で興奮した様子で俺の機械を見ている。まあ、男の子だしハイテクに興味を持つのは当然か。俺は彼に少し離れるように指示した後、転移呪文を唱えた。

「朝までには帰る！ …行くぜ、ダークチェンジ……。」

暗闇の円が足元に展開し俺を包み食らうように闇が動きそこから消えた。俺がいた証は消え去った。

超巨大戦艦牙城。そこについた俺は牙城の人工頭脳、牙城の意思そのものに指示を受けていた。

ギルムがダークネス：この前レイが言っていた闇の書事件にかかわり、内部にいたダークネスと戦闘を開始。撃破寸前なのだが、後始末…レイが言うならばとどめ…後から出て来るかもしれない下級ダークネスの掃討。それが依頼の内容だ。

『以上より、お前をこの世界の地球に送る。』

「その前に頼みがある。」

『何だ？』

あまり抑揚のない声。俺は才人の髪の毛を置く。

「この髪についている二つの魔素、俺にも付着している。送るまで魔素からこいつの故郷を特定してくれないか？」



魔素は星によってすべて異なる。故に同じ魔法でも、若干の威力が異なったり、魔法そのものが存在しない場合もある。

つまりAという魔法があったとして、同じ名前のBという魔法は必ずしも全く同じというわけではないのだ。さらに似た世界でもAがある世界ではCが存在するが、Bの魔法の世界ではCが存在しない。これは全て魔素が原因となる。

解説はここまでにして…結果を聞くとするか。

『ガルドム、結果から言ってお前が向かう世界と彼の世界は同じだった。』

「そうか、なら行方不明になっているということか。」

『そろそろ地球に到達する。ガルドム。移動準備を。移転し  
たらすぐ戦いだ。』

「了解した！」

「……あれか。」

黒いゲートを突つ切つた先にいたのは飛行船。そこにいたのはほぼ魔力が枯渇した現代の魔法使い達。そこにはボロボロになり機械の少女に膝枕をしてもらつ少年騎士もいた。

「……相当な戦いがあつたようだな。」

そして視線を動かせば黒い鎧に身を包む暗黒の狂気。昨日の……まだ今日かな？ どっちでもいいか。ダークネス……今までも何度も戦つてきた巨大騎士型、ナイト・ハートレス……！

再び飛行船に視線を戻す。飛空船はそのエネルギーのほとんどを失い、あそこで浮遊するのが精一杯。

狂気には多くの武器がある、この場合奴がとる戦法は……腕を伸ばすか、左に持つ銃に弾丸を放たせるか、それとも……。

だが距離がありすぎる。この距離では盾の投擲はおるか魔法の発動距離すらも超えている。その時ピンクのレーザーと光の矢が何十本も道を切り裂く。爆煙が呼吸をした。大気が分かれ無傷のダークネスがその姿を現す。

レイめ。 あそこだなにのんびり横になってんだよ……！！！！

奴が動いた。 左手にエネルギーが収束し三発の暗黒弾が飛び出す。 初速度は時速40km辺りか、 加速している…玉の大きさは1.5mと考えていいだろう。 距離的にいえばタイムリミットは後…3秒と言ったところか。

「「「「そんなこと言ってる場合か！！！！？？？」」」」

ここまで響く彼らの叫び声。 加速した！ まずい、 予想より早い！ 予定をゼロコンマ5秒短くする。 こちらも…加速！ これじゃあ唱えられる魔法はおそらくひとつ。 詠唱に1秒、 発動にゼロコンマ3秒。 残り時間1.3秒。

「魔素を感じる…放つべきは反撃の盾。」

もう目の前だ…距離はあと一歩踏み込み…発動！！

「禁術！！ 11の2、 カウンターマグネ！！」

三つの玉のエネルギーだけは高いな。 破壊者の砲撃…前よりも強くなってる。 だがこの程度で負ける俺じゃない！！ さらに速度を打ち返した。 瞬時に跳ね返り鎧がよろめいた。 冷たい、風が吹く。

「おいおい、 主人公はラストでピンチを救うのが相場で決まってるけどあいつは違うだろうが…」

確かに聞こえた嫌味…あの野郎後で牙城中のカルピスとりあげて

やる！！ サボってたくせに！ それよりも、まずはあいつに聞く必要性がある。

「おい、ギルムお前にとってそいつらは何だ？」

この程度でしゃべれなくなるお前じゃないだろ？ あうあうとかすれた声だけが聞こえる。 まあ、この際にこいつをいじめてやるか。

「もう一度聞く。そいつらはお前にとって何だ？」

「と、友達だああ！！！」

目を限界まで開いたあいつはそう叫んだ。

いいだろう… 全力を持ってお前の友を救おう。 やっぱあいつはいじめがいがあ。 さて… 地獄を開こうか。 光速で接近しますその鎧に一太刀与える。 ひびが一瞬で入った？ この鎧、相当もろい… まるで泥… 土のような。

まさか… 昨日のゴーレムの再生能力を…？ いや、だとしたら再生するはず… ひびが無くなるはず… だがそれがない。 力の本質を変化させたか？ 魔法攻撃が聞かなかったのはこの鎧の効果とみて間違いない。 だが… こんなにもろい鎧がああ凶悪な2種の攻撃を退けた…？ いや、今考察をしている暇は無い。 光速でこの鎧を破壊する！！ ！なんども、全身に剣の斬撃を与え、 与え、 壊す！！！！

「うおおおお！！！！！！！！！！」

最後の一閃が鎧をバラバラに打ち砕く。 さあ、 とどめだ！

「ダークネス、 ヘル、 クラッシュ！！！」

胸部にある心臓。それを貫いた。体を震わせ、あのゴーレムのように闇を天に吐きだした。

「よお。」

飛空艇に待つレイにまず拳の返答をしてやった。

「ゴバキガ！！！」

変な悲鳴を上げ彼は飛空戦の壁に激突する。

「おいおい。」

「壊すな。これは人のものだ。」

グダムとハセヌが止めにかかるが振り払う。

「止めるな、このニート野郎をぶっ飛ばす。」

瓦礫の中で目を回すレイ。 それでも言葉がすっかり発音できているのだから不思議だ。

「待て、ほんとに死ぬ…！」

「じゃあ、死ね。」

「駄目だ。」

両手両足にしがみつく二人。 冗談じゃねえ！！ こいつだけは

…！！！！

「離せ！！！！！！！！！！」

「じゃあ、先に失礼。」

おつ、動けねえ。 よっしゃーじゃあ、 帰る！！ なんて言葉が聞こえた気がした。 ゲートを開き逃げだすレイ。 逃がすか！！ 三発ぶん殴らなくちゃ気がすまん！！！！

ザバー！！！！！！

「落ち着けての！」

いつの間にかハセヌが水をたっぷり入れたバケツを持ってきていた。

「ずぶ濡れかい…ヘクシユ。」

殴る前に服乾かさねえと。 必然的…でもないが牙城の浴室であつたまるか。

「この世界の魔法使い達と呼ぶべきかな…？」

彼らは俺を見た。伝えたい言葉は一つだけだ。

「その騎士を守ってやってくれ。あと、俺のことはさっきに逃げた奴が連れて行ったって言っといてくれ。頼むぞ。」

一方的な押し付けでいい。今度会った時こそ俺は…彼らに向き合う。今は、あの騎士がお前たちを守るはずだから…。開いた闇の道をただ歩いていく。そのあとを二人の騎士も続いた。



「中世…。」

グダムは壁に寄りかかり、　ただ興味なさそうにつぶやく。

「彼が行きついたこの世界のもう一つの現代魔法世界。」

彼から聞いた内容をハセヌは復唱した。

「奴が使えるツンデレの主か。なかなか面白い人材じゃなねえか。」

ズズズズズ

「だから、　何で冬にカルピス、　飲んでいるんだお前は!!」

グダムが声を荒げ、　訳が分からないとレイに詰め寄る。

「ええい！　カルピスは正義だ!!　異論は認めねえ!!!!」

レイもコップを置いて大げさに叫ぶ。

「訳分からないこと言ってんじゃねえ!!」

ハセヌもグダムの味方をし、 ああでもない、 こうでもないと言  
い争う。 3人の喧嘩を巨船は沈黙して無視し、 その喧騒が巨  
船内に響くだけ。

## 再会（後書き）

獅子は息子を谷底落とす 可愛い子には旅をさせよ 彼女は旅を知らない。故に生きる者の苦しみを知る。

次回ツインシンフォニー リアルマジック地方の旅／ガールーム編  
国を知ること

次回をお楽しみに。

## 国を知ること（前書き）

更新が遅くなって本当にごめんなさい。

こんかい、ハルケギニア、強いては人間そのものに対する痛切なアンチ（？）が含まれています。

故に気に入らないと思ったならここで引き返すことをお勧めします。正直書いていてここまで書く必要があるか？とか思ったのですが気が付いたらこんなこと書いてありました…。

オリジナルキャラクター出現！！

正確には二次元のキャラでありながら設定がほとんどないので勝手につけた。

アクロス・ウォーター（レジエンスより）

伝説の水の竜王。その癒しの力は神すらも超えるといわれている。

普段着〃白衣の男で魔法抜きにしても凄腕の名医。

青色の髪で右頬に黒子があるが某博士顔みたいな痩せこけてたりはしない、少しイケメン？

## 国を知ること

「ただいま……。」

朝帰りになった。ルイズの部屋にはまだ光は差し込まず二人はすやすや眠っていた。

「ちい姉さま……。」

寝そうはいはいはずのルイズだが少し寝返りをうったのかほんの少し掛け布団がづれていた。まだまだ世界を知らない少女。俺も……この学院のことしか知らない。町にも行ったが彼女が知っている範囲までだった。

「母さん……父さん……」

彼の望みは帰還。彼女の望みは永久において自分を真に認めてくれるものの存在。過ちを過ちだと指摘し正しいことをしたときにはほめてくれる。まあ、勝手な予想だがな。一度は帰してやりたいが……。何か忘れてるな……。

コンコン

なんか寒いぞ……？部屋の温度が下がって……。ちらつと部屋の外からの視線を感じて目を向けた。

俺はとんでもないウソつきです。ほんとにすっかり彼女のことを忘れていた。

「頼むから部屋を凍らせないでくれ、タバサ。」

ウィンドラゴンに乗って黙って杖で俺をさす少女。ちょっと怖いんですけど…。まあ約束破りじゃしょうがねえか。

「分かった、奴には悪いが今名医を呼んでやる。」

…どんな傷も病も全てを癒してきたあの王ならば…必ず彼女を救ってくれるはず…。アクロス。俺に力を…貸してくれ！

「禁術100の5ディメンジョンゲート！！アクロス・ウォーター！来てくれ！」

黒い穴が目の前に開かれ、白衣を着た男が中から出てくる。

「アポなしで、呼び出すな馬鹿野郎…。」

眠っていたのか髪の毛が何本もはねている。つい笑いこらえきれず苦笑してしまった。

「…緊急患者はどこだ？」

アクロスは髪をたくしあげておれに訪ねた。

「心神喪失者一名。もう何年もたつが現在も生きている。」

「ふむ…脳内に異常…というところか。すぐに薬を用意する。10分後またゲートを開けてくれ。依頼主は？」

後ろを指さす。アクロスは両手をポケットに突っ込み彼女に近づく。今この場に居るのは眠る二人と俺たちだけ。アクロスは少女を一回見るとシルフィードの頭を撫で始めた。

なぜなら奴も竜。水の竜王。種族は違えど竜を見て本能的に近づきたかったのかもしれない。これも勝手な推測だけだな。

「王女よ。」

！？ 王女？ 何の話だ…？

「気高き竜を僕にする力を持つ王女…そなたが依頼主か？」

「王女じゃない。だけど…。」

彼女はこくりとうなずいた。…あの、ついていけないんですけど、なんで王家の一族って気づいたんですか？ ってタバサは王族？ 頭んなかパンクしそうです。ガチで…。

「心の声は本当に心の中で言おうな、ガルーム。」

「そう。二人が起きる。」

「こりゃ、失敬。でどうする。」

「薬は今すぐ用意する。すぐに戻る。」

ともすればアクロスは消える。じっと睨むタバサ。

「少し遅れてすまなかったな。」



こくとまた頷く。…この感じ…昔あつたやつに似ている…。  
あの少女は元気だろうか？目を閉じれば、赤い髪の少女が  
ほんの少しのわがままを同じ所に住む少年に言う。その少年は嫌  
そうな顔を一瞬するが、「しょうがないな」と、とたんに笑  
顔を見せて周りに同意を求める。彼女の願いは基本的にどこかに  
出かけることだ。アルビノの少年はミュージックプレイヤーから  
イヤホンをはずして頷き、あの少女も赤い少女に服の選別を手伝  
ってもらって…出かけていく。そんなほのぼのとした光景が浮か  
ぶ。

「どうしたの？」

牙城のようにこの抑揚のない機械的なところ…それも彼女に酷似  
していた。

「いや…なんでもない。」

朝日が差し込みだした。竜の影かそれとも彼女のせいとおぼろ  
げな…儚い姿を俺に見せる。見えたのは硝子の心。自分を封じ  
た水晶。どういうことだ？

「そろそろか。」

時間はあつという間に経過する。黒いゲートを開きアクロスを  
呼び出す。そして彼は彼女に瓶に詰められた青い液体を渡した。

「いいか、この薬を飲み物に混ぜるんだ。そして飲ませたら、  
これを湖でもどこでもいい。水がある場所へ入れる。最悪、  
風呂でも構わん。いいな？」

彼は青いガラス玉を彼女に託す…。

いいのか？あれは水属性の秘宝、水の宝珠…。

それを最後にゲートから二度と出てくることは無かった。      タバ  
サはただ瓶を抱きしめてお礼を一つ。

「ありがとう。」

俺に向かって言われてもね…。

「気にするな。したかったからやっただけだ。」

ウインドラゴンは去り朝日が部屋を覗く。      今日も訓練はなしで  
いいか。

見上げた空は暁。      黄昏の時とはまた違う、美しい空の絵。      きつ  
と……いいことがきょうもありますように……。……。

「王宮なんて久しぶりだな。」

「こんなとこ来たことあんのか？」

「ああ。質素な城も豪華な城も…どれも美しかった。この城も…外面的にはな。」

外面的…ここには…魂が腐ったにおい…特に豪華な部屋に近づけば近づくほどひどく臭う！！

だが俺たちが向かう部屋からはそのにおいはしない。少し豪華な扉をくぐりその先に…。

「姫様！」

姫がそこにいた。近づき跪く。俺たちもそれに続く。

「おめでとう、ルイズ。貴方はもう立派な貴族ですよ。」

「そんなこと、ありません！私はまだ爆発しか…」

「その力で私を助けてくれました。」

「まあ、主の爆発がなければメガラウスの角は破壊できなかった。俺はあの時全員の全てを見ていたが…誰もあの角を破壊できなかった。」

「貴方がたもフーケからよく宝物を取り返してくれましたね。本当にありがとう。」

姫は頭を下げ少年は照れ、少女が少し非難の目を向ける。

「先に進言したいことが…。」

「何でしょうか？」

「実は……。」

ここでは才人だけが知っている事実。異世界から来る魔物。その脅威を細部まで説明した。

「魔法でどうにかならないのですか？」

「無理ですね。例えば、焼き尽くしても蘇る奴や、はなから攻撃を一部分以外まったく受け付けない奴だっていますから…。」

この世界の人々には共通して魔法「最強という方程式ができてい  
る。この方程式の根底にあるものは何なのか…知る必要がある。  
この世界にとらわれないものとして…。

俺の話は終わり次は姫からの頼み……。町での諜報活動。調  
度いいな、俺も街の散策をしたかったところだ。この世界を知  
るのは自らの足で歩くのがよさそうだ。

苦笑を隠しながら今後の展開を予測して笑う。安めの宿をとり、  
パンをかじりながら街を徘徊する…確かに変態か、不審者のどちら  
かだな。

「まず、服を買い換えましょう。才人は…現代の服だからいいか。」

互いの服を見てやはり目立つのは主の制服。次に俺の黒ずくめの服。最後に才人のパーカーだ。

「金は？」

「姫様から預かった400エキューがあるわ。」

今何て言った？ 主は…？ 金貨400枚を軽く言いすてなかったか？

「才人、買い物慣れしているか？」

このままルイズに金を持たせれば確実に金を全て失うことになりかねない。やれやれ、貴族のそばにはきつちりとした金の管理役は必要だな、うん。うろたえている才人を見て強引だが一つの方法をととした。

「主、私に少し考えがあります。20エキューを貸していただけませんか？」

20エキューがどのくらいの価値かは知らない。だが昔から金貨、銀貨、銅貨…この順で価値の高さが決まっていたはず。ならばこの金貨…20枚もあれば問題ないだろう…。

「分かったわ。」

すぐに彼女は返答をしてくれた。

信頼を勝ち取るためにはどんなことをしてでも真実と共に生きること…そのために俺はあの学院で貴族主義の貴族を徹底的に攻撃した。彼らにとって俺は敵だろう。だが小数を滅ぼすことはたやすいことだ。魔法の使い方に疑問を持つ者と平民と主とその知り合いを見方に取り込めば怖いものは無い。

「才人、ルイズのために地味だが品のある服を選んできてくれ。俺には少し町を散策してくる。あとなんでもいいから花の刺繍をしてある奴がいいと個人的に思う。じゃあな。」

言いたいことは全て言ってその場から立ち去った。





町は大通りや人々が多く闊歩する小道などは余りゴミも散乱していなかった。だが町外れに行けば行くほど腐敗臭と汚物の臭いが混合して人々の衣類はボロに成り果てていた。

「何だよ…これ……」

嗅覚を封じ町を歩く。地獄以上だった。こんな所は存在して

はならない。　ふざけるな…これが何時の時代にも存在する物なのか？

「ニク…ハラヘッタ……」

ボロを纏った男が目の前に一人。　ガリガリに痩せぐちゃぐちゃに伸びた体毛。　目の奥に潜む殺意。

「お前、何者だ？」

「ニク！！」

近くに積まれたレンガを握り走ってくる。　獣だ。　ただの動物だ。　その瞳は殺す事しか知らず、本能だけで生きていた。　狭い路地で無ければ無用な争いを避けるため逃げていた所だが……仕方ないか。　鞘を振る。　暗い路地の闇に潜んだ黒光りの凶器が本領を発揮する。　中世でも地球でもこんな感じなのだろうか…知性を持つ人間の本性は…

バキーン！！！！

レンガを破壊する。一度蹴りこみ50cmは下がらせた。

俺はただこの命を絶つ事を決めた。これはもうヒトじゃない。  
人の姿をした生命体ではない。

こいつが俺を殺そうとするのは生きる糧にするため。間違っていない。誰がライオンに食われるウサギを可哀相と思うだろう？  
それと同じ。

なら俺はこいつを殺そうとする理由はどんなものを並べても不当な物ではない。

人間が生き物の理から外れていると履き違えているからか？  
だから俺も人間を殺すのか？

「どちらも愚かか。」

ただ呟く。飛んできた拳をかわし、ガリガリに痩せた腹に膝蹴りを叩き込んだ。

グシャッ……

膝が濡れた。服も濡れた。お腹も濡れた。えぐり、内臓を貫かれた体はドカンと音を立て倒れその瞳は焦点を失う。

だが驚くべき事は続いた。子供だ。曲がったフォークをもつてあの男を引っ張って行く……。

ボタン！

二つ先で右に曲がって扉の音が聞こえた。

すばしっこい子供は

それを5秒ほどでやってのけた。  
嫌な予感が胸をよぎる。

イクナ イクナ イクナ

頭の何処かで警告を促す。      そして扉を開けた。      息を飲んだ。

「へへへッ」

子供のフォークが目玉をくり抜き子供は美味しそうにそれを咀嚼する。

グチュ、グチュ

その横で彼の父親だろうか、モジャモジャの手にかぶりつきその

指をかみ砕く。

吐き気を覚えた。ここまで酷い惨状は久しぶりだった。

別の男は腹から出てくる血を吸った。そして…近くで犯されている女に口移しで血を与えていた。この女の両手両足は存在せず…見回せばそういう女が何人もいた。子供を孕める年齢…出産可能になる初潮を迎えるころの年齢からもっとも年をとって40代…そんな状態で子供を産み落としていた。女の末路は全てこうだった。

慌て外に出て他の家に押し入る。女だ、女の山だ。腹を膨らませ誰の子供か分からない子供をいまにも産み落とそうとしていた。皆正気は既に失い、ヨダレを垂れ流す。

飛び出す。今の光景が頭にこびりついてしまった。

殴り掛かる男を本気で蹴り飛ばす。何も吹き飛ばす。俺はただこの地獄から離れた。この最悪の地獄から逃げ出した。

途中どこが町の端であることを森の存在を確認して知った。

更にケモノ道が少し舗装されているように見えたのはきつと気のせいだ……………



## 国を知ること（後書き）

予測は当たった。無一文になった俺たち。今俺たちはさらなる現実を知る。支えるものと支えられる者の違い。労働者と雇い主。奪うものと奪われるもの。勝利者と敗北者。

次回ツインシンフォニー リアルマジック地方の旅／ガールーム編  
先駆ける死神

次回をお楽しみに。

## 先駆ける死神（前書き）

独自解釈というか…設定がよくわかってないっていうか……色々おかしいと思いますので何かあれば感想で情報をください。

後次回は予定を変更をしてjungさんの指摘を受け書いた、主人公の過去をもう少し詳しく書いていこうと思います。

## 先駆ける死神

あの地獄から出た直後俺はバブルスクリーム、バブルクリアよりも強力な洗浄魔法をかけた。ずぶ濡れになったのは町の汚点を滅ぼせなかったから。俺はあの時ここを燃やし尽くすと言う判断が出来なかった。

「ニイチャン、そこで何してんだ？」

屈強そうな男が二人。俺に問い掛けた。

「ああ…ただ自分に呆れていた……。」

奴らの用はそんな事じゃない。カツアゲだろうと予測がついていた。

「なあここ、俺らの縄張りなんだよ。勝手に入って来てただで帰れると思ってんのか？」

今…鞘を振る気力は無かった。何時もの俺ではありえない行為を did した。

「これで勘弁してくれ。」

金貨を二枚転がす。調度もう一人の足元で止まる。

「き、き、き、き、金貨!!??」

「それが俺の全財産。代わりと言ってもなんだが、この奥の事につ

いて教えてくれ。」

理性に対して理性を。本当にあいつらよりも遥かにこのごろつきの方がマシだと思った。

「ここは元々誰もいなかったんだが、いつの間にかここに住み着いてな。臭くて臭くて誰も近寄らねえよ。ここも微妙に糞くせえし。ただ女をただで犯れる場所なんだよ。ってわけでここら縄張り

W  
」

「けどよ、俺らが入れるのはそこらまで。その奥だとガチで殺される。」

そこまで話を聞いた後俺は彼らと別れた。後ろから襲撃する気配は無く、日はまだ汚点の町を照らしつつけていた。

「これはいくらですか?」

「合わせて30スウーだよ。」

「スウー？」

パン屋で俺は悩んでいた。お腹が減っていた訳ではない。ただ物価のルートを知れたかった。それに早く金貨から銀貨、銅貨に変換したかったのだ。

「奥さん、俺これを二枚しか持っていないんですが。」

「き、き、き、き、金貨！！？？」

そんなにこいつを持っていたら変か？ 不審に思い尋ねた。

そんなに金貨は珍しいのですか？

すると彼女は俺を中に招き入れこう切り出した。

「あんた、貴族かい？」

「いや、違う。」

彼女は語る。この町で金貨を使用する者は酒場や食事処を除けば貴族だけ。平民は貴族に逆らえない。だから金貨を使用した俺に驚いたのだと。更に彼女は俺に通貨の概念を教えてくれた。それによると銅貨ドニエが基本。銀貨はスウー。銅貨10枚分。金貨は二種類あり100と書いてあるのはエキュー。今俺が持っている金貨で一枚1000枚の銅貨に相当するらしい。また何も書いていない新しい金貨は75枚の銀貨に相当するとか…。

彼女は更にエキュール一枚を50枚の銀貨と10枚の銅貨。そして買ったパンを渡してくれた。

「ありがとうございます。」

「いいのよ。私セレーナ。あんたは？」

「ガルーム。」

「んじゃまた来てね。ガルーム。」

どこにでもいそうな少し太ったおばさん。だがまだ俺は知らない。この世界はまだ意思が存在することを……。

また、腕の中ににぎりしめた、ほかほかのパンをあの二人に届けた。本気でそう思った。

二人を探し町中を駆けずり回った。そして一人走る少年を見つけた。と言うかちゃんとルイズを見はつとけての！ 伝えてないけど。

「才人！」

「ガルーム。って何だよその、パン！」

質問が出てきたので回答する。

「俺が買ってきた。」

才人は片眉だけ少し上げ低く言い放つ。

「宿探してたんじゃねえのかよ？」

最初だけ少しおどけてみせた。重要なのは後半。彼女がお金に関して無頓着な事を知る必要がある。出来れば働かせたいが……無理かな？

「してたさ。だがルイズの事だ。どうせ貴族の感覚で行動してるに違いない。」

「それに……」

と続けてパンにかぶりつく。

「昼時を過ぎてるからな。まだ17エキュール残ってる。」

まだ温かいパンを彼に差し出す。

彼は噴水がある広場で腰を下ろし、はむっと口に頬張る。

「どうだ？」

「うまい。マルトーさんには申し訳ないけど、やっぱりこっちの方が好きかな。」

調味料その他諸々はあるんだがパン五つのために瓶詰め調味料を  
買う気にはどうしてもなれなかった。　だが何もつけないで食べる  
パンもまた中々の味だった。

「ところで才人、ルイズはどうした。」

口を閉ざし、彼は口ごもる。　結果は知っていた。何があつたか…  
詳しい経緯に興味は無い。　彼女がここにいない理由…：俺は少し  
だけ安堵した。

「俺のせいだ。　また余計な事を言ったから…」

最初の後悔。　それでいい。いづれはこうなると分かっていた。

「それでいい。」

吹きゆく風は水を巻き上げ水は再び沈む。

「ありのままに接しろ。　自分を正しく分析しあの未熟者と互いに  
導きあうんだ。」

真に知るべきは己が決して独りで無いこと。　そして自分は一人で  
あること。　自分にとっての矛盾を理解すること。

「自分で今何をすべきかを考える。　どうして、何故と自分で自問  
自答するんだ。いづれ答えは見えてくる。」

俺はそういった後才人の頭を撫でた。　彼は一瞬驚いた様子を見せ  
たが何もせずされるがまま…。　その顔だけは何かを必死に考えて  
いた。　そうみえた。



下手な言葉より手の方が思いは伝わるのだと、それがいいとただ願った。

結局ルイズを見つけたのは無一文になって帰ってきた後だった。

「カジノで全部スツた!？」

「仕方ない。夜は町を出て野宿だな。」

「そんな〜！ 私嫌よ!！」

ルイズ、お前は駄目だ……!! お前の無責任な行動がこの結果を招いたと知れ!!!

怒りでぐちゃぐちゃになった頭に水を当て冷やす。その時誰かが声をかけた。

「綺麗な顔立ちだわ〜見たところお困りのようだけど、どうしたの

かしら？」

薄手のシャツとパンツを身につけた人間がそこに立っていた。　　な  
んだ、このオカマは……

「ボン、ジュール。　見てのとおり私は怪しいものではありません。  
ん。」

「いや、見るからにと言われても……」

くるくる回転しタップを踏むように移動し近づいてきた。　すまな  
いが俺には生理的にあわないのだが……。　近づいたのが才人でよ  
かった…。

「私の名はスカロン。この奥で宿を営んでるゝの。」

「宿！？」

その言葉に飛びつく。　だが才人、お前の世界でこっぴどやり口を  
経験した事は無いのか？

「そう。　ただし条件が一つだけ。」

ルイズを指差すスカロン。　ああこりゃ…間違いないなさそうだな  
……。

『魅惑の妖精亭』　砕けていえばお触り有りのキャバクラみたいな  
ものか。　（正直、キャバクラについて詳しく知るわけではないが

……)

「スカロン店長。」

「あの子達の話の聞か無かったの……!?」

彼はスカロンと店の中で呼ばれるのを嫌う。故に呼ぶ時の名前は……

「失礼、ミ・マドワーゼル。」

「ん。で、何？」

「料理の腕には僅かながらに自信があります。私に厨房の器具を貸していただけますか？」

「うーん……OK！ いいわ。あたしの舌を唸らせたらお客様にだしなさい。」

「はい！」

結論から言うと合格。素早さ、調味料の合わせ……全てにおいてミスが無く大量に作り出した料理は安く提供されていた。意外に好評だった。出来ることは手を抜かず、ただ走る。

「ふう……」

女の子が働いている姿は俺にある影を浮かばせた。その存在を浮かばせた。  
そのせいだろうか、動きが遅くなり店の管理を任されている少女に指摘された。

「ガールーム、手が止まってるわよ！」

「すみません。」

「どした？」

「いや……少し考え事だ。」

俺の顔を見てジェシカが言った。何かを感じ取ったのだろう。

「女の子の事？」

「ええ〜！ガールームが！？」

「こら。俺の事なんだと思ってるんだ？」

そんな時厨房まで聞こえる悲鳴があがった。

「お客様！ それ以上は困ります！！」

「何だ！？ ここは触ってもいいんだろ！！？」

怒鳴り声を聞き少し顔を出すと今日会ったごろつきの片方が娘の胸を少し触るのではなくまさぐっていた。

「お客様、当店ではもっと揺れ「引つ込んでろ！」

スカロンが鳩尾への一撃を避けたが……

ゴツッチン！！

変な効果音と共に頭の上に星を出した。

「ガッハハハハ！！！」

下品な笑い声と同時に一人の旅人が入店して来た。

「ふっ。」

なんだ…これ？ 今店の雰囲気が確かに変わった。

旅人はゆっくり中へ空いている席はあのごろつきの隣のみ。纏ったローブからブーツを見せると……男が転んだ。

わざと足を見せ一気に放った回し蹴り。すごい速さなので何が起

こったか分からない。女の子はすぐに逃げ出した。他の女の子が一人、その娘の対応に当たる……。

「あら、失礼……その白いワンピースのお嬢ちゃん……ワインを……食べ物……たっぷり持ってたな。」

口が閉じる度に異なる口調でルイズに注文する。慌てるルイズにボトルワインとグラスを渡す。

「落ち着いて……肩を下ろして、頑張ってこい。ルイズ。」

「……うん。」

まず中央にワインをトンと置く。続いてグラスを渡す。

「ありがとう。座って。」

顔を隠した女の前に座る。彼女はフードの中で声をださずに笑う。彼女はローブの中から一つの袋を出した。

「ゲームをしましょうか。」

「ゲーム？どんな？」

「私はこれから貴方にチップを払うわ。10枚の銀貨。」

「チップ？」

彼女との会話を聞きながら野菜を炒める。調味料と共に掻き交ぜた。

「そして私も銀貨10枚をかける。貴方が私とのゲームで勝ち続ければ貴方のチップは20枚になるわ。」

ゲームの中身を言わずに女はルイズをゲームに勧誘する。

俺は炒めた野菜を皿によそり、細く切った卵焼きと厚切りロースを周りに撒く。最後にトマトの汁を上にかけた。

「いいわ。」

今は半ば守銭奴と化したルイズはそのゲームに乗ってしまった。

「ルールは簡単よ……カードを決められたペアに揃えればいいんだからね。……まず私がやってみせるわ。」

そう……ポーカー……ある意味有名な博打。素早くカードを切り上から五枚カードを引いた。

「そして自分の好きなカードを山と違う所に置いて、また五枚になるように引く……物は試し、さあっ！やってみよ！」

俺は客も皆固まった中、彼女の右に野菜炒めを置く。彼女は……俺を見てウインクを一つ。慌て厨房に戻った。

「出来ればカルボナーラが食べたいな……！」

「ジェシカ、カルボナーラって解るか？」

「あたしは知らない料理だけど……」

なっ！？ この時代にカルボナーラは存在しない。ということはこいつは俺や才人と同じ、現代を知る者……！  
しかも…カルボナーラは……。

「ふふふ、さあ小さなお姫様、私との舞遊を始めましょう？」

くっ……あの女……！！

「ガルーム、作れるのか？」

「……ベーコンとチーズ、卵があるし……パスタはある。 20分あれば……。」

このあと俺は二人のゲーム中継を聞きながら料理を作りつづけた。  
途中でごろつきも自腹で交えた。

そして最終戦……

現在ルイズ、銀貨4枚、女金貨一枚、ごろつき銀貨76枚。 それにごろつきは金貨をちらつかせる。 一番まずいのはルイズだ。 掛け金的に釣り合いが取れていない。 女が、ルイズを庇いながらゲームを続けていた。

…ルイズは本当に金運がないのかもな……。

「ゲッフ、全掛けW」



「もうダメかな……」

「お嬢ちゃん、私にチップを貸してもらえる？」

再びウインクをルイズにしていた……と思う。

そつとチップを女に渡した。

「勝負よ……ゲスが、覚悟なさい……地獄堕ちる覚悟は出来た？……恐怖の世界に落としてあげる……あんたの全て貫いてあ・げ・る……精神まで凍てつかせるわ……女の子を虐めた罰よ……その罪……私が……私達が断罪してあげる……！」

勢いよく引いた五枚を見ずに、扇のように広げ見せ付けた。  
直後上がる驚きの声。

「ちょっと待て、そいつは……」

「私の勝ちよ、ロイヤルストレートフラッシュ。」

スピードの10 J Q K A、ポーカーの中で最強のカードを一回で引き当てた。顔を青くして金をかき集めようとする。直後女とごろつきが消えた。

ドカ バキ グシャ

不穏な音が店に聞こえる。調度カルボナーラの盛り付けが終わった。故に外に出るとそこには O L Z の格好をした成れの果てが……。あまりの滑稽さに口元に手を添え苦笑した。

「女の子に不埒な真似してただですむとは思わないことね！」

喝采、特に店の子からその女は受けていた。そして今後は空いていた席に戻り俺のカルボナーラを一口……

「……相変わらずの味ね。ガリューム。」

カルボナーラは俺にとってある人達だけにしか出さない……思い出の料理。もし他の奴らなら俺は常に炭化させたパスタを出すため……誰も作らせない。作りたくない。彼女達以外には……故に俺のカルボナーラを注文する……彼女達が一つになった姿だと気づけた。彼女の名は……

「……全く、いきなり来たからびっくりしたよ、佐貴子。」

白木 佐貴子。

「驚かないのね。ちょっとショック。」

言葉と顔は一致していない。俺も……この世界で再開出来た事だけをうれしいと思う。

「どうやって来たとかは聞かない。来てくれてサンキューな、皆……」

才人達は俺達の会話に首を傾げ俺達だけは笑みを浮かべた。

色々と嘘を取り混ぜた見苦しい言い訳の後彼女は一旦帰っていった。

266

そして夜、つまりは現在に至る。あのあと普通の、下心丸だし、欲望丸だしの男共の接待に毎回の如くブチ切れてしまい、少しでも早めに寝室になる屋根裏部屋に案内してもらった。まあ…金の無い俺達に良くここまでしてくれたと俺は感謝しているが。

「何で公爵家の娘が……あ、あ、あんな…あんな……」

ルイズはあれからずっと文句をぶつぶつ言っていた。自分の責任だと分かっているのか？

「はいはい。」

才人は彼女を宥めた後すぐに自分の毛布に包まった。

「あんたはいいわよ、女の子とデレデレしちゃってさ。」

小さく恨み言を吐き捨てる。部屋の温度が何度か低下したような肌寒さを覚えた。くだらねえ……！

「ルイズ、今何をすべきかを考える。目的のために何をするか、手段がどんなに嫌でもやらなければ姫への裏切りだと思え。」

睨みつけた顔はすでに布団の中。全くまだまだ子供だな……。

夜中、輝く星々。 太陽に替わりて世界を照らす双月。

風の渴いた音が聞こえた。 静かな寢息だけが聞こえた。

徐々に静まり返り聞こえてきたのは木の悲鳴。 板が軋む音。

大きくなりつつあるそれは死神を連想させる。

近づく音に目だけを開き二人を見る。

「起きているか、二人とも。」

「…ああ。」

「んー。」

意識があればそれでいい。 まずは才人を起こす。 頬を叩き無理矢理覚醒させた。

「何だよ……」

「いいから、ルイズの布団に入れ。 早く。」

次にルイズを起こす。

「何よ、バカ」

「緊急事態だ、殺し屋と思われる。 すぐに才人をベッドの中に入れて。 早く！」

「ええ!？」

自分の処理能力を越えた発言に完全に彼女は硬直した。その間に才人は自分の毛布を持ってベッドで小さく横になる。

「声を出すなよ。」

近づくのは確かな闇の気配。例えるなら……血に濡れた斬首台。獄炎の刃。果ての無い深い闇。荒野に響く鎮静歌。深き湖の水圧。浅瀬に沈む船。森に潜んだ牙。生き物を誘い喰らう花。吹雪が常に吹き荒れる山。大空から飛来する鋭爪。

「……ふう。」

黒光りの鞘からゆっくり純白の剣を引き抜く。鞘を足元に置き敵の行動を待つ。

そして扉が少し押された直後に左手で下がりながら扉を開き、右腕は真っ直ぐ首元に伸びた。

俺も腕が鈍ったな。

俺の背中には黒光りの鞘より黒くまがましい鎌があった。

この鎌の力は良く知っている。

死神の大鎌。 怨霊を引き裂く魂狩りの大鎌。 これを振り回せるのはこの世を統治する神に仕える天使達のみ。 ならばその正体は…。

「襲撃者の正体なんて最初から予測できてるっての。 わざわざめんどくさい方法をとるな、佐貴子。」

「面白くない。」

「こっちは大迷惑だったの！ ガチだったらまずいからどうすんだよ！ 俺しかこいつら守れな「うるさい。」

手で自分を指しこいつらを指そうとしたところでそう言われた。

正論だから口を閉じた。 扉は閉められ、彼女はフードを外した。

月明かりで明かされた顔は俺だけが知っている大切な人。

## 先駆ける死神（後書き）

再び出会えた大切な人。彼女らの言葉が俺の過去への扉を開く…。

本当の悪魔の物語。それを知るものが俺をどう見るのか……

次回ツインシンフォニー リアルマジック地方の旅／ガールーム編  
悪夢の翼

次回をお楽しみに。



## 悪夢の翼

「まあ紹介する。彼は平賀才人。彼女がルイズ・ド・ラ・ヴァリエール。」

「才人君とルイズちゃんね。よろしくN……この子達が今のガルドの主なの？」

途中から不快感をあらわに二人を睨みつけた。

「そ、そうよ！」

「まあ俺はガルドと同じ使い魔だけど。」

彼らは自らの境遇を語り睨んできた彼女に頷いて返答した。

「…そう。貴方達、質問があれば受け付けるけど？」

…俺の聞き違いか？

「おい…どういふつもりだ？」

「まだ自己紹介してないからついでに話しちゃおうと思って。」

「…もういい、分離しろ。そっちの方が話がしやすい。」

「どういふこと？」

「こいつは俺と同じく人間じゃない。しかも一人じゃない。」

それと同時に彼女の姿が朧げに霞み月明かりは彼女の影を増やしていく。髪型もバラバラに背の高さも変わり体が別れていく。そして二人が啞然とするなか十人の女がそこにいた。

彼女らは自分のプロフィールを語る…

ソード

黒髪で褐色の肌をした女性。蝙蝠の翼を持ち死神の大鎌を使役する、死者の番人。

平時はおどろおどろとした気配は無く、優しい笑みを今も浮かべている。おどろおどろと言うのが死神の雰囲気と言うのはそんなものらしい……。さっきの奇襲の時から感じていたとか。

「まあこんな所かしら。質問は？」

「えっと……二ヒ……」

才人……………！！ そんなに破廉恥にも巨大な脂肪の塊を凝視するな……！！

ギリギリ……

「ガルーム…歯が折れるよ。」

ソードの指摘でようやく自分が歯をかみ砕く勢いで歯ざしりしていた事を知った。 何でこんなに腹がたつんだ……？

「で、なんだ才人……？」

冷え切った声が寒い部屋こだました。

「…何でもありません。」

「じゃあ次。メガラ、よろしく。」

メガラ

赤髪に白色の肌、才人にとっては…そうだな外人…うん、この表現がしっくりくるのかもしれない。

夢見の精霊、キュバス族の一体で以前はクイーンと呼ばれるほどの力、幻術は強く誰にも引けをとらない。

「ううう。」

ルイズはそのプロモーションの良さに啞然とし声を上げている。

魅惑の魔法がかかって訳ではないはずなのに調った体は魅了の娘で、淫らな大人の女の気配を出していた。

「そう言えばガルームってどんな人なの？ 正直よく分からない言

動してるし……」

ルイズの発言に全員がジロツとこちらを見る。 ああ、またか…。  
何やってんだか。 と非難の言葉だけが頭をかすめた。

「……」

黙り込むしかない。 下手な言葉を呟けば……叩き潰されるのは確かだ。

「ルイズちゃん、後で聞くからこいつが来てからの出来事、全部思い出しといて。 じゃあ次はアヤ、よろしく。」

「はい。」

「ちい姉様？」

「あれ？ 声が似てる？」

ちい姉様と言うのが誰だかは知らない。 ただ彼女はその人とアヤの気配が似てると語った。

アヤ

同じく夢見の精霊の一体だが、聖属性を強く受け継ぐ天使の羽を持つ悪魔。

能力は平均して低く体術、幻術も苦手。 ただし相手を眠らせる事に関して言えば特化しており異世界の睡眠魔法を合わせた『ダウ・ニア』と呼ばれる強制睡眠魔法を得意技として扱う。

聖属性魔法も使用可能でこの世界には奇異な存在である。

「眠らせる事と料理は得意なの。よろしくね。」

笑顔がよく映える女性。彼女を一言で表すならそんな感じだ。

「次はあたしだ。」

カナ

人型ワイバーンで炎の剣を操る残忍な女戦士。音楽や音において彼女を越える者はいない。故に暗殺者にとって彼女は天敵である。どんなに存在を隠そうとしても彼女の耳から決して逃れることはできないから。

十人の中ではトップクラスの戦闘力を誇る。若干ヤンデレがかっておりどんな悪事も目的のためには全うするリアリスト。

「本当の彼女はただの女なんだけどな…」

「ふん。」

自分のプロフィールを何時もより悪く語るのでつい、補足をしてしまう。彼女はそっぽを向いた。数秒たって彼女は言う。

「ガルームがあんたらを認めたならあたしはあんた達を助ける。質問は？」

首を振る二人。面倒臭さげに言う彼女。質問らしい質問を彼女

は寄せ付けていない。さっき俺が才人を睨んで以来彼もろくでも無いことを質問していない。

「リリコ後よろしく。」

言葉少なく相当背が高い女性に変わる。深緑色の髪を払い彼女は言った。

リリコ

毒蛇女。<sup>リミア</sup>それが彼女の知られないようにしてきた真の姿。

上半身の変化は僅かに鋭くなる牙。下半身は樹海と同じ色。

冷たくすべすべした蛇の皮…。

身に大地の加護を持ち、僅かなら土を使役し物体の素材と形を変化させる力を持つ。

「だからこんなの作ってみただけど。」

完成したのはルイズの人形。

「やっぱり可愛いわよ。」

「……」

自分より遥かに大きい巨人のような圧迫感を覚えるのにそっと這った彼女の手が優しく、複雑な色を瞳は映していた。

「さてと、後五人ね。」

「まあ個性が強い連中だから直ぐに覚えるさ。　ユキナ、頼む。」

真っ白なカーディガンを羽織った女は頷き氷の椅子に腰を下ろす。  
凝視すれば見えるかもしれない、短めのスカートを履いていた。

「…ユキナ、少し卑猥じゃないか？」

「うっくん、気分！　今日はミニス力をしてたい気分なの。」

ユキナ

雪女。　そこからユキナと安直な名前だが、本来は雪の中でも育つ雪菜の名を取ってきたと言う。

雪の精霊のため得意とする魔法はもちろん氷の魔法。　大気中の水分を一瞬で氷結させ多くの氷の道具を生成する。

奥義にダイヤモンドダスト。　雪山の暁。　朝日が氷を反射し鋭く尖った刃が生まれる。　その刃を一斉召喚し総発射、敵を凍結させる。

「冷たいっすか？」

「うっくん…温度は25度くらいかな。　私、雪女だけど寒いのが嫌いだから。」

苦笑した。　誰もが考える常識は人間には…通用しないのかもしれない。

「ひんやりしてますね。　夏だったら最高なんだけどな。」

「海か：ユキナ、もういいか？」

「いいよ。海の話も出たし次はやっぱテティかな。」

これまたひらひらなミニス力をはいた。貝殻でできたピアスをつけた女性。

「ですよね。」

テティ

人魚の一族に属する者。回復と吸収の魔法を得意とする。

水泳が得意。当たり前。潜水が得意。当たり前。魚釣りは苦手です。

「素手で捕まえるなら出来るんだけどな。」

「そりゃ当たり前だ。」

楽しい事は大好き。特に勝負事は大好き。勝ったらもっとうれしいけど負けても楽しめたんだからそれでいいらしい。

ただし不正や騙す奴は大嫌い。そんな奴らは水鉄砲で星に（そのくらい吹き飛ばす）する。具体例を言えば今日のごろつきと彼女が一瞬で消えたのは彼女の力を使用したためらしい。

「じゃあ次は…。」

「私でいい？」



アンナ

翼人種、ハーピーの一体。本来の姿に戻ると翼と腕が一体化し、足が鉤爪に変化する。翼から打ち出す風の最大威力は町一つを吹き飛ばすほど強力。ただしそのようなエネルギーを出す場合相当な集中力要するため、普段は発動することができない。

10人の中で情報の伝達係をしておりいつの間にか多くの情報を入手してしまう幸運を持つ。

「ふーん。」

「あいな、こいつがいるおかげでいろいろと役に立つんだぞ。」

「なんか、地味。」

「ルイズ、ちゃん？　ちょっと本気出していいかな？」

彼女が手を大きく広げ「おおぎする。それだけで彼女に猛烈な風が押し寄せた。

「地味なのは認める。　だけど私だってできることがあるの。　それだけは忘れないで。　貴方を倒すことぐらい造作もないことよ。」

叱るのは結構だが…。

「ルイズ、アンナ。　互いにそのくらいにしる。」

「だけど…。」

「全員に言っておく。俺たちはなすべきことがあるからここにいるんだ。スミレ、ディーネ自己紹介をしてくれ。」

「うん。」

「分かったわ。」

スミレ

魔草アルラウネ 花の下半身と女性の上半身を持つ植物族に所属する魔物。彼女の場合莖草がモチーフにされている。伝承で伝わるような姿は無く全身に蔦と花で身を包んだ人型。毒と植物の鞭で連激を繰り出す。

植物の力を扱い他を癒すことも大地の力を浸食して奪い去ることもできる。もちろん逆に大地を癒し花畑を作り出すことも可能。

「まあ、こんな感じね。」

指パッチン一つでカーネーションの花束を出し、彼女に渡した。

「本物だ。　　こんなの見たことない。」

「似たようなのはガルームがやってたのよな。」

「ふーん。　色々貴方もやってるのね。」

ディーネが小突いてきたのでキツと睨み返した。

「さて、ラストは私か。」

ディーネ

水の精霊ウィンディーネ。水の全てを操る4大精霊の一族の人。一応言っておくが水の全てを操るというのは形容ではない。生き物の体内の水すべてをコントロールし、気に入らなければその場抹殺するほどを持つ。

「怖くない？ その人たち。」

「人はいいんだけどな。ただ、怒らせるなよ。こいつらの本気出したら、俺は止められない。俺はこいつらには勝てないんだ。ある装備のせいで俺の全ての力が封じられる。」

ディーネは続きを話すのか咳払いして俺の力を封じるアイテムを出した。

「これよ。私たち全員が持つてる。」

それはただのハート形のネックレス。ただ戦闘中それをかざせば世界の創世の神の力が解き放たれる…。

「特に趣味なんてないしな、何かあったっけ？」

「うーん…そうだ、ディーネは医師の資格を持っていなかった？」

「それ以外…あ！」

彼女の趣味というわけではないが彼女は色々薬を作るのが得意で、ほとんどその場で適した薬を作ることができる。そんな特技がある。

「モンモランシーと同じ特技か。」

「誰？」

「ルイズが通っている学院の生徒の一人だ。さてお開きにs」

立ち上がろうとした直後に薦が足を縛って転ばせて、その上水が出てきて急に凍るってどういう冗談だよ？ もちろん彼女らのしたことだ。

「まだ寝ないでよ。ルイズちゃん達からあんたが今までしてきたことをばっちり聞いてあげる。」

目が座ってますよ、アンナさん。 いや…ほぼ全員だ。

「まあ、自業自得？」

アヤ俺が一体何をしたってんだ…。

彼らは俺のしてきたことをほとんど間違いなくすべてを彼女らに話した。俺が生徒を傷つけたこと、危険なショーをしたこと、盗族とたたかったこと、そして彼女らを励ましたこと？

「『『『『『またか…』』』』』」

なんだこのシンクロ率の高さは？

「分かった。」

何が分かったんだ？ カナ…。

「ガールームの過去…話してあげる。」

「止める！ メガラ！！！」

「誰か、猿轡もつけて。」

「何！？」

口が固まった…水が固まって…喋れない。しかも目の前にあのペンダント置いていきやがった。魔法が使えない…。

「いい。二人とも。これは誰も信じてできなかったある男の物語よ。」



そのもの、大空より落ちてきた。記憶を失い、何をすべきか分からず、ただの人形となって彼は生きた。彼自身の意識が生まれたのは今から10年前。彼は人と他種族との共存を否定し、人間そのものを無にしようと考えていた七大竜王と戦いそれまでの自分を失った。

意識そのものが生まれ変わり、彼がしたことは彼らの信用を得ることだった。自分ができることを。ただ黙々と働き続けた。人間にしては超が三つ着くくらい重大できつい仕事。魂胆は見え見えだったのにその姿はそんな気持ち一つなく、ただ誰かのためになりたいと、その後ろ姿はそれだけを訴え続けた。

彼にまつわるエピソードは三つ。一つ、彼の出生と身体の変化の話。

彼は人間にしては強靱すぎるほどの力を得た。調べればそれは原初の魔法、『禁術』封印されていた書物を読んだ覚えもない。がその書物を彼は自分の脳の中に収めてしまっていたのだ。その力に気付いたのは会得してからさらに先：魔界で起きたある事件がきっかけだった。

それこそ、キュバス族の出会い。女だけの城の主は世界統一のための会議に出席を拒んだ。魔界統一：争いばかりの世界をようやく平穏へと導くためにはありとあらゆる種族につながりを持たせなければならなかった。だが争いの間に起きるのは生きるための

権利を踏みにじる行為ばかり。特に女たちは。

「ねえ、それって…。」

「戦争で一番不足するのは戦士と食糧なの。戦い慣れない女は…皆…。」

メガラが唇をかみしめる。この中でその惨劇を見たのは彼女だけ。親や友がめちやくちやに蹂躪されていく。瓦礫の下、彼女は見つからないように小さくなって震え続けた。

「話を戻すわ。」

故の拒絶。彼は怒りに震えた。二度とそのような戦争を回避するための会合なのに、どうして分かりあおうとしないと訴えついにキレた。彼は言った。「ならば破壊する。この城も、お前らも全て。平和のための異分子だ。」そう言いきった。分かりあおうとしない、ならば切り捨てる。いずれ多くの生き物が死ぬ前に片方を切り捨てようと彼は剣をふるった。全て彼の独断。だから止めようとしたものも怒りに狂っていた彼には届かない。そこで初めて彼の怒りが禁術の闇の力を引き出し闇の残光を放つ技を会得してしまった。彼は魔力の暴走のため力尽き、その場にいたものが死ぬことは無かった。

だがこの後彼が異世界へ旅立ち多くの廻っているうちに彼の出生の秘密が明らかになった。

彼の正体…。ある一つの世界が疫病によってすべての生き物の繁殖能力が劇的に低下。もちろん人間もその病魔から逃れることはできず、人間が絶滅するかもしれない。多くの生き物が普通に生きているのにこれ以上の子孫が残せず絶滅していった。そこで



人々は最後の賭けとしてクローンを作ることにした。病魔が発生する前の時代の遺伝子を使い多くの科学者がこの実験に参加しありとあらゆる技術を持つてこのプロジェクトに取り組んだ。並行して病魔に対する薬も研究された。

そのプロジェクトの果て、研究が始まって50年、人間の人口が六十億人からわずか二億人を切ったところで初めて成功体が生まれた。しかしそれは信じられないことだった。その受精卵は決して発生するはずがなかったのだ。理由の一つ。その受精卵に使われていたのは今まで存在していたありとあらゆるDNAを無理矢理配合させて作った卵だったからだ。だがその受精卵はプロジェクトに大きく貢献し人類はようやく十億人を超える勢いで回復し始めた。

「ガールーム、もしかして…。」

「もしかしてでもないだろ。お前の予測通り。俺はその受精卵からできた…いわば混合<sup>キメラ</sup>生命体なんだよ。」

「じゃあ、自分が悪魔…化け物って言ったのはこのため?」

このやり取りを彼は何度聞いただろうか? あきらめて仰向けに転がる彼の瞳は閉じていた。

## 二つ目：彼の裏切りの話

彼は多くの世界をめぐりそれぞれの世界の最強の騎士団を作ろうとしていた。そのチームに種族は関係なく、そのチームに一切の敗北は許されない。だが世界は多すぎた。それぞれの世界を防御しているだけではすべての世界を守れない。ならばどうするか、

その答えは一つだけだった。自分自身存在を許されないダークネスと同じと考え始めていたから、そのチームを飛び出し単身内部に潜入した。表向きには彼らを裏切ったのだ。どれだけ失望させたかその答えは彼自身よく知っている。そのうえで彼はそのような決断をした。

「嘘だろ、じゃあお前が俺に『どんな日本』って聞いたのは、お前がアニメの世界を？」

「そういうことだ。」

「ガールーム、いいよね？」

「ああ。構わない。」

その言葉は小さくこの部屋に聞こえた。

三つ目 ガールームの罪。

彼が行った大罪は三つ。

一つダークネスには殺した者たちを乗っ取る力がある。今では生きていても乗っ取る力を持つているがそれは蛇足だ。多くの世界が闇に沈んだ。地獄に変わった。このままではさらに多くの世界が滅んでしまう。そこで…全力を持ってそれら107の世界を滅ぼした。一振りに飛んだ闇の力。まるで地球を肉団子のように食い尽くし、後には何も残らなかった。この時戦いではない、自分の意思で、自分の行ったことが原因で無関係の者たちを巻き込んで殺してしまった。

二つ目。彼はこの戦いを裏側を知った。未だ口を開かないか

らどんなことがあったのかは彼女たちは知らなかった。結果だけを知っている。多くの世界に厄災を振りまいた。ある世界では突如隕石が落下し主要の街を焼いた。他の世界では天変地異が起こり多くの生き物が巻き込まれた。全部死んだ。山が割れ海が崩れ川が消えた。この時約六十六兆人が死んだ。生き物もどのくらい滅んだか分からない。

最後これがガルームのもっともな罪である。自らを暗黒執行者と呼び一つの世界で全ての重罪人を、全ての支配者を、全てのテロリストを、全ての反逆者を、人間の大半を亡き者にしたこと。一つ目との違いは一つだけ。ダークネスに支配されているかいないか。そして究極の騎士団の誓いとして人々を守る…その誓いを自ら破った。神は彼を許さなかった。だがそれでも彼は立ち上がり裁きを受けても決して死ぬことができない体は最終的に自らの剣で己を貫き立ち上がった。

「マジ？」

「じゃあ、ガルームってもう死んでるの？」

「何度も死んで生きかえってる。言っただろ俺は人間じゃない。全て仕組まれ、創造主も俺を殺さず俺を治すことに専念させるほどだ。」

その罪の果て、彼は自分の心を壊してしまった。うつん、一つ目の罪の時からずっと心を傷つけてそして壊れてしまった。自分の許さず…人間も生き物も無関係に自らが滅ぶその時まで暴走し続ける悪魔として…だから私たちが彼を直さなくちゃいけなかった。

最初に戻ってきた時…彼は独り部屋にこもってしまった。元々何にもなくても…宇宙だろうが…深海でも生きられたから。

「もういいだろ。このくらいで。全員寝る。明日からまた仕事だ。」

昔は、眠ることすら忘れていたのにな……。心休まる…そんなこともない。彼女らはそう締めくくった。

## 悪夢の翼（後書き）

悪魔の正体。それは運命に翻弄され続けた男。その強大な力と引き換えのように失った強い心。支えるものが現れるとき物語はさらに加速する。

次回ツインシンフォニー リアルマジック地方の旅／ガールーム編  
ほんの少しのきっかけ

次回をお楽しみに。

## ほんの少しのきっかけ（前書き）

一週間程度更新できずにごめんなさい！　そして書きあがったのはほんの少しだけorz

文章力のなさは分かっていたがストーリー構成までだんだん無茶苦茶になって来たぜ…。

ほんの少しのきっかけ

「客多いわね。」

「ああ。」

アヤと俺で料理を大量に作り出す。今はリリコが午前中に大量に制作してくれたイス4脚付きのテーブルを三つ、追加しただけで全体の客が1・4倍増加。彼女たちは店の子のフォ

ローのみ。

本日早朝、曇りなき青空が広がる今日この頃。部屋ではダウン・エアでぐっすり眠る3人。皆はまた佐貴子の姿に戻ってしまった。目を閉じたのに眠れなかった。ゆっくりと起

きて下に降りるとスカロンがまるで待っていたかのようにウィンクをしてきた。正直気持ち悪いっす。彼には少し話がある。

「少しよろしいですか？」

起きてから少し迷ったが真実を彼に伝えることにした。ルイズの正体。才人との関係。後部屋に佐貴子がいることを。彼女の真実のことすら。

「王宮の間諜ね…」

「そういうことです。　ご迷惑を、おかけするとはおもいますが…。」

「いいのよ！　うちはそういう貴族のほうが好きよ。　それに嫌な貴族と良い貴族ぐらいの区別はつくしね。」

手をフルフル振っておほほと笑う彼。それと…人つづけた一言は俺を驚かせ飲もうとしていた水をふいてしまうほどだった。

「ところで、あんた何股かけてるの？」

「けほっ！けほっ！」

醜態をさらし後からやってきたアンナにからかわれ二人に笑われ続けた。

「いらっしゃいませ！」

「今までの１・５倍は客が入るわね。」

そんなことをジェシカは口にする。　まあ今まで２０分で３０人が４５人になれば一時間で４５人増加する。　魅惑の妖精亭は夜中まで開いていることもある。　ということは営業時間は現在の時間で言う午後５時から夜１１時ごろまでが営業時間。　単純計算で行けば４５×６で２７０人。　一人大体安くて銀貨８０枚、気前のいい客



なら金貨2枚。 利益は相当見込める…。

「いらつしゃいませ…」

営業の子が固まった。 少し区切りをつけ入口を見れば、豪華なマントを身に付けた猿のような男がいた。 しわは濃く、おそらく見かけ年齢が実際年齢より数年は上になっているだろう。 正直あまり顔がいいとはいえない。

「これはこれは、テグレシテマ様ようこそおいでくださいました。」  
スカロンが出迎える。 その表情はいつもより硬い気がした。

「今日は客だ。 あと…また酒を持ってきてやったぞ。」

紫…ワインか。 まあ仕事とはいえあそこまで不細工な男の酒を同席しなければならぬのは女にとっては苦しみだろ。 まあ…仕方ないか。

「ねえ…」

ディーネ？ 彼女が面倒を見ている子は今あいつと同席か。 今同席しているメンバーは4人…その担当しているやつらは心配そうに端から見ていた。

「なんか…嫌な予感がしない？」

「…さあ。 だがお前がそう感じるんだ、警戒していいだろう。」

俺は…愚かだった。 どうして俺の感覚で全てを考えてしまったの

か、まともに話を聞こうとしなかったことを……後悔した。

## ほんの少しのきっかけ（後書き）

俺は言った。 守るべき人は守れと。 だが俺は手を伸ばすことをやめた。 たとえ何が起こきても戦場でしか俺はだれかを救えない。

次回ツインシンフォニー リアルマジック地方の旅／ガールーム編  
愚か者

次回をお楽しみに。

## 愚か者

「何？ 担当している子が辞めた？」

「ええ。 書置きだけ残してね。」

リリコが俺にそう言ってきたのは午前中。 ディーネ、アンナ、リリコ、カナ。

「あの子が辞めるなんてありえない…。」

カナはそう断言する。 根拠は無かった、でもそうとしか思えなかったのだった。 皆活発ないい子だ。 俺でもそう思うんだ。 同姓の彼女たちなら余計に感じるだろうな。 正直羨ましいよ。 お前たちが、な。

「さて俺は食材を見て来る。 お前ら街をぶらついてこいよ。」

「ええ、ガールームが一緒ならまだしもな。」

テーブルに座って足をばたつかせるアンナ。

「仕事がある。 俺はここで戦わなければならない。 貴族がこの店によく来るならば、俺は奴らを監視しそれを姫に伝える責務がな。」

振り返った後再び声がかかることは無かった。

「ミ・マドワーゼル、昨日のワインはどこに？」

「それなら、部屋の奥の貯蔵庫よ。」

間違いなく昨日の貴族が何か裏があるのは間違いない。これだ…だがワイン臭の他に混じるかすかな匂い。これは何だ？これを飲んだからおかしくなったのか？調べなきゃ俺の手でこの街を歩いて。

「買い出し行つてきます！」

止まるわけにはいかない。俺が守るんだ。全てを…絶対に…！！

「あいつ、頑張るわね。」

「ジェシカさん、それは違うわ。」

ソードは彼女に言う。彼はただ、強迫観念に突き動かされているだけだと。その言葉に彼女らは手を止める。あの男がそのような思いで動いているとは到底思えないのだ。

「多分あいつ、営業時間まで戻つてこないわね。」

「じゃあ、皆手伝つて。」

手を叩きみんなを引っ張っていく。

「そのポジション私だったのにな。」

ジェシカはやれやれと自分にため息をついて、彼女たちを手伝いだした。その胸にわずかに残る苦しみを抱いたまま。

「いないか…。」

町中を練り歩き、パン屋とかいろいろ聞いて回ったのだが、どこにも有力な情報は無かった。くそ…！！ どうしてどこにもない？

あの子たちは…？

「なあ、デクレシテマのところに行くか？」

若い兵士は二人が話し合っている。デクレシテマ…昨日の野郎か。何故王宮の兵士がデクレシテマのところに行く必要がある？

「失礼。」

「ん？」

「私はデクレシテマ様に手紙を預かりこの地へまいりました。ですがデクレシテマ様の職業も住居も知らない。申し訳ありませんが教えていただけませんか？」

よく、相変わらず無茶な嘘をつける…。胸の中にたった一つの手

紙を今作りだした。

「…おまえどこの出身だ？」

「隣国の西、山奥の村の鍛冶屋。」

中途半端だがこれしか手がない。

「鍛冶屋の息子…？ …デクレシテマ様は水のスクウェアメイジ。  
町の全権利を掌握しているお方だ。警備隊式の総隊長でもあら  
れる。」

平民監査？ 平民を監視して、 平民を守るための人って言ったところか。 おそらく町の防衛の部隊のリーダー…あまり位は高くはないが防衛のかなめの人物であるのだろう。 だから補助に長けている水メイジ…。

「で、手紙を見せろ。」

「残念だが本人しか渡す予定は無い。 それに炙り文字だ。 読ませるか。」

「…場所はこの町をぬけて東側の森にある。」

「分かった。」

立ち去る兵士は舌打ちして去っていく。 やはり分からないな。

奴らがデクレのところに行こうとしていた。何故だ？ 報告なら担当者が行くだろう。あの二人は仕事帰りだった。なのに何故？

理由を推理してみようか。あの男たちはおそらくただの平民。

しかも兵士としてはランクは下っ端……だと思っただが。ならば私的なようか？ それとも上司の命令？ 前者ならばあそこに言っ得がある。ということになる。後者はまあ普通だがわざわざ二人で行く必要があるのか？ ……やはり前者か。ならこの世界の人間にはゲームは無い。遊戯と言えば体を使った遊びはあるかもしれないが…大人にそんなこと…行きたければカジノもこの町にはある。後考えられるのは……。

「ガールーム!!」

後ろから抱きつかれた。全く、どうして俺はこんなに近くにいるのに気付かなかったんだ？

「なんだ、アンナ。」

「…デクレシテマのところにいたよ。」



「そうか。さすがは俺の情報管理…最高だよ。ありがとう。  
これでけりをつけられる。あの酒に心神喪失の毒が混じっている  
はず。」

振り返ることなく…彼女は俺の胸に手を回す。その手を上から重  
ねた。

「ありがとう…。」

「ううん。どういたしまして。」

優しい光がそっと消えていく。ふと気付くと周りから白い目で見  
られていた。

「アンナ、こっちだ！」

彼女の手を引いて走る。このまま変な目で見られ続けるのはしや  
くだ！ 右、また右、左…右、左、真っ直ぐ。

「ディーネには俺が伝えておく。変なことはするなよ。」

彼女は頷いてどこかへ去って行った。大丈夫かな。念は押して  
おいたが……。

「あれ…ガールーム、彼女たちは？」

「いないんですか？」

「ええ。」

スカロンが言うには彼女たちは仕込みだけやった後全員で例の酒を見に言ったとか……ってまさか俺が知る前に奴らはもう……

「どうしたんだ？」

才人が声をかけてきてくれたが……。

「才人、あいつらいつ消えた？」

「10分前くらいかな？ 時計ないから分かんないけど。」

まさか……まさか……

「ほら！ 仕事しなさいよね！！」

あいつら……。仕事したらすぐに……！！

「ああ！！」

自棄になってその言葉を吐き捨てた。 待つてろ！ 俺が行くまで頼むから下手なことはするなよ！！！！  
その日の料理は客にも娘にも少し首をかしげられてしまった。

「くそ…どこだ？ 仕方ない…我が求めし物を映せ！ デビル・アイ！！」

瞳の奥に移る屋敷。そこまでの行き方は…よし！ 索敵魔法、デビル・アイ。悪魔の瞳で世界を見回す…。木々を蹴り、その一つの屋敷へ飛びまわる。

ドカーン！！！！

土煙が上がりそこから黒い女が一人飛び出す。月光に照らされ女は黒い鎌を構え突進しまた土煙が上がった。水柱が1kmはあるのにしっかりと見える。

「そこまでだ！！！！！！」

開かれている門の上から扉を突き破り侵入した。体を横にしてシヨルダータツクル。回転しながら衝撃を和らげ停止し上を見上げた。

「貴様、こいつらの仲間か？」

「まあそんなものだが、俺は質問しに来た。デクレシテマ！お前が洗脳し誘拐してきた少女たちはどこだ！！」

「ふん。」

彼はそれだけ言う杖をこちらに向け氷結した氷の刃を早々に放った。こんなの…。腕を一振りして払う。

「なっ？」

奴は驚愕の表情を浮かべたがそんなの想定内だ。だが聞いておきたいことはある。

「お前何故こんなことをした？」

「ふん……幸せを与えるためさ。女にとってのな。」

まさか……。俺は奴らを見た。すでに本来の姿をさらしていたのだが……見えていないのだろうか？ それともout of 眼中つて奴か？

「ガールーム！こいつの女の幸せって……！」

予想はできているがこんな奴がまだ人の世にいたとは……いやあの腐敗の街を作ったのはこいつか？

「平民風情が貴族の子供をはらめるのだぞ。性欲のはけ口にもなるしな。」

「貴様あああつ!!!!!!!!!!!!!!」

メガラがキレました。ジャキンと爪がこすりあう音がした直後赤い髪 of 彼女は氷の弾丸をその爪で引き裂きながらその爪を引きたたいた。氷が頬をかする。それでもメガラはその男の心臓に鋭く伸びたサキュバスの爪をうちこんだ。

「……無駄だよ。私には通用しないんだお。それにしてもいい女だ。」

男の体はドロドロのアメーバのようなスライムのように変化した。  
スライムの体がメガラの腕をつかんで離さない。

「離しなさいよ！」

今度は俺が飛んだ。

「男に興味は無いよ。」

「あつたら困る。波動波!!」

これなら…波動を受けた奴はメガラの腕を離し吹っ飛んだ。彼女をつかんで飛び皆のところに着地した。

「…貴様の心根にある、思いなど分かりはしない。だが一つ言えることはある。幸せというのは、誰もが当たり前のルールにのつとり誰ひとり己の自由を侵害されず、自分の命が滅ぶその時まで自分の人生を満喫できる…。それが幸せってもんじゃないのか？」

瓦礫の底から出てきても傷一つなかった。スライムのような軟体状の体なら当然か…。ソードとテティ、ユキナと俺でメガラをつかんで離さない。

「これはとんでもない愚か者に出会ったな。」

「ああ、俺は気付けなかった。こいつらはもう真実にたどり着いていたというのにな。守るものさえも守れない、確かに愚か者だ。」

妙にかみ合わない言葉。杖を大袈裟に振り彼は言葉を出した。

「貴族は魔法が使える。すなわち我々貴族は神なのだ。平民をどうしようと我らの勝手じゃないのか？」

俺たちは固まった。何を思いあがっているのだ？ 人間風情がここまで思いあがっているとは正直思わなかった。

「ふ。」

カナ…？ 笑う理由などない気がするが…。

「あんた、神様なんかじゃない。」

すぐにこの言葉に食いついた。声を荒げ、杖をカナに向けて氷の弾丸が彼女に降り注ぐ。

「何だと！！？？？」

「だって…。」

弾丸は彼女を期づつけることは無かった。氷は熱に溶けてしまったからだ。彼女は全身から高熱波を発し近づく氷を消し去った。

「神様だったら、私を殺せるもん。覚悟しな。お前はここで殺す。」

「私も同意見。」

「こんな奴いたってしょうがないもん。」

「そうね…ほんと害虫よね。」

「世界にこんなゴミはいらないってことよ。」

「うん。 やっちゃおう！」

キレてしまっているメガラを押さえつけている俺とソードとティとユキナ以外は怒りの言葉を紡いだ。

「お前ら…殺すなよ。 あとはやめ助けてこい。」

再び散る。 後は俺たちだけだ。

「メガラ、容赦なくていい。 こいつだけは絶対に許すな。」

「分かってるわ。」

「いいの？」

「ああ。 その代わり、ソード魂はお前が刈れ。」

ソードが心配そうに尋ねて来る。 本来はご法度だ。 姫様に頼まれたのはあくまで困らせる人を探すこと。 俺たちは人を殺そうとしている。 こいつをコロセと。 俺の闇が訴える。 唇をかみしめ頭の叫びを押さえる。

「いや…その前に裁く。」

ああ…頭がぐらぐらしてくる…何なんだ？ くそ…敵…そうだ。 敵の前なんだ…！ 待て敵か？ 本当に…。



「テテイ。頼みがある。」

「？」

「ぶっかけてくれ。」

## 愚か者（後書き）

救われないものがいた。 何をしても救われない者たちがいた。  
苦しみに満ちた世界の中、 一つの希望を俺は抱きしめた。 そして  
俺は……。

次回ツインシンフォニー リアルマジック地方の旅／ガールーム編  
人を知って…

次回をお楽しみに。

人を知って…。(前書き)

更新期間を短くすると思いつきり文章内容が減りますね…情けない作者でごめんなさい。

ああ…地の文が書けない…。

人を知って…。

「は？」

「頭冷やしたい。水を。」

あきれたような声が聞こえた。

「…了解。」

大量の水が滝のように降り注ぐ。これでいい。殺気がむしゃくしゃしていた頭の中が澄んでいく…。

ふう……………デクレシテマ…。

「人は決して神になれない。神になるには、人間をやめなければならぬ。その果てにあるのは永遠の苦しみ。永久に生き続けることの苦悩。決して己を幸せにできない現実。」

真実を伝えてもなお彼の魂から感じる傲慢さが無くなることはなかった。

「それは貴様が平民だからだろうか？ われわれとは違うのだよ。」

違う…本当の最強の男たちは知っている。お前はただの…。

「愚か者だよ。」

「何？」

「聞こえなかったか？ 愚か者と言ったんだ。 本当の英雄は最悪お前みたいなものじゃない！ テティ！ エナジードレイン！！メガラ、アタック！ ソード、フィニッシュ！！」

すでに頭の中にあつた計画を実行した。

「了解！！！！」

一気に散る。 メガラが左に飛びうずうずと跳びかかる合図を待っている。

「ふん！ くそアマともが！！」

さらに顔色が厳しくなった。 …ぶちぎれて後俺に八つ当たりが来ないといいんだが……。 テティが降り注ぐ氷の雨にエメラルドの水をぶつけた。

「エナジードレイン！！」

「何だ…！？」

頭を押さえうめき声を出すデクレシテマ。 二人が同時に飛びかかった。 奴の魔力は今完全に失われた。

「もう…あんたは地獄の門の前にいるのよ…。」

「悪夢の中で死ね！！」

呪いと怒りの声が上がリ俺の目の前で、罰を描くように交差した。 わずか一瞬されど一瞬。

「アアアアアアアアアアアアアアアアツ!!!!!!」

血が辺りに飛び散り海となす。崩れ降りるのと同時に当たりの窓ガラスと装飾品がすべて碎けた。

「お前ら……お疲れさん。」

反応は無く肩がふるえている。相当こたえたのだろう。なんて声をかければいい。自分以外ならばって思いつくのに自分のことになると途端に何もできなくなる……くそ……。

「ねえ、  
ガ  
ル  
ー  
ム。」

「なんだ？」

「私達……正しいのよね？　デクレシテマを殺す代わりにたくさんの女の子を救えたんだから……。」

違う。ここに正義は無い。あるのは……欲望だけだ。俺たちは苦しむ人々を救いたかった。生きているだけで毒をばらまく男を殺したいと思った。だからヤツた。そこに……正義は無い。

「……正しいか、正しくないかはこの先の未来しか知らないさ。」

職権を乱用し女を苦しめ続けた男の末路はあまりにもむごかったがそこに絶望の報告が来た。

「ガールーム……。うわあああん!!!!!!」

アンナが飛びついて胸に顔をうずめて、わんわん泣き出した。羽根で地下をさす。アンナを4人にまかせ…最下層へと向かった。蠟燭だけがかけられた壁、その中で壁が半分押さ

れていた。隠し扉か…。

たいまつが5m感覚で置かれていた。相当暗いな。魂を…何だこの数、相当いるが人間にしては近すぎる。まるで抱き合ってるか無造作に置かれているかのように…

「誰か、いるか？」

息をのむ音と立ち上がる音。そしてガラスが割れる音…。

「ガールーム…？」

「なんだよあれ。」

「救えなかった…私達の担当の子もあと1日遅かったら、ああなっていた…。」

………なんで二度も地獄を見なきゃいけないんだ？ こいつらはどうしてこんな苦しみを味合わなくちゃいけないんだ？ 手が震える。なんで四肢が消えてるんだよ。そんな状態で

なんで生きてるんだよ…。あの地獄と一緒にだ…あそこもこんな感じだった。ここは清潔感が保たれてるけど…まるで人間を道具じゃないか。慰め者にする…こんな、やり方で…。

「まるで…人間、自慰用具ね。」

カナがその事実を吐き捨てる。

カナでさえその残酷な真実に涙し、救える子だけ救い、残りを炎の海へ投げ捨てた。彼女らの魂がもつとよき所へ転生できるように願いながら…。

「ただいま…。」

「ううん…出かけてたの？」

「ああ…。」



眠っている佐貴子が重い……。そつと彼女たちが自分で作ったベツトに横にした。また溢れていた涙をぬぐった。こいつには……泣いてほしくなんか……。

「泣いてるの？」

「ルイズ、教えてくれ。貴族とは何だ？」

なんで俺の視界がぼやけるんだ？　なんでこつも胸が苦しいんだ？　そしてどうして頬に水つけを感じるんだ？

「なんで泣いてるの？」

「……分からない。悪魔であるはずの俺が、胸が……痛い。主、頼む答えてくれ……！」

「貴族とは平民を守り誇りを守る人間のことを言うのよ。」

気がついたら俺は彼女を抱きしめていた。あの男があつたから余計だったのだろう……。

「ちよつと……！」

「ルイズ……お前の使い魔で本当によかった。お前のような貴族に会えて……。」

それ以上は何も言わない。何があつたかも聞くこともなく、互いに離れ眠りに就いた。

人を知って…。（後書き）

貴族の闇の姿が明らかになる中、俺たちはただ平民の生活を知るしかできない。その果てに何があるのだろうか…。

次回ツインシンフォニー リアルマジック地方の旅／ガールーム編  
傷を癒して

次回をお楽しみに。

傷を癒して（前書き）

再び彼らが決意する…そんなお話。

## 傷を癒して

「…申し訳ありませんが今日の準備は他の娘にお願いします。」

今日は俺はいつもの黒いシャツとズボンを。 対して佐貴子は白を基調にしたワンピースを。

彼女が自腹で何の変哲も無い服を買うとは予想しなかったが。俺達は今日は一日中休憩することを決めた。 戦場の死体は慣れきったが日常の地獄は嫌な感じだった。

「デートじゃないけど…二人きりだね。」

「二人じゃないだろうが…。」

右腕に抱き着いた佐貴子。 その顔は暗い。 俺達は町を出て森の中へと入っていった。 風の音、水の音、土の匂い、獣の足音。 全てがあつた。

「ガールーム、ここってこんな差別が当たり前なの？」

風が強く吹きつける。 葉っぱがざわざわ揺れる…。

「…分からない。」

「そう…ねえ……」

密着した柔らかい体に触れる。 俺よりも小さな体。 整った顔立

ち。 本当によいつは綺麗だ。 本当はあんな店で働かせたくないけど…ああいう所でこそ、彼女らは輝く。 彼女は言いかけた言葉を続けた。

「帰っちゃおうよ。」

心地良い風が優しく吹く…。 ああなんていい提案だろう。 確かにこんな世界、怒り狂って俺が全てを殺す前に他の世界に行けばどんなに楽だろう？ 色々な横暴が許されるこんな世界から出ればどんなに楽か実感出来るはずだ。

「確かに俺がいなくても…世界は動くよな……。」

魚が一匹跳びはねた。 再び水に沈んでいく。

「私は…私達はもう嫌。 ルイズちゃんやジェシカちゃん、レーネちゃん達は好きだよ…真面目ないい子だもん……けど……何でこんな差別が許されるのよ！！！！！！」

前述した通り彼女らの一人は戦争の中の混沌の中で女性だけが差別され、慰み者にされ時には肉として喰われた。 今回は食われる事はなくても神に成り上がった愚か者によって心身が凌辱された少女は数え切れないだろう。 いくら死体を見慣れ戦場になれきった俺達でも怒りを隠せない。 俺は言った。

「…なあおまえら、俺達が帰ったら誰がああの未熟な馬鹿者達を鍛えるんだ？ あんなクソみたいな野郎にしないために俺達が支えなきゃいけないんじゃないか？」

…頼むからそんな驚いた顔をしないでくれ。 自分でも今の発言が

己の口から飛び出したとは思えないんだから。だが俺が口にした事は実行したかった。そのために何をしでかすかは分からなかったが。

「…ちよつとずつ貴方の心も治っていくのかな？」

…俺はずっと壊れたままの気がするが…。

「さあな。」

それから何にもしなかった。ただその場に座って自然の動きを見つめた。雲が動く、水が流れる。風がそそよく。ずっと眠る姫。俺は……

「誓う。俺は世界：ルイズや才人か、お前らのどちらかを選ぶなら……必ずお前らを選ぶ。俺の最後の居場所を……。」

抱き寄せた体はポカポカと温かい。さっきより余計に風が冷たく感じた。

## 傷を癒して（後書き）

デクレシテマの次に現れる貴族。 横暴の横暴：永遠に続くのだからか？

次回ツインシンフォニー 中世に飛翔するもうひとりの使い魔 怒り潜む黒光りの鞘

次回をお楽しみに

## 怒り潜む黒光りの鞘（前書き）

ここから、チュレンヌの話をきっかけに物語が展開する…予定です。  
なにしろ、私がここの物語を考えたのは最初の原稿を作った数カ  
月後なので。

何かあれば受け付けますしここから少しルイズに対してもサイトに  
対しても主人公は……。



## 怒り潜む黒光りの鞘

ビスチェ姿の彼女らが俺に料理の注文をする。

「肉サラダ追加で三つ！」

「五番テーブル、指名オービーヌちゃん！ 外にキャロルちゃん！」

「分かりました！」

「テティ、クラリスちゃんと運び手伝って！」

掛け声と女性が次々と動き回る。何しろチップレース足るものが始まったらしくいつもよりも気合いが入っていた。

スカロンもこれほど儲かった事は無いと絶賛するほどだ。

「良し、あたしも頑張っちゃおっと！」

ジェシカまで皿洗いから外まで広がる席の応答にあたり出した。

「才人、一人で平気か？」

彼を見ずにそう尋ねる。

「今、アンナさんが……」

「全員回ってる訳じゃないから。基本的に女の子の接待は交代制だし私達、必ず二人残るから。」

「また指名！ メロディーちゃんとリリコ！」

こんな日々が続いた。ソードが付いてるせいか、ルイズも感心した顔を見せながら対応に当たる。

親についてくひよこのようにも見えるが…最初だし仕方ないな。

…少しずつ成長してくればいいや。

チップレースは中間、今夜は中間報告のある日。

うーん…賑わいは最低かな…外のテーブルは一旦撤去し中で酒を楽しむ客がやや顔色が悪い…。

「何かあったか？」

「さあ…」

ジェシカでも何があったか分からないらしい。やけに一般市民と言っより兵士と思われる者が多かった。

「…デクレシテマの事、次の責任者が最悪だそうよ。」

今兵士と話をしてきたカナが取りに来るついでに耳元で言った。俺達の行動が裏目に出た。兵士達の息抜きのために女の子の命を使っていたらしい。

「いくらごまかしても…女と酒…現実はおっかないね。」

直後わざわざ言葉を言う者が来たようだ。

「のっほん！」

誰だ？ まあ偉ぶった貴族なのは間違い無いだろうが。店の空気が変わった。近くにいたアンナに部屋からあの二つを持つてくるように指示した。もちろん剣だ。

「剣つて、あんた何考えてるのよ！」

ジェシカが非難する。確かに貴族相手に平民が手を挙げればただでは済まされない。当たり前か。予測だ。だが、振り返りスカロンのごまをすっている相手から異様な二オイを感じた。王宮で感じたのと同じ二オイだ…。なんだかスカロンも嫌そうだ…。

なんであんなのが……

誰かの呟き？ 魂の悲鳴か？……やれやれ『暗黒の救世主』の出番かな？

まず奴の出番のデータがいるな。

「ジェシカ、あいつらはどんな奴らなんだ？」

忌ま忌ましがに可憐な顔を怒りで歪み、呟いた言葉は、はきはきとしながらも呪言のようだ。

それ相応の怒り。予測は出来ていた。貴族はムカつく。だげと抵抗出来ない。魔法に勝てない。故に貴族に逆らわないよう

に自分を押さえることしか出来ない。

「この辺の徴税官をやってるチュレンヌ。あいつらに逆らったら重い税をかけられちゃうから商売やってる人は皆逆らえない。」

ふと聞こえたのは人の悲鳴。火を弱め見ると、杖を構えた男達。  
……力の使い方を履き違えてやがる。あのガキがこの事を知ったらマジギレ……だろうな。

「ソード。」

「ん？」

入口付近にいたソードに声をかけ酒を渡す。まあ行ってこいと無言で言った。

「後ルイズは？」

「そこ。」

……これで本格的に知ってもらおうとしよう。もし俺がこの成長しているこの少女を変えられるのなら……。ルイズにも同じように渡し言った。

「ソードに教わったことを活かせ。自分の気持ちを押さえることを忘れるな。」

「うん……私でも平気よね！」

気合いと心構えは十分。だが……

「ルイズ。自分の本当の姿を見るがいい。」

首を傾げた。

「覚えてろ。それだけでいいから。」

頷く彼女の頭をそつと撫で背中を押した。焼けた肉が香ばしいにおいを漂わせる。ただ、胸に潜ませたあの剣を握りしめたくなつた。肉を見たらそれを切りたくなつた。

## 怒り潜む黒光りの鞘（後書き）

今俺は怒りに震えている。 あいつの件があつたからか？ それとも本質的に訴えているのだろうか？ このすべての存在を破壊せよと…。

次回ツインシンフォニー 中世に飛翔するもうひとりの使い魔 怒りに舞う白銀の刃

次回をお楽しみに

## 怒りに舞う白銀の刃

太鼓腹を通り越した醜く肥満した身体。 客を権力と魔法の圧力で無理矢理退かした。

「大丈夫なの？ ルイズじゃあ…「ぶちギレるな。 ほぼ間違いく。」

だが…だからこそ……！

皿洗いも新しい料理も作らない。 俺達はただ飛び出す機会だけを伺う。

彼女らは優しげな笑みを見せながら近づき二人とも同じ言葉を言った。

「お待たせしました。」

まだ下手だがちゃんとグラスにお酒を注いでいる。

ソードの方が6人もまとめて相手しているので大変なようだ。が。笑顔を振り撒いていたがルイズの笑顔が一瞬で硬いものになった。

「ふん、男が接客とはな。」

何？

「おつ、男？」

同時にソードの嫌がる声が……って何してたんだ、あの野郎どもは！！

「ちよっ、ちよっと！」

「新入りだけどいいじゃねえか。服の上からでもおっぱい柔らかく。」

「足も綺麗で肌も柔らかえな。レロレロしていいよね。嫌でもやるがW」

「平民が俺達に奉仕できんだ、有り難く思えよ。」

「店長、こいつただでお持ち帰りな！」

……………ふざけんな。

ルイズに対してチュレン又は更に文句を言う。

「はっはは！ いや、あまりにも平べったいから、男だと思ったわ！ ペタンコなら構わぬだろ、その布を脱いで踊ってみろ。この私が直々に見てやろう。」

「ほら、姉ちゃん早くこっちこいや。そのデカチチ震わせてその気にさせろよ。」

「二人で裸踊り！！！」

「はい、踊れ！ 踊れ！ 踊れ！ 踊れ！！！」



手拍子も合わせて囃し立てる。黒光りの鞘は手元にありデルFRINGERは主の背中に納まっていた。元々店の子以外の女はあいつらも若干だが正体がもれている。メガラは一番深刻で黒い翼と長い爪が現れたり消えたりしていた。

「娘を下がらせろ。」

「うん。」

「ついでにヤラセろ！」

「まあ女ならいいか。」

……今何も聞こえなかった。ガチで……ヤル？ 欲望が吹き出し続ける男達について二人がキレた。

「ふざけんじゃないわよ！」「」

鼻をへし折るほどの蹴りが、チュレンヌに突き刺さる。テーブルの中央に逆立ちし回転蹴りが炸裂する。そしてソードはルイズの隣まで跳んだ。

女の子の悲鳴とスカロンの「ノー！！」という声が店中に響いた。

「じ、こいつら……」

「無礼者！」

「平民の癖によくも！」

彼らの罵倒も今のソードの前ではあまりにも無力だった。

「人間風情が…舐めんじゃないわよ！」

「なんだと…！」

それを見届けた俺は奴らが杖を向ける前に前に出た。スカロン達には悪いが…。

「オッサン、いい加減にしとけや。」

「これ以上の狼藉は、許さない。」

まずは…このテーブルが邪魔か。…俺の足は光速を越える。

全てが止まっている。今から戦場になるからな…世界が揺らぐのは時が新たな一秒を刻もうとするから。

テーブルは端に椅子はその上に。再び戻ればそこは戦場…。

「杖を切れ。」

「ああ、分かった。」

黒光りの鞘から、純白の光をまきちらしながら現れる魂の剣。そしてデルフリンガー。走り出した意思を持つ剣は後ろに控える全ての者の杖を切り払う。飛びまわる戦士は怒りに燃えその錆びついた剣でさえ木の杖をすべてたたき折った。

「この、平民が…！」

チュレンヌが炎の魔法をぶつけてきたが…。

「禁術、59の2 デッドブレス。」

吹きゆく息吹。炎が息吹に乗る。炎は炎に焼かれチュレンヌの目の前ではじけた。

「熱い！」

「チュレンヌ様！」

僅かな火が彼の腹を焼く。だがほとんど身体にダメージはないはずだ。狂った様に暴れるチュレンヌの首元にその刃を突き付けた。

「お前の負けだ。……いや勝負ですらない。ルイズ、例の紙を。」

「いいの？」

「使うときだろう？ 才人！」

杖の次に剣を折り続けた才人はひじ打ちで一人の男を壁まで吹き飛ばし後ろの敵には低い体勢に移動してからの足払い。

「なんだ？ このガキ！」

ちつ……まだやる気が……。すまないが……血を散らすk

「これを見なさい！！！」

姫から預かった王室の身分証明書。それを見た兵士もチュレンヌも一瞬固まり、そして土下座をした。

「王室の許可証…ひい……………どうかこれでおつむり下さい…！ お願ひでございます…！」

大量の金の袋を一人二つ。　一袋にどのくらい金があるのか…だが

……

「ソードさん。」

「……………ええ。」

ソードは一人一人と袋を取り上げた。　店は安堵に包まれた。　訳が無い。　ソード達は半透明の武器を持っていた。　俺は彼女らに首を振って『するな』と言いその代わり俺はある物をチュレンヌの肩にセットした。　ルイズは今までの怒りを込め言い放つ。

「…私は貴方達を認めない。　自分のなすべき事も歪めた貴方達を。　私はこの事を王宮へ報告する！」

何かを言おうとしたチュレンヌの首に更に剣を近づけた。

「はは……………」

「そして…直ぐさま私の前から消えなさい…！」

その後剣を首から引いた瞬間にチュレンヌは連れた兵士とともに走って消え去った。

喜びの声があがる。　店の娘らが彼女に近づき感謝と褒め言葉を言っていく。

「けど正体ばれちゃったから…」

あつ…スカロンはすでに知っているが確かに…他の奴らには知ってほしくなかったな。

「ふふふ、この店は従業員の事情なんて一切関知しないわ。だからなんにも見てないし聞いてない。ねっ、皆。」

「はい！勿論です！」

ソード達もルイズに近づきカナが愛おしげに頭を撫でた。

「あれが貴方の正義なら、私は貴方に従うわ。」

「そうね。ルイズちゃんなら私達も信じていいかな。」

彼女達の褒め言葉も………今は耳に入らない。

「どけ。」

才人を避ける。こっちにも笑顔を彼女は見せた。

## 怒りに舞う白銀の刃（後書き）

痛み これは俺とあいつらとの決別。 別れは本当の思いを刻むことができるのか？ そして決別は剣と剣での決着となる。

次回ツインシンフォニー ガールーム 中世に飛翔するもうひとりの使い魔 使い魔（才人）VS 使い魔

次回をお楽しみに

## 使い魔（サイト）VS 使い魔（ガルーム）

パーン！！！！

「えっ？」

誰もが困惑したかのようにこの姿を見た。赤く晴れ上がった頬。端にある蝋燭で照らされた互いの影が揺れた。

「馬鹿が。」

状況を理解したりリコとユキナが俺達を引き離れた。ディーネがルイズを軽く治療する。

「あれがお前だ。　チュレンヌはお前なんだよ！　ルイズ！！」

「私h「貴様ら、貴族の態度は常にあいつなんだよ！　言っただ。　『本当に自分を見るがいい』と。」

敢えて声を荒げルイズの心を傷つける。

「っ！　ガ、ガ、ガル、ガル、ガルームの馬鹿！　っ、っ、っ、使い魔の癖に！」

「ああ、俺は使い魔だ。　だが…使い魔だからと一切の反感が無い訳じゃない。」

「ガルーム、いい加減に…きゃっ。」

赤ん坊のように周りを退かし、えぐられた心はついに泣き声で叫んだ。

「あんだなんて、あんだなんて他の世界に行っちゃえ!!!」

潮時だな。

「ああ、そうさせてもらう。さらばだ主。貴族の誇りを教えてくれたことを感謝する。」

店を出れば暗い通りが続く。少しこの世界の地球に行こうかな…。

「待てよ。」

才人？ 店から剣を持ちながら出て来た。まさか……やる気か？

「いくらなんでも、あれは無いだろ。」

「ほう？ ルーンの手だけで戦うお前に世界を見切れるとでも言うのか？」

自分でもこの言葉は検討違いだと確信しているが、才人もルイズもこのままでは潰れる。貴族と言う名の世界に駆逐されてしまう。

「確かにルイズも我が儘だけどあいつとは違うだろうが！」

「…本質は変わらないさ。才人…まさかこの世界の貴族がお前の日本より良いとか思い始めてるのか？」

それは無いと思うが…



「一人一人違うって言いてえんだよ！ 貴族全てが悪い訳じゃないだろ！」

「…高校のクラスに誰もが出来そうな罪を犯すものがいたとする。その家族や友人は同じ事を決してしないと誰が言い切れる？」

「…！」

困るよな、人間の感情に関する質問がまともな人間に答えられるはずが無い。俺でも無理だ。嫌だから。勘違いされて犯人の友達と言われる前に自己否定するのが楽だから。誰もがそう思ってしまうから。だから……既に人の罪を犯しつづける『貴族』に暗黒の救世主からの…を与えてやらなければならない。だから邪魔するなよ……才人！

「行くなら勝手にしろ。やること多いのは知ってるからさ…けど！」

ルーンが煌めいている。来るか、才人。

「その前にルイズに謝ってから行け！！」

切り掛かる。切っ先は腕をかすがまだ甘いな。…才人、殺す

……。  
ぐわっと振るった剣は彼の真横を突き抜けた。彼は走り、がむしやらに切り裂いてくる。

「……見切れる…。機械的なんだよ。お前の剣は。」

隙が大きすぎる。　速く動けるのは評価に値するが…。

鋭い突きには縦に振り下ろし攻撃を避ける。

横の薙ぎ払いのはんの少し後ろに下がるだけで良い。

切り裂こうと剣に当て体は常に背後を取ろうとする。　策略は良い  
だが一回として敵の目的を、隙を見つけようとはしない。　これで  
はただの喧嘩だ。　剣を使っただけの…。

……こんなもんか。

「終わりにしよう。」

風よ……たたつきれ！　風が才人を包み動きを封じる。　デルフリ  
ンガーを切り上げ即座に剣を立てた。

グシャ…。

「俺は……謝らない。」

奴が気づくまで『悪魔』でありつづけるから……。

カンカララン

『相棒！ 相棒！！』

グシュ。

「さらばだ。 また会おう。」

暑い日が続くのに北風の冷たい風が街道に、  
腹を押さえ倒れた者に  
吹きすさんだ。

## 使い魔（サイト）VS 使い魔（ガルーム）（後書き）

もはやこの手しかない。 全てが俺の手から離れていく。 そうた  
った一つの『繋ぎ』がなければ 今俺はすべてが闇だと…… 彼女へ  
と伝える

次回ツインシンフォニー 中世に飛翔するもうひとりの使い魔 姫、  
闇を知る

次回をお楽しみに

## 姫、闇を知る。（前書き）

ある方に、文法も、接続詞の使い方も全くなっていないと指摘されました！ 頑張っ て治そうとしたけど無理でしたw

今後自分で、おかしいなと思ったら編集しますので、今後とも下手な文章ですがお楽しみください。

一週間更新できなかった言い訳終了！ 本編をどうぞ！ あと…ルイズとアンリエッタをいじめているのは大事だからです。決してアンチではありません。

姫、闇を知る。

赤い月に黒い影が現れる。影は何も残さず姿を消し真っ白な屋根の上からテラスへと舞い降りた。

「アンリエッタ。」

その声を聞き姫は警戒心をあらわに言う。

「こんな夜更けに訪れる無礼者よ、名乗りなさい！人を「呼んでも無駄さ。決して貴方は私を引つ立てない。」

アンリエッタ：窓の外を見ようと前に出るが何も起こらない。影は彼女を傷つけるつもりは無いのだ。月光を背にしているためか影が顔を隠した。男はマントをたなびかせる。

そのマントは闇のように真っ黒で服も黒い：ようだ。

「我が主はルイズ。夜分遅くだからこそ、貴方に見てほしい物があります。だから私はここにいます。」

親友ルイズの使い魔は二人。一人は年もさほど変わらないと思われる青年。そしてもう一人アンリエッタを人質にゲームを始めた男。こんな事をするのは男の方だ。

「ガールーム：さん？」

名を呼ぶと彼は直ぐさま用件を伝える。心なしか少し焦っているようだった。

「姫、真に申し訳ありませんが私と来てほしい。」

「理由がわかりません。何故？」

まあ、理由も何処に行くかも話していないから普通は気になる所か。

「主は……いや貴方にも見せるのは少し早いと思っていたのですが、王族の貴方には知る義務があると考えました。『貴族の本性<sup>サガ</sup>』を。」

そう、デクレシテマやチュレンヌ。強いていえば学院のギトーや生徒達……。彼らの運命は既に決まっている。

「さっ、さが？」

知らぬ言葉のため困惑する彼女。ここで俺はイメージした。鳥。大地から飛翔する巨大な鳥。

俺とあのガキはその姿を変化させる事が出来る。俺の場合この身を飛竜、鯨、野獣、蠍、蜘蛛、鳥に変えられる。

「クラッ シュ、バード」

今回選択したのは鳥。 体が熱く燃える。 実際に炎を出して燃える。

「ガールームさん!？」

暑い…暑い……! さあ、 目覚めろ!

灰色の巨大な羽が散る。 今破壊の巨鳥が飛び上がる。

15?の羽を嘴でくわえた。 理性を示すように頭を下げながらそこに置く。

「お乗り下さい。 空の旅は初めてでしょう?」

ア然とこの姿を見つめた。 変身なんてこの世界じゃ有り得……るわけないか。

「…はい。」

鳥はつむじに乗った。 空高く、 空高く舞い上がる。



「貴方が故人、デクレシテマを推薦したのですか？」

ふと気になった事を聞いてみた。彼女の顔は見れないがその声は暗い。

「…いえ、ただ了承はしました。顔立ちは少しアレでしたが王宮内の評判も仕事ぶりもよかったので。」

…そうか猫を被っていたのに気づけなかったか。

「そのデクレシテマの館があれです。」

館は既に半壊し遠くから見ても、幽霊屋敷にしか見えない有様だった。

「亜人にでも襲われたのでしょうか？」

亜人ね…確かに亜人に殺されたよ。

「着陸します。」

ゆっくりと旋回し降り立つ。姫を下ろした後俺は扉を開いた。

「うっ…」

まずいな、あんときは気づかなかったがメイドやら衛士まで殺していたのか。

「どうしてこんな酷いことを…。」

ほとんど焼けていたがそれは人の死体だと分かる程度には残っていた。奥に進むと……デクレシテマのぐちゃぐちゃに踏み潰された肉体があった。

「ストップ。…ここが彼が死んだ場所。貴方が見るには…少々刺激が強すぎる。」

本当はしたくないんだが。

「禁術59の3。スネークプロミネンス。」

何十匹もの炎の蛇が死体に取り付く。肉がじりじり燃え上がり黒焦げの跡だけが残った。

「さあ、行きましょう。」

地獄へ一歩一歩近づいていく。そして昨日のあの場所にたどり着いた。

「ここは？」

「デクレシテマがああ町の権力に固執した理由は、この部屋が教えてくれます。」

無理矢理生かされた女の体を失えばここにあるのは、ガラスで出来た、実験器具ばかり。中には何にもなかったが、ごみ箱を蹴り飛ばすと散らばる細い腕と足。彼女は小さな悲鳴をあげ、

俺にしがみついた。

「分かりましたか？」

「……………嘘です。 そんなはずありません……………」

まだ甘ったれるか。      ルイズ並に教育が必要だなこの姫も。

「貴方がルイズに依頼したが故に我々は真実を知った。」

「……………」

「貴方の知るものの大半は貴方が望んだただの幻！ 貴族などプライドしか持たない愚か者どもだ！！」

その肩を掴み力をほんの少し加える。

「貴方の理想は、 決して存在し「違うわ。」

遮る声……………佐貴子？    いつの間に。

「ルイズちゃんは泣いたわ。    その女の子だって泣いてるじゃない。」

アンリエッタは確かに泣いていた。    涙は確かな後悔を映していた。

「相変わらず、    あんた言い過ぎ。」

率直な嫌味に俺は乱暴に彼女の肩から手を離れた。

「すみません。」

「いいのよ。 どうかのお馬鹿さんが、 変な事をしでかすから…  
…こうなんだから。」

誰が馬鹿だ……。 今アンリエッタは佐貴子に作ってもらった椅子  
に腰掛け涙を拭い俯いていた。

「ごめんなさい…」

「だからいいの！ アンリエッタ…姫でしたっけ？ 女の子はいつ  
ぱい悩んで恋してそれで成長するんだから。」

「てめえらが恋ね……」

俺を愛してしまったが故に奴らはここにいる。 これだけは俺にも

分からない。何故だ、何故誰もが恐れるはずの者を恐れない者がいる？

「ねえ、一からやり直せない？」

「どういう事ですか？」

「うーん、私も上手に言えないんだけど貴族は平民をゴミのように扱っている実態を貴方は知った。平民に対して貴方はどう思っているの？」

アンリエッタは少し考え言った。

「貴族が守るべき者です。平民を失えば国も貴族も滅びます。」

……なんだ、分かってるんじゃないか。

「アンリエッタ姫、ならば一つ提案が。」

「はい。」

「町の衛生管理を徹底したらいかがでしょうか？」

彼女は首を傾げた。どうやら意味が分からないらしい。

「衛生状態は心の清潔さを示すわ。汚い町より綺麗な町、強いていえば綺麗な国のほうが好かれるわ。住民もやる気出るし。貴族達には暇な人達もいるみたいだからね。」

佐貴子が彼女に解説してくれた。俺が更に補足のため、実際にあ

った一例を示す。

「かつて財政難に陥った国は、お金を回す手段として 公共事業、今回でいえば『町を綺麗にする』と言うのを失業者にさせて、国が給料を払った。結果、物は余っていたがお金がなかった国は全体的に回復したとか。」

アンリエッタは俺の発言に苦言を漏らした。

「正直、物もお金も何にも無いんです。 ガルムさんの言う通り、プライドだけなんです。」

…ちよつとガチで余計な事を言い過ぎたかな？  
佐貴子はじつと睨んでくるし。

「…仕方ない。 この件は『貴族』に任せよう。 ヴァリエール家に秘密裏で連絡を取ることを勧めます。」

はあ…この国の改革は…魔界統一の時よりもめんどそうだ。

「何、ため息ついてんのよ。 帰るわよ。 姫様もう眠りかけてるじゃない!」

アンリエッタ姫はふねを漕ぎ始めていた。 さて…帰るか。 外に出た俺は再び変身し、 彼女らに乗せた。

「あれ？」

「どうしたの？」

飛翔中、見下ろした先にレンがあのだ道を歩いている気がしたが……  
……気の性か？

「いや、なんでもない。ところで姫様、デクレシテマを推薦したのは？」

眠りかけていたが普通に答えてくれた。

「右大臣ポトフです。彼もトリステインのために尽くしていますわ。」

………なんか嫌な予感がする。デクレシテマの時よりも………何か………。

姫、闇を知る。（後書き）

帰還は気まずい雰囲気の中で。 真実を追い続けた俺はついに…絶望にぶつかることになる。

次回ツインシンフォニー 中世に飛翔するもうひとりの使い魔 悲しみの遠吠え

次回をお楽しみに



## 悲しみの遠吠え（前書き）

まず…立てていたフラグを回収します。恋愛ではないのでご注意をw 一週間以上投稿できずにごめんなさい。

## 悲しみの遠吠え

「……」

佐貴子が俺をルイズが借りている部屋に通す。まさか今日戻ることになるうとは…

「ごめんなさい。」

部屋に入ってからかけられた最初の言葉だった。

「まだ、起きていたのか？」

ふるふると首を振る。

「なんか、目が覚めちゃって。」

もう声は小さく、今にも泣きそうな声を出す。すこし…やりすぎたか。

「お前がよくなってくればそれでいい。俺に出来ることなんてほんの少ししかないんだから。」

「そんなことない！ ガルームが教えてくれたの。色んな事。貴族と平民の差…分かった気がするの。」

「ふっ…まあ、ゆつくりと理解していけルイズ。俺も少し疲れた。お前らに対して、きつく当たりすぎたのかもしれないな。」

息をつき壁に寄りかかる…そういえば才人はどうした？

「才人は？」

「あんたが腹を串刺しにしたんでしょ？ 寝てるわよ、そこで。」

…なんだ、いびきが止まっていただけか。すこし大きいいびきにため息をつく。殺したつもりで言ったが本当に殺す気はなかったから本当に死んでたらどうしようと思ったぜw

「寝るぞ。」

返答は無く俺も眠りに…………

「どうなってんだよ…」

ちょうど学院の方角から、火の手が上がった。逃げ出すものはない。なぜなら目の前でほんの少し前まで生きていた人間は腐敗したゾンビとなつてうごめいているからだ。逃げまどうのはまだ殺されていないものばかり。

「くそっ…。」

ゾンビの一番厄介な所は急所を貫いたり、首をはねたとしても活動する…と言うこと。  
焼き払うしかないか。

全て燃やせ。 太陽を回る炎竜よ。 回れ回れ破壊のロード。 駆けろ、 絶望の太陽！

「禁術、 59の4、 ヘルコロナ！」

町が火の海に変わる。 懐かしい顔もあった。 この数日の間に言葉  
葉を交わした者もいた。 だが今は首が燃え骨だけしか残らない。  
こんな時に限って、 死んでいった奴の元気な姿が目には浮かんた。  
熱を放つ岩の中を走る。 何処かに…犯人が…。

「お兄ちゃん、 逃げて！」

子供達が俺の真横をすり抜けて王宮の方へ逃げていく。  
炎が新しい…レンガに残る焦げた跡。 この先か。

「ヒヤッ、 ハア…！」

「タノシイネ…！！」

「モエロ、モエロ…！」

「ダークネスと同化したか。 愚か者どもが。」

チュレンヌの配下の男達は子供のような火遊びをしていた。知性は失われ、瞳は赤く染まり、背中からは黒い靄が全身を覆っていた。こいつらはゾンビにさせる魔法を持っていない。どんな物かは知らないが。

「はい、そこまでだ。今度こそ消える覚悟は出来たか？」

白銀の刃を煌めかせ闇を収束させる。

「リアルブレードセット。」

『了解。リアルブレードセット。』

何も言わず剣を振るう。三人の四肢がちぎれとぶ。怨み　いまだ残るかにように腕や足がうごめく。気持ち悪いんだよ……そういうの……

焼き尽くしてやる……召喚すべきは暗黒の太陽。この世界を闇の炎で焦がして、焦がして、焦がし尽くしてやる。周りの生体反応はもうない。

「禁術、59の5……ダークネスサンシャイン！」

夜空に太陽のように輝きを放つ黒い物体が浮かび、落ちた。業火が夜天を深紅に染め上げた。当然ゾンビ達は全て炎に包まれ、灰に帰す。

「終わったか。」

土と木で出来ていた家は次々と燃え、俺が去った後には全てが炭化した世界だけ。悪夢のような惨劇は今、火災だけで残っていた。

「そう簡単には物事運ばないですよ。」

燃えた町と生き残りが逃げ込んだ王宮側の町。橋を渡ると同時にその者は俺に言った。

「レン。」

いやな予感は昨日からしていた。こいつも関わっているんじゃないのか？　そういう予測だけはできていたんだ。

「師匠

死んでください。」

普段の彼女と全く違うやつ声。声の高さではなく根底から狂っている。言うなれば…前者は清き水のおい。後者は腐った豚小屋の糞尿のおい…。

おそらく、レンは洗脳を受けてしまっている。

こいつは生きているのに！！俺は…！！

「貴様いったい何者だ？」

「…デクレシテマを殺したのは見ていた。」

タクトから飛び出す腐敗した水。　おそらくこいつを浴びたら、本当に最期だよな。

「貴様のような平民は死ね。　我ら貴族の邪魔だ。」

好きではないが、即死攻撃を持つ敵にはこの戦法がいいな。　ヒット・アンド・アウェイ。　一撃離脱戦法。　こいつが効くんだよね。　タクトを切り裂く。　彼女の髪が数本舞った。

「ちっ！　だが…こいつがある。」

木じゃない…鉄のロッド。　よく持てるな……。

「スプライトバニッシュュ!!」

モンモランシーの水流の比じゃないぞ！　家すらも撃ち抜いて…

「きゃああつ!!」

そこにいた者を襲う水流。　激しい水流は当たった者の肉をねこそぎ奪い去っていく。　ちょっと待て……これって…あの時教えた水流の魔法？

「これはいいな。　あのきまじめな左大臣もやれそうだ。」

左大臣？　まさかこいつ…

「お前、右大臣ポトフか？」

「平民が私の名を知っているとは、万死に値するぞ？」

直後水流が乱射された。 全てを貫き悲鳴があがる。 これ以上はやらせない！

狙うは首…いや、腕！

「甘いわ！」

彼女は杖を地面に叩きつけ波を呼ぶ。 奴にとって真後ろが川と言うことは、フィールドアドバンテージがあるってことかよ！ 水が俺を包み膜のようになった。

「この程度…！」

すぐに解除するがその間に何発か家を貫く水を見た。 剣で水流弾を弾く！ 何回も弾いた。 じゃないと…犠牲者が増えてしまう…！！

「無駄だ。」

コントロールがよくなってきた。 5発撃ってきて、二発…撃ち返せなかった。 軌道はそらしたものの…。

「どうして…だ。」

何故…こうも人は繰り返す？ 操られたあいつは…いや…右大臣ポトスは平民をまるでゴミのように一掃していく…。 レン…。 一緒にいた期間はほとんどなかった。 だが俺を信じてくれた。 俺



はあの学院の者たちを守ると誓った……！　だがこの結果は何だ！？  
命はこんな容易いものなのか？　俺が巡ってきた二つのあの世界……  
……人が人として生きようとしてきたあの世界……くそ……いや思えばテ  
グレシテマの時から感ずくべきだった。　女と男の差だけじゃない。  
人間の価値観からすべてが異なっていたことを、やはりこの世界  
の貴族は殺すしかないのか？

「くそ……！！」

剣を握る。　いいだろう。　鬼になろう。　悪魔になろう。

「リアルブレード、セット。」

すまない。　俺のふがいなさを許してくれ。　レン！　一気に駆け  
出し切り捨てる！　激流が俺を包むがこの程度じゃ止まらない！！  
せめて気がつく前に、痛まないように一瞬であの世に送ってやる。

「燃えろ、禁術59の1バーニングソウル！！」

燃え上がる炎剣。　この一撃で浄化しろ！！！！！！

「ガルーム！　ストップ！！！！！！！！！！」

ルイズ……来てしまったのか？　すまない、　やはり俺は……誰かを殺  
して守る正義しか……選べそうにない！！

「焼き尽くせ！　ヘル・インフェルノ！」

切り払い杖は一瞬で灰と化し、切られ飛んだ首は骨となって落下し  
た。　再び俺は殺人者に戻った。　燃える炎の中首が消え前方に倒

れた身体から現れる液体がどす黒く、大地に広がっていった。

## 悲しみの遠吠え（後書き）

怒りはついに仲間たちを呼び覚ます。 怒りが呼ぶ仲間たちはすべて悪魔。 彼らはリーダーの指示にただ従うだけ。

次回ツインシンフォニー 中世に飛翔するもうひとりの使い魔 出陣、悪魔の騎士

次回をお楽しみに

## 出陣、悪魔の騎士（前書き）

人間に命に意味はあるの？ 人の行動に意味はあるの？ 罪びとは皆死罪でいいの？

そんなことを考えていたらこんなのができてしまいました。 もう2週間ですね。更新はほぼ停滞しますが、それでも読んでくれるのであれば…もう少しだけ頑張ってみます。 なにしる受験生なもので。

## 出陣、悪魔の騎士

町は燃えた。豪雨が二時間後に急に降り出し全てが収まった。死体は何一つ残らず、誰が死んだのか、誰が何をしたのかは二人を除いて誰も知らない。そう二人を除いて。

「おい、何処行くんだよ。」

炭の町を越え腐敗した町の前に立つ。才人を連れてきた。

「いいか、この先はバイオハザード状態だ。」

そう、初日に知ったあの地獄。レンはあの道を歩いていた。空から見れば舗装されているのを知った。そしてレンはポトフに操られた…。

「よく見ておけ。他者に操られた可哀相な者の最期を。」

「…お前、まさか…」

「悪魔……だからな。禁術、79の3、スネークプロミネンス！！！！79の5！ダークネスサンシャイン！！」

二つの炎。うごめく蛇は窓を突き破り肉が全て燃え上がる。

「お前、ふざけるな！！」

肩をおもいつきり掴むが俺は動かない。そして黒い太陽が落下した。

「「キイエエエー！！」」

人間とは思えない奇声がここまで聞こえる。

「お前、人を殺したんだぞ！！なんで平然といられんだよ！！」

「そうだな。70人は死んだよ。」

暴れる才人にそう言う。その憤りをもつと感じろ、才人。

「これはチュレンヌを配下にいる貴族の仕業だ。」

あくまでも予想だ。けど外れてはいないだろう。俺を殺せなかったこと……後悔させてやる。失われた全ての命に変わって……ポトフ、貴様の存在を消去してやる……。

「俺はちよつとした復讐を果たす必要がある。奴は命を弄びすぎた。最初に難民に家を与えた後理性を奪い動物にした。」

黒い太陽の炎の中を突き進む。俺の魔力を受け炎は消え道が出来

た。俺と才人はその道を突き進む。

「お次に町を配下の者達に支配させたんだ。」

「嘘だろ？」

「確かにこれは俺の予測だ。しかし、昨夜、奴はデクレシテマが殺されたことを知っていた。更にチュレンヌにつけていた発信機はこの奥で活動を停止した。人がここに近づくとは考えにくい。」

何しろ入口付近から排泄物の臭いが漂い、入れば殺される。第一の条件から貴族がここに近づくわけがない。だが発信はここを示した。

もし、ポトフの屋敷への裏口があそこから通じるのならば全てが納得できる。

デクレシテマに町中の女の体を奪わせそれを兵士に与える。女にもはや意識などは存在しないから……まあ無茶苦茶に出来る。そこで兵士達を集め……

チュレンヌに命じて大量の金を巻き上げ、ポトフに流通。

あげくの果てに住民の一部を魔法実験の現場に変え……そして昨夜レンを洗脳し、彼女に罪を着せた。いや、それ以前にクーデターを企んでいたに違いない。だから……あんな実験を繰り返した。

「ちょっと、止まれよ。」

才人は俺にそう言った。町は既に遥か後ろ。数十分は歩いたか……。

「止めようぜ。　こんな事、　なんかおかしいと思うんだ。」

「才人：お前が言いたい事も分からなくはない。　実際、　俺もずいぶん悩んだ。」

人を殺す事で救われる命がある。　目の前の100人を殺して見えない一万人を救えるなら、　俺は迷わずに殺す。　相手が罪人であるならば特にそういえる。　それが俺が生きて戦いつづけ、得た答え。

「だが、　全ての世において自ら犯した大罪から逃げ、　時効まで逃げつづけようとする者もいる。　俺はそいつらを許さない。」

はつとした顔を俺に見せた。　けどすぐに言い返す。

「でも、　殺しは絶対いけないだろ!？」

下らないな。　俺にはそんな気持ちは無い。　俺の一番嫌いな存在は『知能を持つ生き物』なんだから。

「…議論はここまでだ。　張本人に会いに行くぞ。」

デビルアイで屋敷の場所を捕捉。　この上り坂を越えたら……

「でけえ…」

「それだけ、　違法に金を巻き上げたのさ。」

川が流れる。　外界を切り離すかのような巨大な壁。　そして月明かりがその中にいくつものくぼみがあることを教える。



「攻め込んできたら、大砲か。」

才人がぎょつとして一步下がる。

「まあ、今は見つからないさ。それに俺は正面から突破するだけだ。」

川沿いを歩きついに巨大な門の前に立つ。

「（アポはとつてある…）」

実は今日は少し仲間を呼ぶことにしていた。強大な力を扱う悪魔達を。

「俺は？」

「どっかの陰に隠れてろ。覚えとけ、これが罪人の運命だ。」

さあ……罪人達よ、抹消される覚悟は出来たか？

「何をしている!？」

才人が門の外から中を見ていると外壁の見回りと思われるおじさんが才人に近づいた。

彼は一瞬うつろたえたが、こう言った。

「知らない人からここに来るよう言われて……」

「女か？」

「いえ、ただ『地獄を見せる』とか……」

「何！？ 分かった！ 君は帰りなさい。 教えてくれてありがとう！」

僅かな笑顔とともに壁の中にある見晴らし台へ。 そして警報の鐘が鳴り響くと同時に大量の剣が空に現れ屋敷に降り注いだのを彼は目撃した。

ブレイド・レイン。 広範囲にわたり鉄の剣を、 禁術の一つ、  
メイクマテリアルで創作し雨の魔法、 レインを用いて天から降り注  
がせる。

今、窓を割り瓦を貫いて屋敷を串刺しにした。

「さて…これで出てくるか？」

今俺の体は透明…禁術…影の禁術の2番目にインビジブル。 視認  
不可の魔法がある。 この鉄と鉄がぶつかる音…だが犯人はすでに  
侵入済み。 広すぎる庭の中央で立っているんだ。 まさか…大砲  
を自分の庭にぶつ放さないだろ？

予想通り、内部や壁についている扉から兵士と…あらら、黒い翼付きのわんこもいるのか。少し遊んでやる。

「キャイン！」

真横。

「ガユ！？」

真上。

「グワウ！！」

真下。

次々と…犬の人形だったものに突き刺さり消滅していく。

「くそ、どこだ！？」

さて…貴族連中も来たことだし、そろそろいいか。頼むぜ、みんな。

「一体どこを見ているんだ？俺はずっとここに立っていた。」

陣営は俺を包むように移動した。魔法使い一人の前に兵士が二人。魔法使いは13人。兵士は26人。典型的な陣だ。その後ろにいるのは……。

「また会ったな、チュレンヌ。」

「……！ ええい！！ であえ！ であえ！！ 全力をもってこいつを殺せ！！」

「叫ぶのは結構だが……今日は一人じゃないんだよ。」

俺の周りに武器が立ち並ぶ。 その数は八つ。

「ミッション内容は誰も殺さずに戦闘能力を全て奪い去れ。」

黒い渦巻く闇が近づく兵士を軽くあしらう。 その闇に兵士達は震えたが押し付けられた杖を感じ、 再び突っ込む。

「わざわざ俺達を呼ぶからどんな強い相手か期待してたのに、 がつかりだな。」

二人の剣を叩き割り蹴り飛ばし、 その男は煩わしそうに肩についた汚れを掃う仕種をした。

デューク・ベラクメル

身長は約174？。 若干俺の方が背はデカイ。 傷一つ無い顔は綺麗な顔立ちだが氷のように冷たい目が全てを台なしにしている。

黒髪で少し顔にかかっている。

俺と同じく悪魔の戦士の一人で鋭い剣技で敵を討つ。

余談だが彼には望んで一緒にいる女が8人もいる。 それに加えて親友もいるある意味とんでもない家の家長である。

口は悪いが根は優しく大切な友らを守りたいと願っている。 無駄な争いは避けるが、 一度戦闘になれば闇魔法と光魔法を携え、 剣を持ち戦場に出場する。

更に虫使いと呼ばれ、『キャプチャー捕獲』を行い、捕まえた虫を使役する力を持つ。

主に偵察などで役に立つ。 たった一人で多くの危機を切り抜けた歴戦の戦士。

「いいじゃねえか。 人間のわりには頑張ってるだしよ。 まあろくに出来てねえようだけどさ」ハツハハハ！！！」

隣でデュークの肩を叩きながら大笑いする者がいた。 その戦場にはあまりに合わない姿に兵士は驚き固まる。

アモン・ルテラメール

デュークの親友である。 身長は169。 つねに他者を笑わせるムードメイカー兼トラブルメイカー。

所謂むつきむきな男で笑顔が太陽のように眩しい。

戦闘時ではマジックキャンセラーと呼んでるハンマーを持ち、魔法を打ち返す特殊能力を持つ。

ただハンマーなので物理でも相当なダメージを与える。 つねに友を庇い、 共に戦いつづけたデュークの戦友。

「だが報告はもっと深刻だったはずだ。 アモン、 あまりに笑えないぞ。」

「だが……アモンが笑うようにこの状況は俺達を呼ぶにしては軽すぎるな。」

アザゼル・ティアーレ

アモンの対のように寡黙。 ツツコミをいれる事が多い。

骨を槍に変化させ発射する技を持ちその槍は生き物を引き裂く。闇に身を潜め狙い撃つ、暗殺者のような攻撃が彼の構えとなる。

攻撃力だけで言うならば前述のデュークを遥かに上回るスペックを持つ。

メフィスト・ウェンヴァロ

彼もまたデュークの友の一人だ。 他の三人がショートヘアなのに  
対し彼だけは肩まで伸びたロングヘアである。

通常の剣を主武器に、 ポケットなどに爆弾や毒などを大量に仕込み大量虐殺攻撃を得意とする。

更に彼のみの技としてデッドチェインと言う触れた物を腐敗させる鎖を身体から引き抜く事が出来る。

デュークが行動派、 アモンがボケ、 アザゼルはツツコミだとするなら、 彼は全員が暴走した時の制止役である。

「皆…」

「まあ、話はちゃんと覚えている。」

「話聞いて言いたかったことがある。 この世界の貴族はくそつたれって事だ。」

サタン・レバレスカ

伝説で名高い悪魔王。 戦闘能力は今も昔も高い。

昔天上界において、 謀略にはまり、 友や仲間達とともに魔界に落ちてしまった。 それ以来己の名前を捨て現在の名前を得ることになった。

デュークよりも強く、瞬時に相手を薙ぎ払う。闇の力を帯びた超重力魔法を得意とする。

バツサリ切った髪。あらわに見せる眼光はその名にふさわしく自信に充ち溢れた赤。1 m 9 0 c m に近い体は圧倒感を感じさせる。

ロキ・ストレンス

全ての生き様はゲームであると考えている。サタンの親友だ。

今は主にデュークと行動を共にしている。

幸運度がはんぱなく高く、くじ引きやれば8割りがた当たる。

そんな彼の武器はギャンブル。魔力の込められたトランプやサイコロ、ルーレットを回しその当たり次第で解放する魔力具合が変化する。なお、炎魔法も得意。

逆立った髪は炎みたいなおレンジ色。アモン並ではないが引き締まった筋肉はある意味美しい。本気モードに突入すると上着をはぎ、上半身を見せつつ炎をまきちらしながら戦う。

「さてと……「そろそろ行くぞ。」

デビラー

黒邪龍ミラボレアスの擬人化した姿。

生身でその本来の力をコントロールする。なお彼は亜種の技も使ったため一族から恐れられ火山の奥に置き去りにされた過去がある。

人間形態では憎しみから生まれた邪魂刀とを握る。宿した呪いは『相手の首を確実ににはねる事』普通の生き物ではその刃を見る事なく宙を舞う。

ピサロ



死に堕ちてなお大切な物を守ろうとした悪魔の皇子。黒の羽毛マントを好む。光と闇のはざまで戦って経験もあり両者の違いをよく知るものでもある。典型的な闇の剣士とは異なり単純な剣技を得意とし、魔法と合わせるのは苦手である。

「ともかく、頼む。」

悪魔達は一斉に構え、突進した。それは一瞬において終わる。

剣は折れ、兵士の身体は全て壁に埋まった。

一つ付け加えておこう。デューク達の剣と兵士達の剣。太さや長さこそ、異なれど見かけはほぼ同じ。

決定的に違うのは材質だ。

「何故、私の作った最高傑作が…」

ああ……そういうことか。

「そりゃ、まともに戦えないくせに剣を作るからだ。戦うもの達を考えずに創製した剣が強いはず無いだろ？」

「っ！ ええい、何をしている！ こやつらを皆殺しにしろ！！」

怒りを爆発させたように顔は真っ赤に、頭から煙も立ち上る。

「…そろそろけりをつけてやる、ポトフ！！」

皆が魔法使いの杖を切り、縄で体を縛っていく。

「来るな……平民がああつ！」

チュレンヌも土の刃を放つ。そんなのが効くか、ゲスが。剣で刃を弾き、サクツと杖を斬る。そして首筋に剣を突き付けた。

「前衛は全滅。次の手を見せたらどうだ!?」

メフィストが面倒そうに、チュレンヌの身体に縄を巻いていく。

「ピサロ、頼む。」

後ろではメフィストがピサロに指示する。

「分かった。立て！」

彼も何を成すべきかを知り、傷ついた兵士も含め全てを一カ所に集めていった。

そんななか、ついに扉が開いた。

「…あんたがポトフ？ もっと若いと思ってたんだがな。」

老人だった。杖を杖として使い、ゆっくり歩いてきた。その瞳は鷹。なるほどデクレシテマやチュレンヌとは違う闇の目だ。

あの盗賊と同じ目。

「残念だよ。あの虐殺が行われる前にお前と会っていれば、きっと俺はお前を救おうとした……トリスティン、右大臣ポトフ!!」

正直な感想をぶつけた後、俺は剣を向けた。理解している。この男はこの国を救おうとした…だが味方は誰もいなかったのだろう。

だから強欲な者達に欲しい者を自由に集めさせるのと引き換えに財源と兵力を集めようとした。

そして、大量の死体は、更なる兵士にするために……

前を見れば彼が杖を振っていた。集まるのは大量の炎の矢。

「大地よ油となせ……」

ドロリと土が油に……ほんの少しだが、これは……。まあ錬金があるんだからこれくらいよくあるよな。

「死ね。」

降り注ぎ始めた。まあ川が周りにあるし……油で爆発的な焼却か。

ドカーン！！

「と、言うはずなんだけどなー」

アモン、一瞬それが現実になりかけるほどびっくりしたぞ……目の前の壁が崩れたら火の海になっているんだ。

「俺達はお前がそんなミスをするとは思ってないぞ。」

デュークめ……わざわざオープンハートで心を読みやがって……馬鹿が……

「ガルーム、端に隠れていた少年は？」

才人か……。

「連れて来てくれ。」

「……！メフィスト！ 逃がすな！！」

息を飲んだ後、鎖が擦れあう音が聞こえた。

「痛……」

「ここで待つてろ。 いざというとき守れない。」

痛みは後で治す……目の前の老人は愕然としながら、肩で息をし震えながら再び魔力を高めていた。

「それは無理だな。 あんたにもう魔法は使えない。」

吹きすさぶ風で彼はよろける。 そんな身体で魔法など使えない。

「私は……ただこの国を変えたかった！ 貴様に邪魔されるわけには行かぬ！！」

「……貴様と議論する気は最初から無い。」

奴は無茶をしながら魔力を杖に集める。

青：水系統の力か。 吹きすさんだ風は俺達の間にもう一つの風を作る。

「ミューデイ、 ストーム！」

濁流：中に紛れてるのは…… 剣か。 なるほどこういう光景は初めてだ。 剣の魚ソードフィッシュか。

茶色の激流を前にカウンターマグネで返す、火の矢など無力。 それでも逆転する手だてはいくらでもある…… 久しぶりにこれを使うか。

「禁術 66……」

「『66！？』」

誰かが叫んだ。 そう禁術の中で上位ランクかつ使用するのを禁じているのが、この66だ。 コンセプトは…… 『死』

「の1……マジックキラー！！」

別名……魔素斬り……。 左の中指と人差し指に宿した死の力が魔素を殺す。 魔素が死ぬ＝魔法の流れが止まると言うことは発動している魔法が消える。

対魔法専用でありつつ、全ての魔法に通用する。まさに『魔法殺し』である。

ただし魔素の流れを見極めるテクがいるので使い慣れてないと大失敗して、ダメージを負う両刃の剣でもある。

今回は……ここか。スパリと空間をなぞった瞬間に目の前に存在していた全ての魔法が消えた。

「馬っ……鹿な……」

ついに倒れる身体。

「ポトフ、今までの全てを悔やめ。抹消される覚悟は出来たか？」

「ガールーム、後は任せて構わないな？」

「いや、中にいる連中を全員引っ張ってきてくれ。」

「分かった。」

ピサロを残して全員が窓から屋敷に殴り込みをかけた。

悲鳴と鉄がぶつかる音が屋敷から聞こえてくる。毎回十人ほど束縛され、女、男分かれ出て来る。

「ありったけ探してこれで全員だ。」

子供が一人、メイドが16人、執事が4人。後寝巻姿の二人だけ。あと目を回す兵士が50人ぐらい。

「ずいぶんと集まったな。」

さて公開処刑かな。

「ポトフ。貴様の最期の言葉ぐらい聞いてやる。」

俺の予定ではこれからこいつを殺し、その首を持ちこの事件に加担した全ての人間を王宮に引ッ立てる。それだけの罪を犯した。間違いなく。

「離せよ！」

「ガルームを止める気なら悪いが放さない。奴は正しい。」

「正しい訳ないだろ！ あいつまた人を殺そうとしてるじゃないか  
！！」

「殺していい命はある。残念なことにな。」

才人……デューク……いいだろう、てめえらの会議が終わるまで待つ気はない。

「メイクマテリアル。」

ギロチンが現れガチャリと首が中に繋がれる。

「……ここで私を殺す気か？」

「言っただろ？ 最期の言葉くらい聞いてやる……と。」

「おじいちゃんを殺さないで！！」

…何？



「ダメよ！ 行っちゃダメ！」

子供には繋がれなかった縄。 俺の方に来る少年。

「罪を犯した者は例えどんな奴であろうが抹殺する。」

それに才人が吠えた。

「だからって…お前のただ一人の主観で殺すのかよ!!」

「……分かった。」

そこまで俺に殺させたくないか……面倒だな。

虚空が歪む。 剣が現れる。 ふたふりの双子剣。

「これは裁きと罰の剣。 これでいいだろう!？」

突き刺した剣。 刃が肉体と首を離した。 それが罰だった。

## 出陣、悪魔の騎士（後書き）

殺ただけでは意味がない。 壊ただけでは意味がない。 重要なのは全てを変革すること。 より良い方向へ、変えていくこと…。

次回ツインシンフォニー 中世に飛翔するもうひとりの使い魔 飛天の死神

次回もお楽しみに。

## 飛天の死神（前書き）

殺して殺して…俺は一生殺し続けるだけ。 誰にも俺を止められない。 ならば俺の正義はどこにある？ 正しいことはすべて悪。

殺すことでしか誰かを救えないこの身に…全ての正義は残酷に俺を貫くのか？

ならば…俺は………

## 飛天の死神

「ほら！ 歩け！！」

町を歩く亡者の群。 先頭では袋を持つガールームが。 他の悪魔達が間隔を取って、亡者の隣に立つ。

彼らが目指すはそびえ立つ白の建物。 あまりに真つ白で百合の花が似合うそこで赤い血の花を咲かせようと考えていた。

唯一彼の行動を非難した少年は…… 主の隣に転送されていた。

「……で貴族一家まるごと惨殺した揚句にメイド、執事達は解雇…… どうしようもない鬼畜だな。」

「確かにやり過ぎだ。」

サタンの言葉に頷くようにデュークが言った。

「それにあの少年の目の前でそれを行い腹の中の物、全部ぶちまかせるとは……」

「悪いがこの件は全て報告する。」

白い目をしてデビラーとアザゼルが言い放つ。

「……聞いているのか？」

「もちろん。」

「……俺達もポトフを殺す所までは容認する。 ジャツジメントセイバー、パニッシュメントセイバーを使用したのだからな。」

「だが、そのあと禁術66の4 デス・オブ・ザ・ライフにより家族を血肉にバラバラにした……これは単純な殺人だ。」

……あれは魔力で作ったハンドガンに死の魔法弾を装填し撃ち放つ。対象は皮が消し飛び、全ての骨を失い肉と血だけがその場に残る……グロテスクすぎる禁術。

「……このあとはどうするつもりだよ？ どうせ話は聞いてねえだろうし、退散するにはお前の指示を全部聞かなきゃ帰してくれないだろ？」

その通りだよ、アモン。

「後は全員縛り上げて王宮に連れていく……だけでいい。 町中を歩かせてな。」

月光が煌めく。 今夜は紅い月の方が強く輝いているな。

「何m「邪魔だ、失せろ。 波動波」

俺だけには見える青い光。 二人の兵士が吹き飛び扉を破壊して何処かに当たって、やっと止まる。

「どうした!？」

「何があつた!！」

それを見届けてから罪人を中に入れ、足を振り上げ地面を勢いよく踏み付けた。 城すらも揺るがす怪音波となり近い壁にはひびが入る。

ぐわんぐわん……

「何だこれは!？」

中の人々がエントランスに現れる。 …… 兵士ばっかだな。

「てめえらには用はない、 失せろ。 波動波。」

再び吹き飛ぶ。

……！

魔法の呪文、魔法使いがようやく来たか。

風の弾丸。速いし狙いも正確だ……だが魔素の流れは単純だな。すぱっと切り裂く。目の前で裂けた。

「……面白い技を使うね。」

陰から現れたのは灰色の髪をした男が出て来た。青が似合ってるが……何処か黒いな……

「あんたは？」

「君に言う気はないよ。しかも……貴族に平民……そんなに連れて何をしようというんだい？」

質問に質問で返すな……。それでも答えてしまうのが情けない所ではあるが……

「裁きに来たんだよ。愚かしい貴族を。」

「……平民を見下すのは僕の流儀では無いが、君は何に成り上がったつもりだい？」

「単純な質問だな？……悪魔だよ。」

蝙蝠の翼が広がり、消える。流石に顔を歪め剣を更に強く握る。  
更に足音が増えた。三つか。

「…平民か。」

片眼鏡をつけた金髪の男、こいつは結構年を喰っているな。  
更に赤いマントをつけた男、こいつも金髪さんと一緒だな。  
後は付き人の兵士か。

「……お下がりください。こいつは危険すぎます。」

男達は杖を構える。そして土と炎と風が放たれた。危険すぎる  
か。俺はそれに袋をほうり込み、それらがぶつかった所で魔法殺  
し、魔素斬り。

「「なっ!」」

「ポトフ……!!」

生首四つ。絶望で染まった表情を浮かべたあの顔のまま。

「くっ、貴様はやはり、ここで殺す! サンダークラウド!!」

あの青い服を纏う男の杖剣から稲妻がほとばしる。はいはい、魔素  
斬り。

掻き消えた。

「くっ!」

「サンダークラウド!!」



魔素斬り。それが何度も繰り返された。もちろん、時には別の魔法、あるいはギトーが使った『遍在』を大量に使ってきたが……無駄。

「もう止せ。貴様、何が目的だ？」

「こういう手段しかこの国は変えられない。だから……さ。俺の主のために。そう……魔法が使えない誇り高き貴族のために。」

「……まさか、お前は……」

「?! もしかして君の主は……」

二人は理解し一人は首を傾げる。俺はそれから武装を解いた二人と対話することになる。

その場で。生首を燃やしつくして、そしてチュレンヌ達は解放しないで。

金髪の名はレオン。銀髪のおじさん、いやまだ26だという男はワルドと名乗った。ルイズとの関係は父親といいなずけだという。ちっ、ラッキーか……アンラッキーか……

「ではまず貴方達に質問します。町を管理していた二人、デクレシテマとチュレンヌ。この二人の管理がどうなっていたか、聞いていますか？」

「……知らないな。僕は魔法兵士隊の隊長だね。」

管轄外って事か。

「すまないが、私も知らない。」

……そうか。俺は立ち上がりチュレンヌに双子剣を突き付けた。  
当然ジャツジメントセイバー、パニッシュメントセイバーだ。

「チュレンヌ……貴様の罪を曝せ。」

ふたふりの内片方、白い柄を持つ剣を彼の腹に突き付ける。血で  
はなく何処からか声が聞こえてくる。女の声だ。

この男は7年と二ヶ月前から商業を営む者を中心に通常より1・8  
倍の税を要求し七年間、自らの富とする。

王宮に対しては必要最低限の税を献上し自ら大量の金を着服する。

「…兵士よ、杖を剥脱し牢屋へ連れていけ!!」

「兵士はどうするつもりだい？」

そうだな…こいつらは……

「雑用でもさせとけ。」

それに……俺はメイクマテリアルで双子剣を大量に複製し城の中を

駆け巡らせる。

「貴様、何w o…ぐっ！」

レオンの胸に深々と剣が突き刺さる。当然もう一人の方にも。

「貴族を全て裁く。 誰にも邪魔はさせない……全ての悪を裁く…  
…！」

この日城に雷が落ちた。 兵士が何人が死に、更に厨房では火が急に強くなりコックが死に……と城での事故死がこの日以来急増した。

## 飛天の死神（後書き）

死神は笑う。 笑い疲れて落下した。 誰か…俺を止めて。 自分ではもう止められない…誰か…助けて……………

次回ツインシンフォニー 中世に飛翔するもうひとりの使い魔 償いの宿

次回をお楽しみに

## 償いの宿（前書き）

ちよつと、下書き紛失、考え込んでこのように収まりました。

## 償いの宿

「ふふふ、はっははは！！！」

暗闇の中で悪魔が笑う。 双月に照らされ屋根の上に立つ悪魔。あの日城にいた、貴族の半分以上が翌日牢獄に閉じ込められた。

全ての罪を明らかにされ、 横領、殺人を行っていた貴族は町の掃除を強要された。

主、友、大切な人を差し置いて。

鞭を扱い武器を扱い、悪魔は貴族を彼らが平民と接していたように扱った。 貴族は平民からは石を投げられ、その家族は路頭をさ迷う。 それでも悪魔は何の慈悲を与えず武器を振るった。 力尽きた者が出始めた。

だがそれで悪魔は止まらなかった。 平民にも牙を剥きはじめた。貴族と密接に繋がり、 不当な営みを行う者を王宮に突き出しはじめた。

全ての店を調べ、 適切なアドバイスを与え悪事を問答無用で裁く。

あまりに強引に。 彼に全ての罪を明らかにする剣を持つが故に。

業火と雷撃、嵐が過ぎた後悪魔は一番豪華だった宿の布団に倒れ込んでいた。

「……………やっぱ、最低だな。暗黒の救世主様々は。」

いくら正しい事をしてても全ての人は俺を恐れ、憎む。

後のプランは残っている貴族に、王女に託してある。脅し付きだが。やってくれる。後は…………。

「ようやく見つけたわよ。」

ちつ…………もう探し当てたのか。

「王宮から人形をコントロールしてたからその人形に当たれなかったけど…………。夜中、飛び回っていたのは貴方で間違いないわね？」

俺は確かに自らの手で奴らを鞭打ち、力尽きた連中を焼いた。

だが昼は最初に死んだ兵士の遺体を腐敗状態を遅らせた上で操作し、夜だけは影に紛れて飛び回り引っ捕らえる。この二日間…………そんな事ばかりしていた。本体は王宮の庭で死体进行处理。人形は掃除をせつせと行っていた。

「……………何で暗黒の救世主に戻った？」

この口調はカナカ。

「そうすべきと思ったまでの事。」

「…才人君、相当怒ってたわよ?」

「ユキナ、それは平和ボケした日本人だからだ。才人も…恐らく戦いを知らない人間は俺の行為を否定するだろう。だが俺は正しい。あのふたふりの剣に過ちは何一つ無いのだからな。」

彼女は口許を歪め氷の腕を突き付けた。

……貫いてはいないが…

「何の真似だ…?」

氷が部屋を満たしていく。ディーネが水蒸気を発生させ、テテイが拡散させ、ユキナが凍らせているのか?

「いい加減にしてよ。再びあの苦しみと悲鳴に満ちたあの頃に戻りたいの?」

ユキナの力を維持したままテティが出て来るとは…

「安心しろ。俺は変わらない。今度こそ闇には落ちずに暗黒の救世主になるさ。」

何故自分がそんな事を言うのか分からない。少し黙って…ほおをなでられて…彼女は言った。

「隣、良い?」



好きにしろ…。

ほんの少しだけ枕方向にずれる。 …何ですれる必要性があったんだ？ 彼女は左に座るのに…。

「で…あれがあんたの正義？ もう少しまともになってくれたと思っただけの昔と一緒なのね。」

「…メガラ…この世界の憎しみが俺を闇に…暗黒の救世主に戻しただけのこと…。」

「……」

沈黙とともに刃で貫かれたような痛みを感じ腹を触るが…何もない。

「ガールーム、言ったよね『俺たちがあいつらを導く』って。 …その気持ち！どこに消えたのよ!？」

彼女らが苦しみ…帰ろうと言い出した時確かにそう言った…だけど実体はもつとひどくて…良い奴もいれば…悪い奴もいる…欲望に身を任せるのはどの世界においても同じ…

「結局…俺のしたいことは世界破壊だったのかな…。」

「…分かんないよ…あんたの考えてることなんて…」

またおなかが痛い…

「けどさ…帰ろ？ ルイズちゃんたちにもう一度会わなきゃダメだよ…。」

「そうだな…というか学院に帰ろうか…」

学院という言葉知らない彼女ですら頷く…もうこの町に残るのは…いやだった。

## 償いの宿（後書き）

俺は才人の挑戦を再び受ける…怒りに満ちた少年の拳が俺に届くことなど…ない！

次回 ツインシンフォニー 中世に飛翔するもうひとりの使い魔  
私闘、リベンジそして暴走

次回をお楽しみに

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8321p/>

---

ツインシンフォニー 中世に飛翔するもうひとりの使い魔

2011年7月18日13時03分発行